

337
201



始



特205
502

支那内戦従軍記

佐々木 到一 著



自序

本書は昭和三年五月に起つた彼の濟南事件の直後、南京に於て執筆したもので、支那國民革命軍の北伐に従軍した際に於ける私の所見を漫録したものである。當時の私はかなり複雑な感情に支配せられてゐたが、この漫録を今校正するに臨み、當時の私の眼に觸れたあらゆる事態に對する私の觀察がかなり冷靜なる客觀を失なつてはゐないことを發見する。假令漫録とは云へ私は事實を正確に報告せんとする私の良心に叛いてはならないと思つてゐる、この意味に於て私はこの漫録を今回上梓するにとに何等の躊躇をしなかつた。

隣邦の陸軍に關しては私の一つの意見と信念とを持つてゐる、だがそれは日支の關係が今のやうに尖鋭化してゐない時に論ずべきであると思ふ、だから讀者は本書を濟南に於ける日支兩軍衝突前に於ける記録として讀んで戴くことを希望する。過去現在將來に於ける日支の關係に就いては私にもそれ相應獨自の意見はあるが、漫談を主とする本書のうちにはそんな堅苦しい問題の片鱗も見出し度くは思はないのである、私は只徹頭徹尾當時の所感を率直に述べたつもりである。

昭和六年四月十一日

於 豊 橋 著 者 識 る す

支那内争戦従軍記目次

南京から徐州へ

一 蒋介石と宋美齡	一
二 従軍	四
三 鐵道輸送	八
四 徐州—張公館	一二
五 徐州の古蹟	一五
六 以黨治國—以黨建國	一八
七 總攻撃の準備と排日ポスター	二一
八 侍從參謀、侍從副官—黃埔出身	二四
九 戀愛と皮帶	三一
一〇 第四軍—草鞋菅笠の廣東兵	三四
一一 出兵是非問答	三六
一二 赤い顧問の話	四一
一三 無聊の一日	四三

徐州から戦線へ

一四	鐵甲車—裝甲列車	四八
一五	農村地獄	四九
一六	輕便鐵道	五四
一七	俘虜來	五六
一八	俘虜の尋問	六一
一九	貧村の舍營	六五
二〇	擬東亞會議—支那代表の發言	六七
二一	擬東亞會議—日本代表の主張	七一
二二	さん底生活の窮民	七八
二三	開戰劈頭の戰勝—第一軍團の戰績	八二
二四	無慘なる同胞殺戮戰	八五
二五	紅槍會	八九
二六	右翼兵團の遲滯—湖西方面の敗戰	九二
二七	大帽子—小帽子—老毛子	九四
二八	武裝女同志	九七
袁州行營		一〇〇
二九	私の通信難と革命軍の通信	一〇〇

三〇	列車の追突	一〇三
三一	天鷲下蛋	一〇六
三二	濟寧へ	一一〇
三三	脫糞難	一一三
三四	曲阜謁て	一一六
三五	衍聖公—孔子七十七代の裔	一二〇
三六	支那語は語氣	一二四
三七	再び出兵是非問答	一二六
三八	再び排日ポスター	一三一
三九	馬に關する問答	一三四
四〇	軍隊改造難	一三七
袁州から濟南へ		
四一	陣中の天長節	一四二
四二	泰安肥城陣地の攻撃—知事の怪我の功名	一四五
四三	兵站列車	一四九
四四	革命の寄生虫	一五三
四五	大雷雨の一夜	一五七

四六	情報蒐集所—停車場の奇遇	一六一
四七	開城の條件—張宗昌の妾の弟	一六六
四八	將棋の駒—支那兵	一六九
四九	ハンドカー	一七一
五〇	政治訓練部	一七四
五一	鐵橋—小行李馱馬	一七八

南京から徐州へ

一、蒋介石と宋美齡

本年の一月か二月だつたと思ふ、その晩は南京では珍らしくも雪が降つてゐた。私達は蒋介石の宴會に招待されてゐた。

當夜の宴は、わが驅逐隊司令の送別の意味を兼ねてゐたと思ふが、只一桌の至極小人數のための催してあつた。

蒋介石は、美齡嬢と結婚してからは、宴會の度に必ず夫人を出すことを忘れなかつた。それが助からぬことには、日本人の少いこの南京で、日本人のための催しとなると、不運にも私はいつも夫人の隣席に坐る光榮を與へられてゐたからであつた。

北京語を知らぬ此のヤンキー、ガアルは、私には、手があつた。尤もこゝで一吋斷つて置かなければならぬのは、私は何も美齡夫人に反感を持つてゐるわけではない、只私は、幸か不幸か國民黨の人達が一とう眼のかたきにしてゐる「帝國主義的英國」の言葉—英語—が頗る不得手であつて、美齡さんは八年もアメリカにゐて、それが自國語よりもうまいときてゐること、私が人一倍はにかみ、屋で

殊に婦人には必要以上の敬意を拂ふために、ともすれば言葉が溢ること、だから男同志の話が、この天女の出現以來、非常に話にくく、なつたので、そういふのである。

序てながら、一寸申添へて置くが、支那の婦人は他に嫁した後もその舊姓を失はないこと、なつてゐる、だから宋美齡は蔣氏に嫁しても依然宋美齡であつて、蔣美齡にはならない。併し従前は、一今でも一婦人の人格を認めないせいであるか、單に蔣宋氏一蔣家に嫁した宋氏と云つて、貞子だとかみよ子だとか一日本て云へば一呼び名を云はない。

「あなたの奥さんのお名前は？」

「佐々木快子。」

「エ、それでは日本人は同姓でも結婚するんですか？」

「同姓だつて、民法上に禁じてある近親以外の結婚なら構いません、だが日本では婦人が嫁すれば、舊姓はなくなります。」

「ふふーん？」

斷つて置くが、支那では、たとひアカの他人でも同姓は娶らぬ。

さて當夜は、蔣介石の縁續きて、山西の人だけれど、俺は孔子七十幾代の裔だぞ自稱する孔祥熙もゐるたやうに思ふ。



妻 夫 石 介 蔣

雑誌も盡きた時、蒋介石の秘書格のL—この人は、ほごんぎ四十歳だが、三十歳前後に見誤られる果報な男で、珍らしくまだ未婚の人だったが最近とうとう結婚した—が

「貴方の著書を読みましたよ。」

と云ひ出した。私はハツとした。それは直ぐに、私が、昭和二年四月に出版した、「南方革命勢力の實相と其批判」と題する拙著を聯想したからである。該書は、革命軍の全盛期であつた大正十五年秋の頃の調査に基づいたものであつて、後から見れば、かなり褒め過ぎである—尤も皆條件附ではあるが—
「けれ共、蒋介石に就ては随分無遠慮にこき卸してあるので、新婚早々、そして「革命は家庭より」と云つて、大に脂下つてゐる蒋介石夫妻の前で、聞く者も聞く者ぢやと一應は思つたが、空恍けて斯う云つて見た。

「Lさん、それはさの本でせうか。」

「支那陸軍改造論です。」

「ア、それなれば何の差し障りもない。」

「あれは緒論です、私はまだ具体論を書かねばなりません。」

蒋介石が口を挟んだ。

「貴方はいつ其具体論を書きますか。」

アメリカ流の夫人の側に在りながら、それ迄何一つお世辭も云はなかつた私として、只一つのお世辭が此際見付かつたわけだ。妻君の面前では、其夫を尊敬するに限る。

「いや、到底も書けそうにありません。第一其材料がありません。よしんば書くとしても、お國にゐる間は御遠慮しなければなりません。」

私は至極慇懃にそう答へた。が蔣介石も直ぐ返して、お世辭を云ふことを忘れなかつた。

「是非書いて下さい、参考にします。」

「いや駄目です、外國人の私には、適切深刻な解剖はできない筈です。」

是以上此の話題を進めることは、外の賓客に遠慮すべきであると思つて、私は言葉を切つた。

やがて辭して歸つた。珍らしくも、綿のやうな雪が横降り顔に吹き付けてくる。驅逐隊司令が私に云つた。

「宋美齡は美人だねー。」

「……………」

二、從 軍

私は自分自身の研究のため從軍を希望してゐた。それは支那陸軍改造問題に最後の結論を得んがためである。

めである。

私は支那軍を將來の敵と見て調査をしてゐるのではない、手をつないで進む兄弟の國の陸軍として見てゐるのである。兄弟の國の兵が強ければ、協力する力が強くなるのは當然だ、そして協力するの必要が近き將來に於て起るだらうと思ふ。

私は第一革命—辛亥革命—當時から、國民黨のたれかれを知つてゐる、だから民國十一年から廣東に駐在した折にも、國民黨の人達は、直ぐに私を理解してくれた。事實私は公明正大に行動をしてゐる、決して彼等の内情を秘密に調査するやうなことはしなかつた。親しい朋友の間に、そんな必要がある筈はない。

私は嘗て所謂軍事顧問と云ふものをしたことがない、その機會が無いのみならず、私はそれが嫌である。只私は、終始國民黨が早晚支那を牛耳るであらうことを確信してゐたので、其陸軍と我陸軍との間に精神的の連鎖を作ること、比較的最もそれに接觸してきた私の當然の義務であると信じてゐるからである。

南京事件が起つた。その當時の私は事件を起した當事者を憎んだだけ共、支那の革命と蔣介石の立場には、依然として理解を續けて來た。それも一部の誤解を受けた、併し誤解は時の力が解決するであらう。

却説、私は餘りに自家の爲に辯じ過ぎたことを讀者諸君に謝したうへ、此項を續けねばならぬ。

三月下旬の某日、總參議の〇から電話がかゝつて來た。

「あなたは從軍を希望して居られましたね。總司令は貴方の從軍を歓迎してゐます、出發等に就ては何れ副官處長がお伺ひする筈ですが、取あへず……。」

日本人になじみの多い、そしてみんな日本語でもよくわかる〇が流暢な日本語でそう云つた。

「それはさうも有り難う。」

電話を切つた。

其翌日總司令部の辨公廳長のWミ、副官處長の〇とがわざわざ訪問してくれた。私は親切を感謝しつつ、いろ／＼と打ち合せた。

陣中ではなるだけ人の注目を惹かぬために、私は革命軍の軍服を新調したが、出發の當日になつて出來て來た、それは上衣が小さくて着られなかつた、で仕方なく着古しの霜降り詰襟服を着て其上に皮帶を帯びた、足には革のゲートルを。

携帶寢臺と夜具と小さな鞆が私の行李の全部であつた。

其の頃丁度支那から歸朝を命ぜられてゐた同僚のKが北京から南方視察に廻つて來てゐた。其Kが私の從軍姿を寫眞に撮つてくれた、そして自分も私の上衣と帽子と皮帶と革脚絆を剥ぎ取つて撮した

りした。

庭には桃の花が咲いてゐる、さすがは南國の春だ、私には死の首途であつた此從軍も、其の時の私の心には、何の屈托もなかつた。

「俺は濟南迄行くかも知れないよ。」

「革命軍が濟南迄行けるつもりか。」

「俺にはなんとなくそう思へる。」

「戲談だらう、臨城あたりから又逃げてくるなよ。」

「貴様は山東軍を見たか。」

「見ない。」

「さうも戦意がないやうだ。強ち革命軍が強いとは云はぬ、併しそれは時の力だ。」

「濟南迄は無理だよ。」

「俺は直覺するのだ、革命軍のこゝだけは、いつも俺の直感が當るやうに思はれる。俺は直覺するだけの豫備智識を持てるからだと自惚れてゐる。」

「そうかね。」

私は東京の友人に送る名刺をKに托した。

「祝御健康、小生は濟南迄從軍する所存である」と書き添へた。

霞む野や明孝陵はあのあたり
明陵の春闈や朱氏の夢

三、鐵道輸送

軍用列車が、午後九時に浦口驛を出るといふので、私等は津浦線のランチで揚子江を渡つた。夜の幕が、低く垂れさがつて、黄く濁つた水面はもはや見るこゝがてきなかつた。その闇のなかをざわ／＼と浪を切る音が、機關の音のあひ間／＼に聞えた。江岸近くに碇泊してゐる我驅逐艦の舷側には鮮かな電燈が水面に映つてゐる。顧みれば下關の屋並にも、暗を彩る無數の燈火が、私達のランチを見送つてゐた。

津浦鐵路の輪轉材料は、山東軍と孫傳芳軍とが、其大部を北方に運び去つたので、満足な車は一つもなかつた。破損一つ見當らぬ我が國の汽車に見慣れてゐる私の眼には、さの車もさの車も、がらくたに見えた。

機關車は満足な牽引力を持つてゐなかつた、満足なものは北方軍がそれを運び去つたからである。

九輛から編成された私等の軍用列車のうち、其只一つか三等客車であつた、それを總司令部辦公廳と參謀團の將卒用に當てられてあつた。あとはみな貨車だつた。發車前停車場司令部員が、ひとひとり乗車者の資格を調べて廻つた。冒牌―誤魔化し者―がゐるて、貨車の方へ追ひやられたが、素直に出て行つた。

僅か九輛の客貨車を牽くところの此の機關車は、病み疲れた老人があへぎ／＼坂を登るやうな速度でのろ／＼と走つた。

青白い月が、東の空から、靜かに其顔を擡げ、果てもなき麥畑を一面に照らし始めた。青疊を敷き詰めたやうな其小麥の廣野には、微風だも吹いてはゐなかつた。靜寂其もの、やうな、江北の野を、此病廢の機關車が、がたりごとりと物憂げに、其重々しい足を運んで行つた。

車内は、人いされて臭かつた。不潔な兵卒の体臭と、着換えを持たぬ軍衣袴と下着とから發する不快の臭氣と寢息とで、胸苦しくなるくらゐ、私は屢々窓を開いて換氣をやつた。

デッキの上に、警戒兵が二人。着劍で立つてゐた。其の内の一人、三十五六に見える一等兵である。時々車内に這入つて來ては、シートの肘つきに腰を掛けて、なんとか云つてゐる。時にはWの顔をすら窺き込んでしゃべり立てる。Wは遂に腹を立てた。

「貴様は何隊の兵だ？名はなんと云ふのだ？規律が無い。」

Wの勤務兵が、拳銃の引鐵に指を懸けて、二三人身構えした、すはと云はど撃つのだ。

「支那の軍隊は物騒だな、氣の弱い者は中に居れないね。」

私はそう思つた。

だが此の老兵は黙々として立上がった。罰に、非番の時間を、三十分程起立させられてゐた。夜半過、列車は明光に着いた。月は中天に懸り、プラットホームを眞晝のやうに照してゐる。

不意に、一群の兵隊がホームに現はれ、ぎや／＼と私達の客車内に入り込んで来た。

彼等の隊長とも見える若い將校が、客車の入口に近く腰を掛けてゐる下級の將校に向つて、何ごとか聲高に罵り始めた、それは此所から前線に輸送する軍隊のために、五輛の車をこの列車に連結するといふのである。將校はそれを拒絶してゐる、それは無論、機關車の牽引力が、此上の過勞に堪へないからである。

第四軍の兵は―彼等は新たに廣東から増加して来た第四軍の兵であつた。―肯かなかつた。罵り合ふ聲は次第に高くなつた。

Wは、其の隊長と見える若い將校を呼んだ、そして其隊號を聞いた。併し傲慢なる此若者は「それに答へる必要がない」といつて、からんで来た。Wは、輸送指揮官の職權を以て、威丈高に詰め寄つたけれど、此不軍紀な若者は凹まなかつた。結局其の一隊の隊長を呼んで、直接交渉することになつ

たが、纏てやつて来た若い營長は、幸にも嘗てWの學生であつたので、頗る慇懃に應接し、そして沿道には土匪が出没すると云ふことになつて、護衛の爲めに一營の兵が、此列車に増加される云ふので覺がついた。

只さへ足の鈍い此の機關車が、更に五輛の重荷を負はされて、一層足が撓らなくなつた。

輪轉材料の不足と、野戰交通勤務の未熟と、統制の破壊とである。よしんば、軍車管理處と稱する機關が設けられてあるにせよ、計畫は杜撰、實施は亂雜を極めたものである。之が爲め、輪轉材料の使用と列車の運行とが、最大効程を揚げ得ないで、到る處に無駄ができる、時としては列車の衝突さへ惹起したのである。

翌朝蚌埠に着いた。そこで機關車はとう／＼故障のため動けなくなつてしまつた。

修理のため、四時間以上徒費された。兵はプラットホームに出て、物賣りから、燒餅、果物、駄菓

子なきを買つて、むしや／＼やつてゐる、柱にもたれてこくり／＼と船を漕ぐものもあつた。

やがて修理なつて發車した。半身不隨の此不運な機關車が、それでも徐州迄さうにかこうにか十

四輛の重荷を引ずつて、その夕刻に到着することができた。

四、徐州—張公館

總司令公館が張文生の舊宅に設けられてあつた。それを總司令を始め高級幕僚の休息所に當てられてゐるが、夫等の人達は常住總司令部の内に起居してゐるので、此公館は蔣介石の友人達で徐州を訪問する人を招待するのに使はれた。

私は其一室を當てがはれて、こゝに行李を解いた。

世話を焼いてくれる副官がゐた、徐州出身だと云ふ、何から何迄、私の暫らくの間の起居に必要な日用品迄も調べてくれた。

私は副官が副官處長に電話してゐるのを聞いてゐた。

「接待煙草が無いから買つて下さい。」

「……………」

「不招待？」（接待はしないつて？）

副官はおうむ返へしにそう云つてゐる。

私は總司令部が禁煙であることを知つてゐる、それでなく共、私は此從軍間、出来るだけ先方に迷惑を懸けまいと決心してゐるので、急いで副官に、「さうか一切構はないやうにしてくれ」云つた。

彼は副官處長が最近交代したので、萬事が不行届であるに類りに氣の毒がつたけれど、私はそれよりも一層氣の毒になつた。こう云ふやうに親切にやつてくれるので、たまに不愉快なことがあつても怒る氣にはなれない。

一人の勤務兵が派遣されて私の許に來た、見れば昨年四月始めて南京に來た時に、私の世話をしてくれた兵であつて、其時は上等兵であつたが、今中士（軍曹）になつてゐる。

「お前か、又世話になるよ。」

「あの時は下關—南京城外—の招待所にもたつて。おまえは其の後ずっと南京にゐたのか。」

「うん」

民國以後の第二人稱は、英佛獨語の第二人稱と同じく一種類で、敬語はない。それに此湖南人は特別に言葉がぞんざいだ。だが併し一年以前の顔なじみだ、親しみは深い。私は此兵と丸一箇月を起居を共にした、私が濟南事變にあの通り遭難したときには同國人のやうに親切に介抱してくれた、人情に異りは無い、之は後のことであるが、遭難した私が、方振武の兵に抑へ切れぬ憤りを感じ乍らも其他の革命軍を無條件では憎めなかつた私の感情も、こんな所に胚胎してゐるのである。

此の兵の湖南の田舎の土語は、なか／＼聴取れなかつたが、一箇月の終り頃には、やつとわかるやうになつて來た。

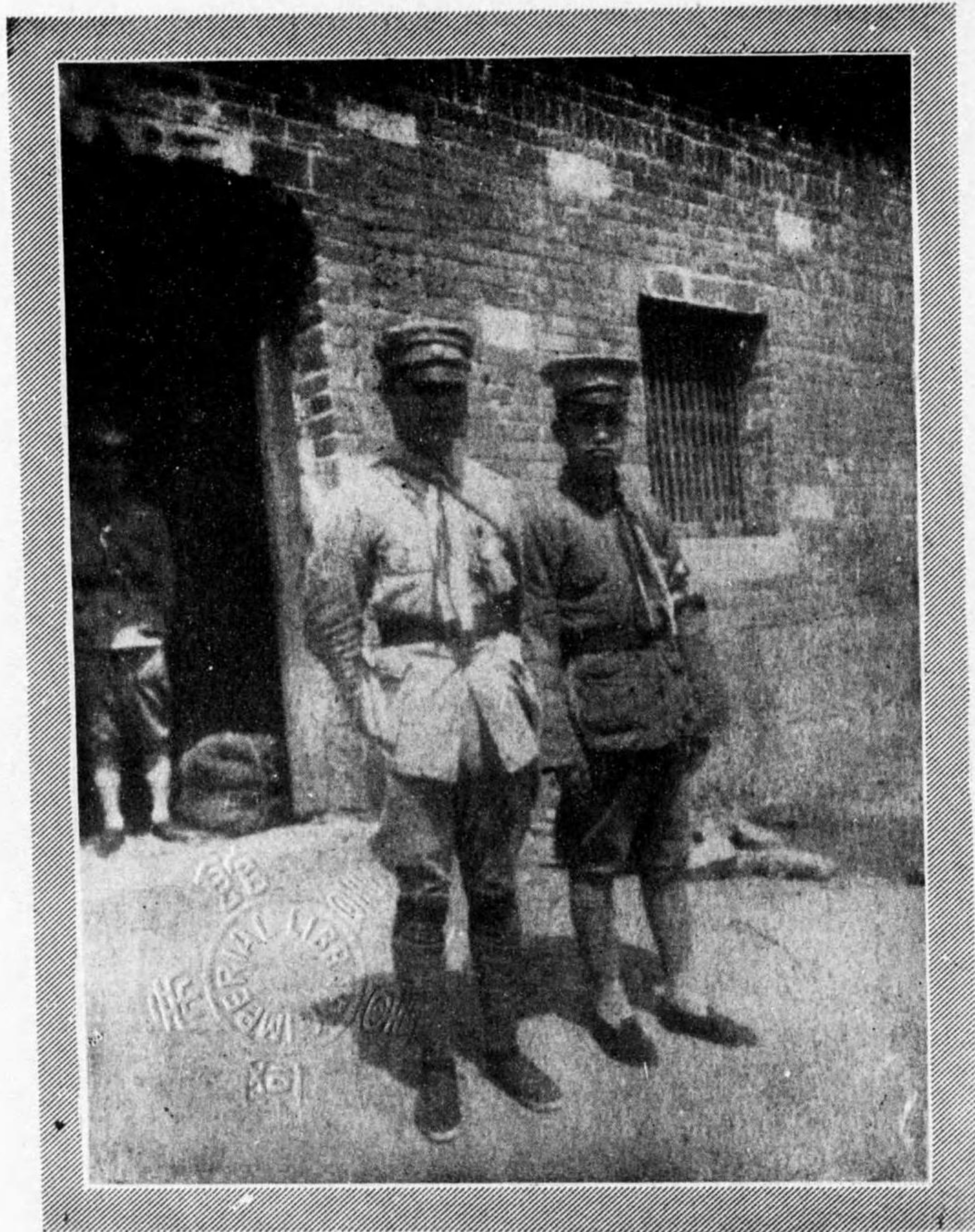
蔣介石から、濟南迄と云つて、若い少佐の副官を一人付けてくれた。Yと云つて、黄埔軍官學校の第三期生、本年二十二歳の侍從副官、廣東人である。この副官は、外國人の私のために實に忠實に面倒を見てくれた、殊に私が遭難した時には、身を以て私を庇つた、その上、自身の到らぬ所から、斯様な危難に遭はせたのは實に濟まない云つて、幾度もく私のほうが恐縮する程、詫言葉を述べた。私が憤らぬと云つて批難する人々は、人情に異りがないことを忘れてゐるのだ。

蔣介石も訪れて來た、副官に命じて私のために沐浴の心配迄してくれた、部屋が悪い云つて、自分で檢分して換えてくれたりした。

徐州に待機の十日間、私は毎日市街を廻つて軍隊を見た、がそれでも無聊に堪えなかつたので、古本屋を漁つた。併しろくな書物はなかつた、或時江蘇書館と云ふのがあつたので、飛び込んで見るとそれは藝者屋であつた。書館が藝者屋であることを忘れてゐた、それは其隣家がほんもの、書店であり、其書館の構えが如何にも本屋然としてゐるせいでもあつた。

徐州附近は一帶に古蹟が多い、私は府志を見度いと思つて古本屋を物色したのだつたが、求められなかつたで、副官に頼んで土地の紳士から借りる希望を持つてゐたけれど、戰陣の間に此閑日月は、

情況が許さなかつたと見えて、遂にしんみの斡旋はしてくれなかつた。
徐州の北門を出た所は、一帶に小高くなつて直ぐに大きな堤防の痕跡だなど云ふ感じがする、前面



勤務兵T軍曹副官Y少佐

は緩傾斜の谷地をなし、前岸に在る隴海鐵路の停車場と相對してゐる、こゝは舊黄河の河床跡であつて、北門外に之を記念する牌樓が立つてゐる。堤防の上には河の中から上がつたと傳へられる鐵牛が蹲つてゐる、なんでも徐州から左程遠くない所に、昔の黄河の長い橋が今でも残つてゐると聞いた。

五、徐州の古蹟

徐州驛に程近く、線路を越えて東北側に起る一座の秃山がある。山巔に近き所に石を墜り出してゐるので、全山は磊々たる割栗石を以て被はれ足の踏む所もない。眼をあげて北方を望めば、塵煙模糊の裡に平野が展開され、青い麥畑の中に、寸馬豆人の蠢動するのが見える、柳泉驛の東西に亘る山脈は低い屏風の如く行く手を阻み、そして紫色に霞んでゐる。徐州城の内外には、濛々たる砂塵が立ち昇り、指呼すれば、范僧が墓、項羽の戲馬臺、雲龍山等の眺が一眸のうちに映ずる。新緑が灰色の家屋の間を點綴し、殺風景な色彩を和げてゐる。城外所々に在る水溜りには、日光がぎら／＼と反射し、水邊に群がる藍色の豆人は、村婆野娘の洗濯するものであらう。

之も亦雄渾なる一幅の繪である。

昔項羽が、こゝに一代の覇を争つた、成敗利鈍は關する所でない、之も亦男子一代の痛快事ではな

いか、今の蔣介石は、十五萬のつはものを引具して、來るべき總攻撃の幕明けを待つてゐる。彼には
鬪將謀士があり宋美齡がある。黄埔軍官がある。

支那なる哉—丈夫兒は—支那なる哉。

「少尉任官以來二十二年、俺は今中佐だ、恥かしいか？なんの恥かしいことがあらう、俺は支那の中
佐ではない。」

私は、市ヶ谷臺を巢立ちした生年十九歳何箇月の當時を振りかへつた。

私は昂然として天と地とに嘯いた。だが淋しさが、私の心の底の何處かに湧き上がってくる。

「M君、項羽は豪かつたね。」

「彼も一種の英雄に違ひない。」

「吾何を以て江東の父老に見えんやと云つた、今の支那の軍人にも其意氣が欲しい。」

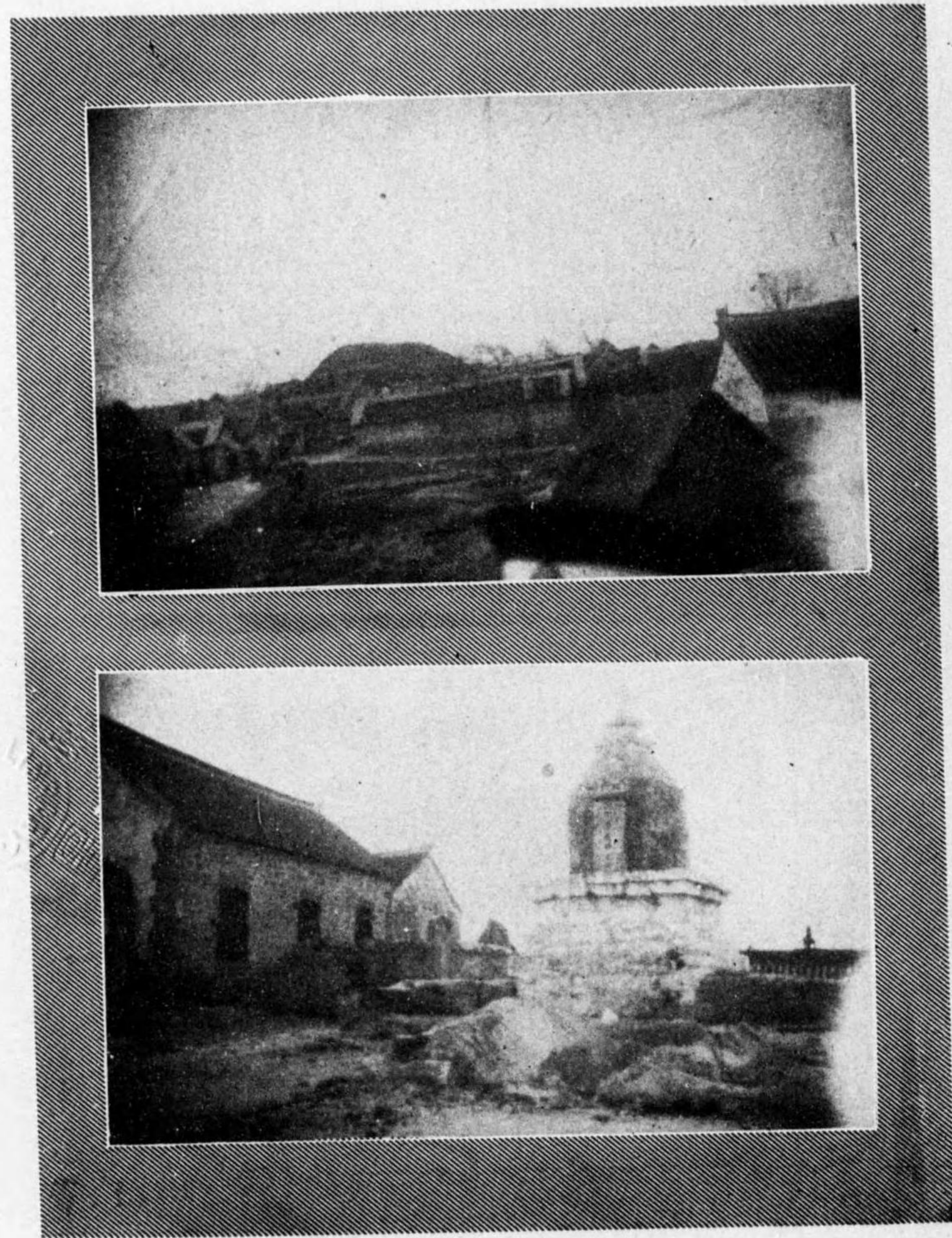
「今だつてある。」

「項羽には虞姬がゐたね。」

「美人だよ。」

「見たやうなことを云ふな。」

「兒女心長、英雄氣短だ。」



塔の山龍雲(下) (墳土の央中)墓の増范るけ於に州徐(上)

「革命は家庭よりのか、……いや革命は個人から……だ。」

「君は皮肉家だね。」

「皮肉は僕の生命だ、僕から皮肉を取り去れば僕は陰気な男として残るだけだ。」

日本留學生のMと石ころの禿山の上でこういふ問答もしたのだつた。」

此山の中腹に、南を向いて張良の廟宇がある。廟は何の奇もなく荒廢してゐるが、中に藏してゐる碑文には、見るべきものが少なくない、詩に暗い私は、同行したMの説明を聞いて、手を打つて興じた、其中の一つには不遇の范僧とを對照して、張子房の幸運を唱つた面白い詩もあつた。一々書き取つた手帳は、濟南で遭難の際に支那兵に掠奪された。今思ひ出しても惜しい。

山の上の鐵道官舎に、航空部の若い將校がゐた、これも皆二十代と見える青年揃ひである。やがて山を降り、馬車を范僧の墓に走らせた。

墓は比高約二十米の土饅頭であつて、其下に廟ともつかぬ建物があつた、何れの時代かに、盜賊が墓を暴いて武具を竊んだと云ふ。山の下には豚が草の根を掘り返へしては食つてゐる、上には村童が嬉々として戯れてゐる、私達も其上に登つた。

人も知る范僧は項羽の智恵袋、後項羽に遠ざけられ、背に疽を發して憤死した。

陽炎の廣野に暮れて驢馬の鳴く

馮玉祥が、河南の彰德に在る袁世凱の墓の取り壊はしを命じたと云ふ墓迄「打倒」されるに至つては實に世も未だ。

戲馬臺は、小高い所に建てられてある三階の小亭である、板が悉皆取り外づされて筒抜けのがら、洞になつてゐる。項羽が虞美人とこの亭の三階から競馬を見たところ、亭の側に項羽が馬を繫いだと云ふ石があるが、或は後世の人の作りごとであるかも知れぬ。

項羽宮殿の跡と云ふのも見た、柱の石に龍が彫りつけてある、いつの世の作かわかつたものではない。

雲龍山には石の大佛と、何とか泉と云つた井がある、廟宇は兵隊が占領してゐる。
春風徒らに春草を吹くのみ。

六、以黨治國—以黨建國

徐州の街を散歩してゐた時、第十軍司令部の門前であつたと思ふが、以黨建國の引幕が掲げられてあつた。以黨治國は國民黨のモットー、即ち民國十三年廣州に於て國民政府が成立して以來、唯我獨尊的—と云つては失敬だがモットーとなつてゐる。それより以前は大本營と稱し、孫中山は大元師を稱してゐた、だから今日國民黨人が張作霖の大元師を嘲笑するのは、間違つてはゐないかと思ふ。

閑話休題、私は所謂「以黨治國」主義に疑問を持て居り、又國民黨の勢力が長江流域に進出した後の事實は、此モットーを裏切つて、共產黨も、所謂官僚閥も、「以親治國」と云つてよい程の親族舊知等の任用の事實あるを知つてゐるので、同行してゐたMに尋ねて見た。

「以黨建國は同じく國民黨專制にしても、まだましだね。」
「以黨治國ではいけない、餘りに専横だ、反對者が多い。」

然り、廣東一省をも支配し得なかつた時代に於ては、一黨を以て國を治むることも可能であつた。此時代には、黨人に非ざれば官吏に任用しなかつたことも、首肯し得べき理由はあつた。

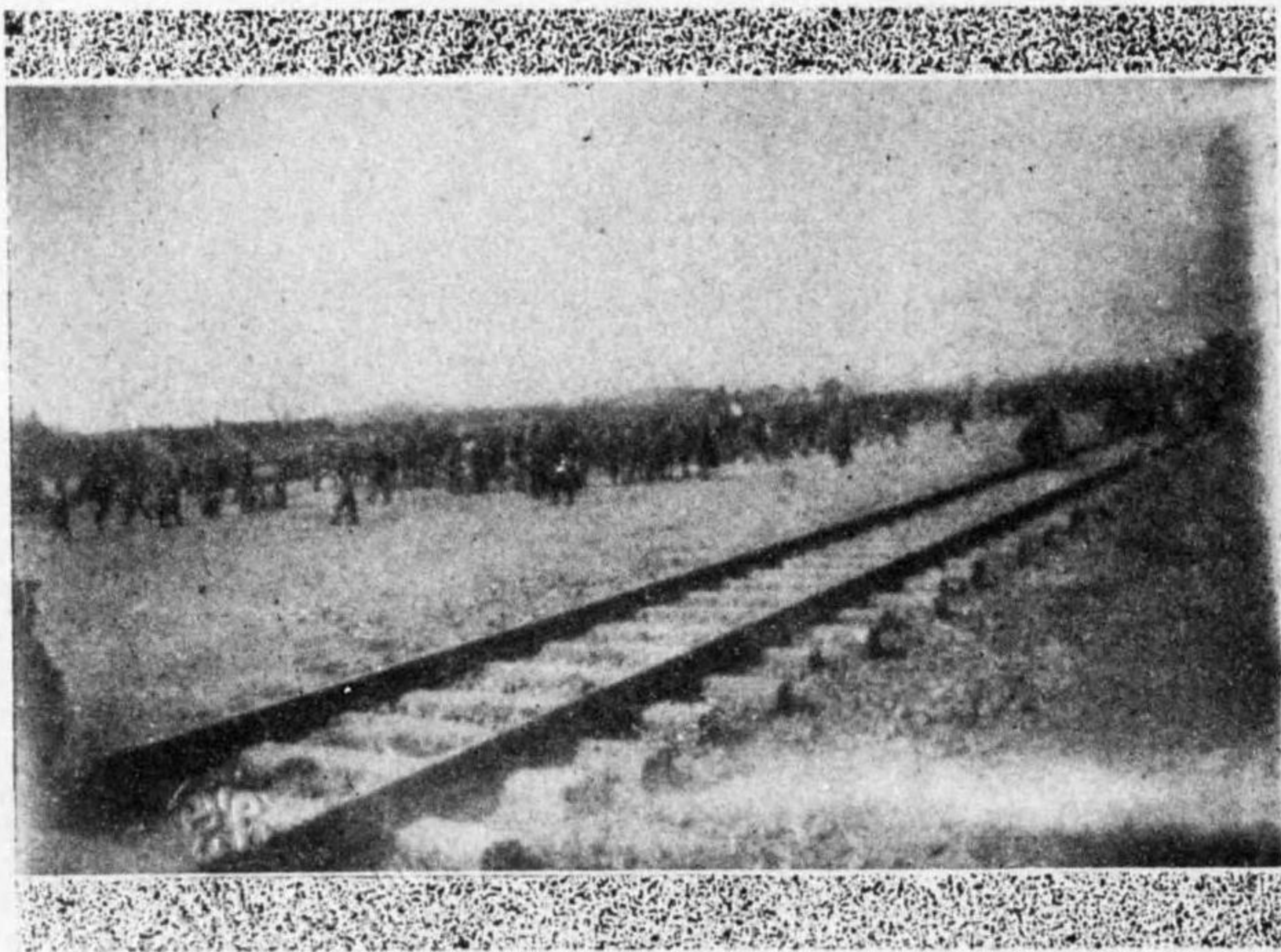
十六年の四月、蔣介石が武漢と分離し、南京に一政權を樹て、以後、黨、政、軍、三方面の組成分子が、散漫になつて來た、私はそれを人才集中の一方便と思つたが、他方面に於ては、之が黨的結束を弛廢せしめ、官僚軍閥への還元であると云つた。何れにするも事實上「以黨治國」主義の拋棄、乃至除外例的緩和であることは勿論であつた。

以黨治國の四字には、排他的の意味を充滿し、直に國民黨のデクテーターシップを聯想させ、一般の嫉視を買つてゐるこゝは否むことができぬ、茲に於て乎、胃牌—ごまかしができる。併し今日の支那では、國民黨が新國家建設の唯一の黨であり、その黨義を持つ唯一の黨であることを前提とすれば、以黨治國主義も亦已むを得ないかも知れない。併し事實はそれを裏切つた。それは黨化作業が勢

力範圍擴張の速度に追隨し得ない點にも理由がある。

そこで此「以黨治國」に換ゆるに「以黨建國」の四字を以てするに至つたのだと思ふ。以黨建國の意義に就てはこういつてゐる。即ち建國大綱第一條に曰く「國民政府は革命の三民主義及五權憲法を本として以て中華民國を建設す」とあり、之を換言すれば、「中國々民黨の組織と力量とを以て、國民黨の黨政府を組織し、中國々民黨の主義に根據して新たに一個中華民國を建設する」に在る、従つて此主旨に依つて、實際問題を論ずれば、國民政府以下の官吏は、事務官を除く外、政務官は只黨員のみに限ること、それは國家の建設終らざる以前に於ては、國民黨の主義ニ策略に根據して國家を建設することを要するが故に、只主義を信仰し、策略を了解し、黨に忠實なる黨員を以て、政務官に充て、政務の執行に支障なからしめ、以て國家建設の任務を完成するのであると云ふ。

こは云へ此の以黨建國なる四字に就ても、決して以黨治國との間に、實質上大なる差異があるものとは思はれぬ。即ち前述の解説に従へば「以黨建國」は即ち「黨員治國」主義である。従て之も恐らく一時性のものであるであらう。それは支那が假りに統一した場合、「國民黨員で無ければ政務に携はることはできない」主義を、さこ迄も維持することができるか？勿論國民黨を中堅とする勢力を以て統一事業を完成するにすれば、其の傾向は起らないとは云はれない、併し永久に「國民黨獨裁」と云ふやうな夢は、恐らく誰人と雖見てはるないであらうと思はれる。



蔣介石の檢閱を受ける某隊

そこで「以黨治國」とは「黨義治國」であり、國家完成すれば、黨義に依つて永久に之に統治すると云ふやうに解釋してゐるやうである。

今の國民黨中には雑多の分子を含んでゐる、舊官僚も舊軍閥も共產黨員も、個々の國民黨員夫れ自身にもその心中に、雑多の異分子を含んでゐる。それは國民黨の表面的勢力が大きくなり過ぎたがためであり、黨化作業黨化教育が之に追及し得ないがための己むを得ざる理由に依つてもある。意識的のものではないと思ふ。

七、總攻撃の準備と排日ポスター

總攻撃開始前の徐州は、滿街皆兵であつた。第何軍司令部の省板が、到る處に掲げられ、革命の將星が集まつてゐた。

蔣介石は連日各隊の檢閲に餘念もなかつた、が實は檢閲を名として總攻撃開始の時期を秘匿してゐるのであつた。

従前から徐州にゐた第一縱隊―第一、第九、第十軍等―の兵卒は、路上にゐるものも立哨してゐるものも、將校に對する敬禮は正しかつた、又今次新に編制をした總司令部の警衛師の如きでも、軍紀は先づ、立派だと思はれた。

「南京にゐる兵よりも軍紀は正しいね。」

私はお世辭ではなく、幕僚達をつかまへてそう云つた。實際元何應欽の持つてゐた兵は、比較的軍紀が正しいやうに思はれる。それは所謂基本黨軍の流れを汲んでゐるからだ。

街路には、國民黨のポスターが、べたべたと貼られてゐた、其中には、日本と張作霖や孫傳芳を共同目標とする醜惡な、私には見るからに不快を催すやうな繪も相當見出された。

或日私は午餐に招待された。某館の部屋の壁にもそれが貼られてゐる、それに念入りに鉛筆書きの註釋迄がしてある。

「日本と勾結する張作霖を倒せ」「打倒日本帝國主義」標語は至極簡單であるが、打倒帝國主義は國民黨の標語としては假りに己むを得ないとするも、今次の北伐に於ける標語として、わざわざ日本だけを特定するのはさう云ふ氣か。私は皮肉を云はねばならなくなつた。

「廣東の李濟は、打倒帝國主義をやめたね。」

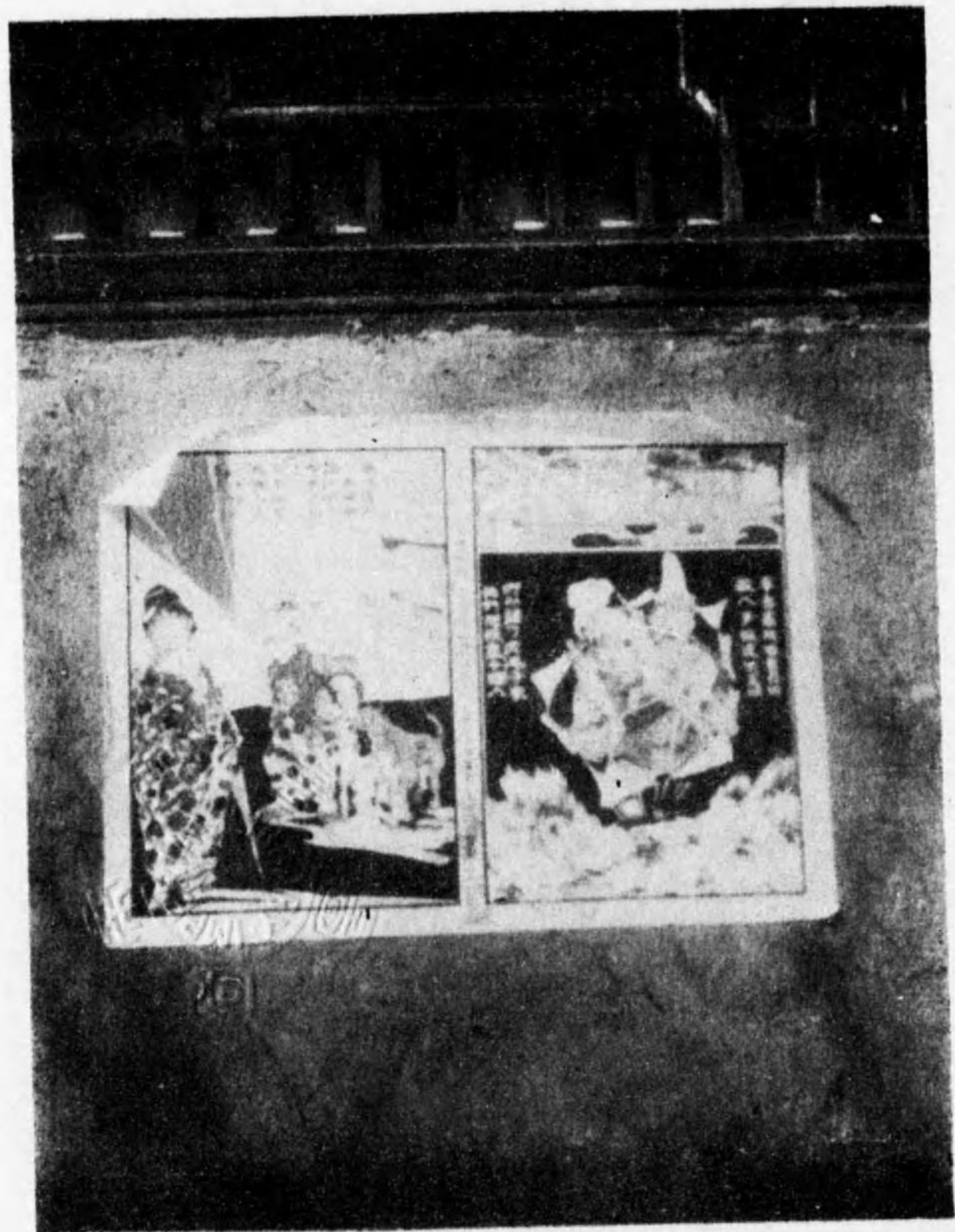
私は遠まわしに始めた。

「そんなことはない。」

「君の國の人が云つてゐる、雜誌にも書いてある。李濟が香港總督と大禮服で應酬したり、禮砲を交換したりしたあとで、打倒英帝國主義の標語が消滅したらしい。いや、それもよからう。」



排日ボタス(其一)操人形=日本人的の張作霖



(二其) 一 タ ス ボ 日 排

向て左の繪説明
張曰く
日本嬢、助けて
おくれ
日本嬢曰く
滿洲を持つてお
いで！

私は矢次早やに言葉をつづけた。

「今度は日本一國が、君等の目標だね、日本と張作霖を結び付けることは君等のスローガンとして必要かも知れないが、迷惑な話だ。併し僕はこんな愚にもつかぬポスターを、徹去してくれとは断じてお願はせぬ、君達が其結果に就て眞面目に考へてくれるならばそれでいいのだ。」

「あれは宣傳大隊の仕事で、あれをやらなくては仕事がかたがるからだ。」

口のうまいXが事もなげに放言したが、私は茶化されはしなかつた。

私は口を緘んだ。が箸の上げ卸ろしの間にもそのことは念頭から去らない。

「宣傳大隊の仕事がかたがる？」

「帝國主義打倒を目的とする以上、それは一應尤もなことも知れぬ。」

「だが帝國主義打倒とは何のことか？今の支那で新思想を賣物にしてゐる智識階級の人達は、支那の革命が進展すれば日本帝國主義が自然に凋落すると眞面目に信じてゐる。そう考へることは彼等の自由だ、それは一種の自慰だからな。併し是等醜惡な宣傳畫は何人に見せるつもりなのか、兵は肩肘怒らせて見てゐるではないか、小日本、倭奴、木履兒、こんなことを口々に云つてゐるではないか、無智な兵卒は、打倒帝國主義といふことを、外人を輕蔑せよ迫害せよ驅逐せよ襲撃せよと云ふことに解してゐる、だがそれが目的だつたのは容共時代だけの筈だ。」

第四次執行委員會議以來、くだらぬ標語は一切廢止することに決議してゐるではないか、總司令部は宣傳隊を統禦するこゝは出来ないのか。」

「君等が帝國主義に反抗する眞意には、僕と雖十二分の理解を持つてゐる、併し徒らに悪感を挑發するばかりで帝國主義打破の目的には何のたし、にもならぬ有害無益な宣傳には同意はできない、併し俺は、それを徹去してくれろとは頼み度くはない、不測の災厄を恐れるならば、彼等自身の反省に依つて廢止さるべきだ。」

私は食後の歸途、眞面目なMに滲々と話した。Mもそれを心配してゐた。

標語の及ぼす威力を、適當に調節することは、總司令の威令で出来ることである。濟南には三千の山東には二萬七八千の日本人がある、革命軍が果して夫等の日本人の不安のたねにならないであらうか？。

蒋介石の前には、又々大きな試鍊が横はつてゐるのだ。しつかりした幕僚が居れば、對日本を考へる前に、先づ自己の利益革命の利益のために慎重考慮すべきであつたと思ふ。私の意思は充分先方に通じてゐる筈だ。

八、侍從參謀、侍從副官—黃埔出身

總司令部には、侍從參謀と稱するものと侍從副官と稱するものがある。參謀も副官もこゝでは餘り職務上の差異は認められない、只參謀の方が高級としてあるだけだ。何れも黃埔軍官學校出身の青年で、年嵩のものでも二十七八、若きは二十二三である。當時總司令の左右を守つて、所謂ボディガードの役をすると共に、總司令專屬として秘書庶務等の任に服してゐる。親衛將校に似てゐるが、さりとて直接指揮する兵を持たぬ。侍從の名が少々吾々には妙に聞えるが、專屬と云ふ程の意味であるらしい。

何れも革命的速成教育を受けたチャキ／＼で、三民主義はお手のもの、蒋介石は自分のもの、といふ意氣込てるる血氣盛な青年ぞろいである。

或時H參謀が外から歸つて來ると、いつの間にか列車内の自分の室に外の男が頑張つてゐる、而かもHの寢具や荷物は片隅に取片づけられ、別の寢具迄ちやんと伸べられてゐる。

Hは怒つた。

「君は誰だ、斷りもなく高級幕僚の部屋を占領するとは怪しからん。」

「俺は侍從參謀だ、怪しからんとは怪しからん。」

「之は俺のために決められてある部屋だ、出て貰ひ度い。」

「俺は後れて來て部屋がない、君が居らんから這入つたがさうした。」

「それは無茶だ、決まつてゐる部屋だと云つてゐるぢやないか。幕僚室だよ。」

「君も幕僚かも知れぬが、俺も侍従参謀だ。等しく總司令の幕僚ではないか。」

「わかつてゐる、兎に角之は俺の部屋だ、出てくれ。」

「部屋のない俺を出すのか。」

「仕方がないではないか。」

「あけてゐるものを使つてもいい、ではないか。」

「あけてはゐるない、俺は出張してゐて今戻つたのだ。」

之では果てしがつかぬ、隣室には觀戰従軍武官として、唯一外國人の私が一室を占領してゐる。耳が痛い。

彼等の眼中には蒋介石あるのみで、其他の將官は齒牙にも懸けぬ。

Hは陸軍中將である。小憎らしいが可愛い、所もある。併し無態な横車を押そうとする所は、聞いてゐても癪にさわる。氣の早い吾々なれば、もうとつくに鐵拳が飛び出してゐる筈だが、和平を重んずる中華民族は、それでも掩まず撓まず、所謂口角一論のことゝを續けて、とうさう、さうにか納まりがついた。私は云つた。

「黃埔はなかく負けないね。」

Hは苦笑したが、黙つてゐた。

其以前私は一度、侍従参謀に惱まされたことがある、それは斯うだ。

徐州に在つた一日、總司令部に蔣總司令を訪ふことがあつた。其時彼の寢室の隣りの應接間で暫時待たされてゐるが、一人の年若な一二十四五歳位に見える侍従参謀が出て来て、いきなり尋問を始める。

「貴下の職業は？」

「在南京日本陸軍武官。」

「嘗て支那に來たことがあつたか。」

「屢々來た、各處に居た。」

「何處に何年ゐたか。」

「みんなて十年位になる。」

「何處に何年ゐたか。」

私は少々七面倒臭くなつた、「この青二才奴」と思つたけれど、居候の悲しさにはそうもいかぬ。

「山東一年半、黑龍江省二年、廣東二年、北京一年、それに南滿には四年ゐた。」

「東三省では張作霖の顧問か。」

私を間諜とも思つてゐるのか、實にうるさい。

「南滿には日本の鐵道守備隊と駐劄師團があることを、貴下は知つてゐるか。私は青年時代其兩方にゐた。」

「廣東にはいつるたか。」

「民國十一、十二、十三年、丁度君等の學校ができた年の秋、本國に歸つた。」

「南京にはいつ来た。」

「矢つぎ早に之だ、益々以てうるさい。」

「民國十六年の四月、あの南京事件の直後だ。」

「是前は？」

「北京。その前は本國。」

「面倒だから先廻りしたら、又それがいけなかつた。」

「本國では何をしてゐたか。」

「もうそろ／＼私の疝癩の蟲がむく／＼頭を擡げてきた。」

「僕は日本陸軍の參謀將校だ。」

「語氣が荒くなつたので、彼は話頭を轉じた、だがなかなかやめない所に注意して頂き度い。」

「貴下は何種の政黨に屬してゐるか、例へば民政黨……。」

「近頃誰か民政黨の人が訪問したらしい。」

「日本現役將校は政治上の發言權を持たぬ、從て誰一人として、何れの政黨にも關係してゐるものはない。」

「な。」

彼は驚いた、急に眉を揚げて椅子を乗り出してきた。

「なに、發言權はない!!」彼は自分の耳を疑ふやうな業山な表情をして「貴下は夫れに満足してゐるのか。」

「勿論。」

「勿論。」

彼は待つてゐるとばかり、言下に、

「國家は果して誰の國家か、國家の一員として貴下は……。」

皆迄聞く必要はない、半可通の三民主義の說教なら、私はそれが先輩である丈けに彼よりはう、わ、手

だ。私はいきなり手を振つた。

「ちよつと待つて貰ひ度い。」

饒舌を黙らせるには筆談に限る。以下筆談の要旨、

「貴下は軍人が政治に干與するこゝをい、と思ふか、將たいけないと思ふか。軍人が政治に關係をし

て、政黨が軍隊内に延長された時、其結果は果してさうなるであらうか。貴國のことは云はないが、我國では現制度が最も、のだ。貴下が他日日本國情を研究したならば成程と首肯するだらう。」

彼は名刺の裏に書いた夫れを手に取つて讀んだ。
にこ／＼して點頭する、急に憎くげが少くなつた。最初は、「此男は私を非職將校の賣物」か何ぞのつもりで、抛擲く尋問するのだと思ひ、叱り付け度い程に腹が立つてきたが、そうではないらしい多分陣中の徒然と、異國人の物珍らしさと、三民主義の廉賣の買手に見立てたのとて、悪氣では無論なく、試問したものに見える。何しろ其稚氣と熱心は愛すべきであるが、随分劈易させられた。

或はこの大佐殿は、私が蔣介石とは國民十二年以來の知り合であることを知らないの、豫め身元を調査して置くつもりであつたかも知れぬ。何れにしても容易く怒つてはならぬ。私は日本人として動々もすれば直ぐ怒り度くなるのをいつも抑へてゐるが、抑へてよかつた場合が多い、それは國民性の相違だから仕方がない。

蔣介石が出て來た。大佐はぜんまい仕掛のやうに起立した。蔣介石と私が、日本語と支那語とで談笑してゐるのを、この若い侍從參謀大佐殿はげん、そうに眺めてゐた。

この大佐から黃埔出身者の一面をのぞくことができる。それは皮肉でもなんでもない。私は既に彼に何等の悪意をも持たないのであるから……」



北伐開始の前と蔣介石と馮玉祥

九、戀愛と皮帶

革命軍の軍服は、所謂中山服と稱するもの、ダブルの詰襟、胸と腰とに左右二つ宛、ひだ澤山のボケットが着けてあり、いざ戦闘となると、戦線に在るものは、みな赤白の細長い布を襟にかける。軍帽は露西亞式、帽章は黨旗に型まつた青天白日章である。

軍官の服の地色には多く制限を附せなかつたが、官給の下士卒服は一樣に紺鼠の布製であつた。三月總司令官が西北軍を訪問して以來、將校にも布製軍衣袴を獎勵したので、今では將校の羅沙、セル等が漸次廢れ、一樣に下士卒同様のものと變つた。

將校は軍衣の上に、肩革を附した幅廣の帶皮を締めてゐる。短袴に革脚絆、その上革命軍ばやりの素通しのロイド眼鏡を伊達にかけてゐれば、スタイルが馬鹿にいきに見えるらしい、何しろ今の支那では、國民革命が際物的流行であるだけに、革命軍の將校と云へば花形役者で、それがもてるに不思議はない、だから皮帶がその花形役者のシンボルとなつて、如何にもいきに見えるものらしい。丁度日露戦争後の我將校が、戦勝に酔つてゐた當時の雰圍氣を背景に勳章を胸にぶらさげ、其頃改正したばかりの茶褐服と赤縁帽を被つて、海老のやうに反りかへつて歩くと、若い女の注意を惹いたらしく其當時の將校は嫁選びに苦勞はしなかつた、丁度それと同じことかも知れぬ。

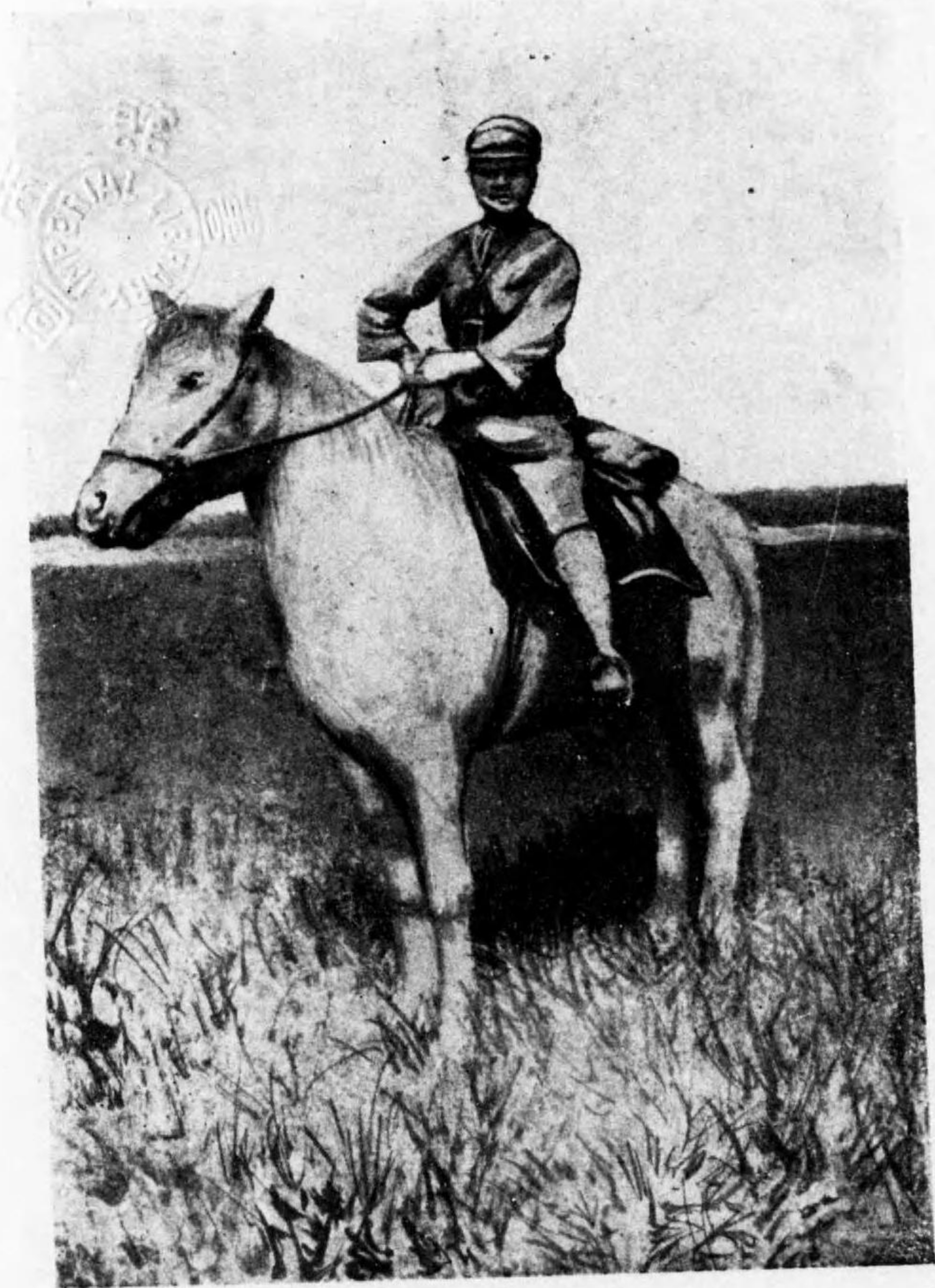
前清時代の支那女は、男の頭髪から垂れ下がつてゐる辮子、それは組紐で編んで裾のほとり迄も垂れ下がつてゐる辮子、それが歩く毎に規則正しく揺れる、それに眺め入つては性の衝動を覚える—まさか—と聞いたが、今の支那のモガは、流行ものでなくてはお氣に召さぬとある。「皮帯をつけて護兵の四五人も連れ廣東の荔枝灣—遊園地—あたりを歩けば、戀愛が幾つてもむこうから轉がつてくる。」

とは侍従參謀の某大佐—云つても我國の老聯隊長を聯想しては話はぶち壊した、この大佐は當年二十七歳である—が私に話した所である。

今の薄給の革命軍青年將校が、藝者にうつつ、を抜かすやうな不經濟なまねをする迄もなく、近代化した支那のモガは、女同志と稱する男女社交の自由を表徴するうつつ、つけの稱呼を楯に、苦もなく戀愛の相手となるのだから、物色に骨が折れないらしい。觸接も離隔も、握手もあばよも、この革命以來よほ自由になつてきたらしく思はれる。武漢時代には、革命に憧憬する新しき女が、澡堂(錢湯)に行つた、—古い女には錢湯なんか大の禁物だつた—、行つたばかりでなく三助に肌を洗はせた、之は恐らく黄帝以來の革命であらう。それは併しまだなま温るい方であつて、「女だつて男が買える」と云つて、手頃の男性を物色してそれを客棧に引っぱり込み、自主的享樂を恣にした後に、何がしかの紙幣を卓子の上にぼんと投げ出し、費用一切を仕拂つて悠々とお歸りになると云ふ超モガさへも出



(一其) 志同女裝武
!! 心榮虚たつ變の色毛



(二其) 志同女装武

……かうぎかるへ追がラガがだのもるた々堂は勢威たつ乗

してゐる革命支那である。

序で乍ら支那モガのハイカラ振りを紹介して置く。

若い女は殆ど皆断髪である、たまには纏足時代の名残を歩き振りに止めた三十女が、斬つてゐるものもある。之は新舊支那を同時に標徴して、聊か滑稽である。斬髪の様式は、襟足より斜に、おかつば、を削り上げ、耳の處は特に聊か長くして其先を稍前方につんみ跳ね上げてある。それにロイド眼鏡さへ懸けて居れば、立派な近代的教養のある女として受取られる。

男の服が袖を長く長くする傾向と正反對に、女の上衣は肘から先は丸出し、裾は膝の少し下迄、腋の下と乳の下と腰のまわりをキュツとして曲線美を遺憾なく發揮し、踵高の靴を穿き腰を捻つて勢よく歩けば、その上二三人倚り懸るやうになつてべちやくちやと、租界の街を練り歩けば、立派な上海のモガができてあがる。それで勿論活動にも行けば、カフェーにも行き、ダンスホールにも出入する男と噂々しながら散歩もする、巻煙草を吹かしてゐるのも珍らしくはない。支那のモガ振は急速に發展してゐるのである。

革命將校の打老婆―嫁もらい―は、今の所最有利なる情態に在る。皮帯がある、花形である、昇進が早い、權勢がある、それを女性から見れば宋美齡夫人が、羨望の的である。げに羨むべきは皮帯である。

一〇、第四軍—草鞋菅笠の廣東兵

總攻撃の始まる少し前、私は停車場へ寫眞を撮しに行つた、ところが丁度其時、兵を滿載した一列車が到着してゐた。

無蓋貨車には、掘り出せばまだ底からいくらでも出てきそうに思はれる程、溢れるばかりの兵がぎつしり詰まつてゐる、陸橋の上から見下せば、大豆の麻袋を積載したやうである。

「支那軍の輸送は實に簡單だ。」

斯んなこともある、大砲を積んだ貨車が到着する、そこは貨物の積卸場ではない、火砲を卸ろすには斜板を準備しなければならぬ、私は支那兵がさうするかと見て居た。

兵は何處からか高粱桿を運んで来て、貨車の側に積み上げた。

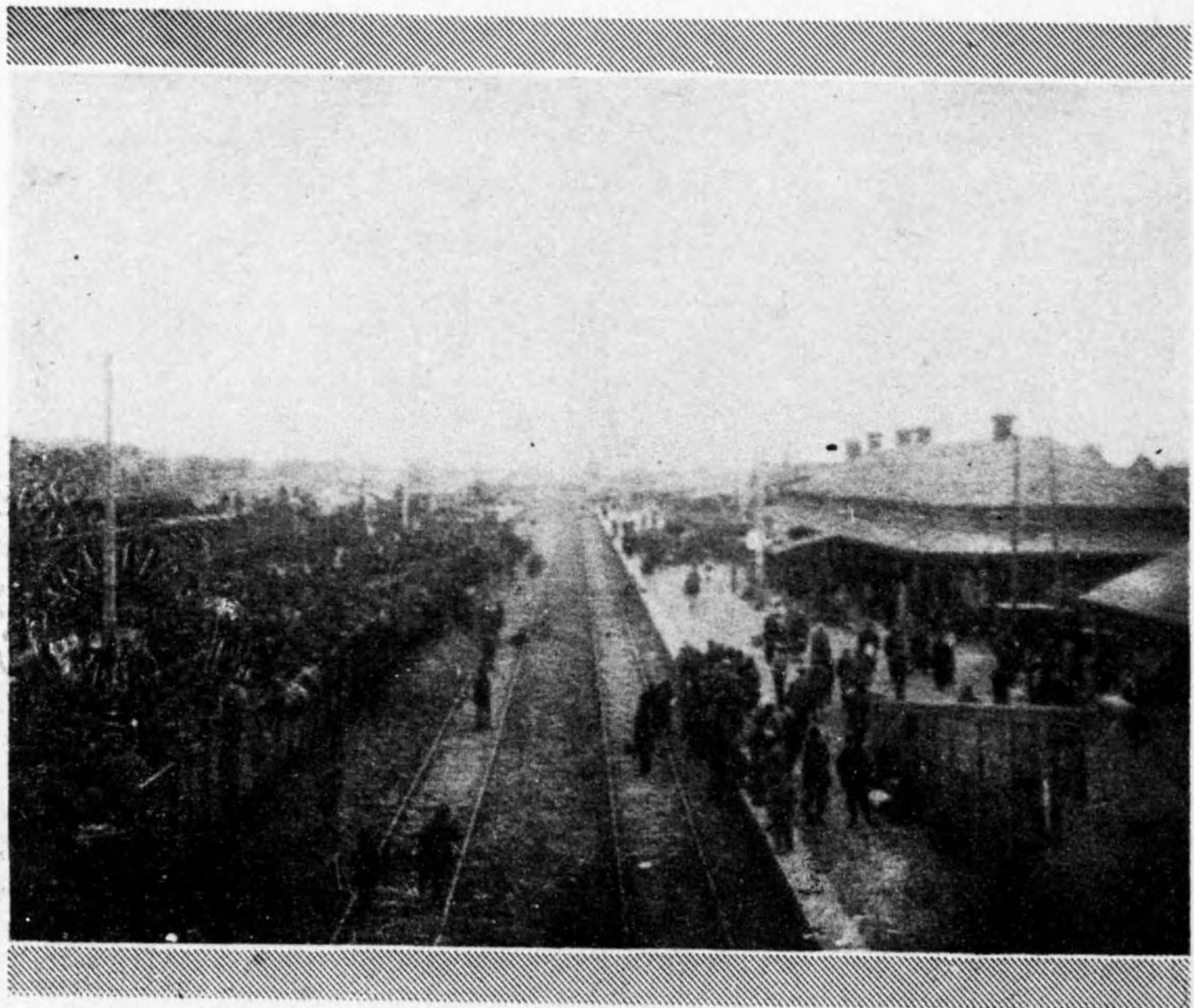
「やるな。」

私は思はず微笑した。

七珊半の野砲の大きな圖体が、兵の懸け聲と共に、高粱桿の上にもんざり、打つて投げ出された。仰

向きに轉がされた大砲は、大きな正覺坊を裏返へしたやうに無細工に見えた。

「亂暴なことをする。だが簡單だな、萬事これ式でやるから、あの不完全な編制と裝備とで戦争が出



生きた麻袋一支那兵の列車輸送四月上旬徐州驛の第四軍

來るのだ。」

私は感心して見惚れてゐた。

却説、今此停車場に到着してゐる生きた麻袋は、萱笠を被り草鞋を穿いた廣東兵である、私は直ぐに共産軍を連想した。

「こんな兵を第一線兵團に使ふのだな、危険なことだ。」

私は歸つて參謀に尋ねた。

「第四軍を使ふのだね、最近廣東から來た繆培南の第四軍を使ふのだね、あれは有名な共産軍ではないかね。」

「共産黨は今一人も居ない、繆さんは人民に誓つてゐる。」

「随分ひさい様子をしてゐるではないか。」

「あれは河南の戦争以來随分所々方々を行軍して廻つたから、乞食のやうなふうをしてゐるが、一ぱん強い軍隊だ、河南の戦争後鐵軍といはれてゐる。」

百姓一撥のやうな風采をしてゐても實質は鐵にも比すべき優秀の軍隊だと云ふのであつた。

私は尙も心配が去らない。

「大丈夫かね。」

「大丈夫だ、僕は保証してもいい。」

「そうか、それなれば君の云ふことを信用せう。」

其後私は二三度此軍隊を視察した。兵氣はなかく、荒そうである、共産軍時代の政治教育の痕跡が

残つてはるないであらうか、私は濟南の居留民の爲に絶えずそれが氣に懸つてならなかつた。

其後、果して濟南で我歩哨線の前で殊更に排日のポスターを貼つてゐるのは第四軍の政治訓練部だ

と云ふ噂もあつた、併し確かなことは今にわからない。

手漚をかみて菅笠を被りけり

前髪をしたる娘も手漚かな

一一、出兵是非問答

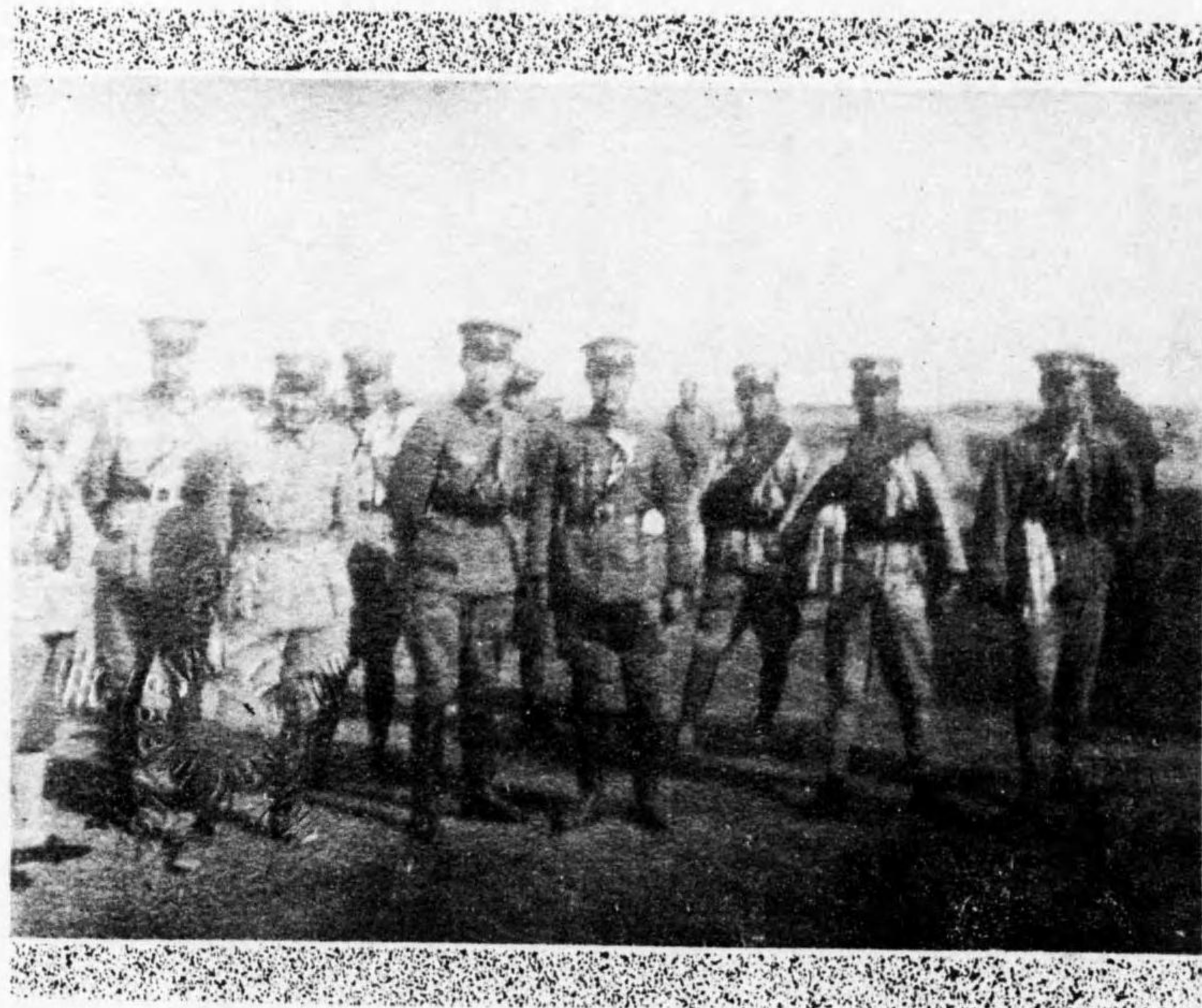
YもHもMもCも私と無遠慮な意見を交換することができる。

「日本は出兵するか?」

「するかも知れぬ、すると思はねばならぬ。」

「出兵する必要はない、共産黨は最早居らぬ。」

「悪い者は共産黨だけではない。」



著者と戦線に於ける総司令官部僚の一

前列向つて右より兵

二人

著者

副參謀長

熊式

輝

高級參謀

張

弛

「國際法を無視し、支那の主權を侵害する日本は、昨年の出兵で南京事件を帳消しにした。」

「之は怪しからん、それではあの事件は解決せぬつもりか？」

「支那が統一したらする。解決しないと云つて居らぬが今は戦時だ暫く待てないことはあるまい。」

「濟南で今一度同じことを繰り返すのか？それでは際限がない。」

「青島迄居留民を引揚げたらい、ではないか、出兵の費用に較べたら問題にならぬ。残された財産は國民政府が安全を保證する。」

「人間の面子や國家の威信を、貨幣價值に換算することはできない。武士道は面子のために刀を抜かせた。國民政府が安全を保證しても、兵隊が其保證書を破る。」

「今日の革命軍は、南京事件の折の革命軍とは違ふ。」

「夫れは違ふかも知れぬ、併し三千の居留民と彼等の財産の安全を思へば、不安はやはり有るね、南京、漢口、九江、長沙、海州、至る所日本人は君達の國の軍隊から、辛い目に遭はされてゐる。」

「南京事件は共産黨がやつた、そして今日は一人も共産黨が居らぬ。」

「共産黨は居らぬかも知れぬが、第六軍―掠奪軍―の軍長程潜は譴責もされないではないか、支那の政府が、何等の制裁をも彼に加へないならば、極端な日本人は單獨にでも彼に復讐をするかも知れぬ。」

「日本人は明治維新の際に、外國人を殺傷してゐるではないか？」

「やつたよ。だが生麥事件の報復は鹿兒島の砲撃と償金四十萬兩—今の金にして四百萬圓以上—取られ、下關で外國軍艦を砲撃したのに對しては、英佛蘭米四個國の軍艦十七隻から砲撃されて、償金三百萬弗を取られてゐる、外國人を殺傷した代價は高いものについてゐるのだ、そして生麥村の下手人は自殺を命ぜられた時、腹を切つて臟腑を掴み出し、立會の英人が驚いて眼をまわしてゐるぞ。攘夷のむくひには痛い目をしてゐる、猫ばどは通用しない。尤も攘夷は一面手段でもあつたから、維新の革新運動が成功した後は、國家の統制力に依つて一齊に終熄してゐる。」

「共産黨が無くなつてから、もうあんな馬鹿なこゝはしない。」

「僕は君の云ふ所を信用する、併し忌憚なく云へば貴國の軍隊には信用がてきぬ。」

「……………」

「此頃市中に貼つてあるポスターには、随分辛辣な排日の繪があるね、あれでは日本人を迫害することを獎勵することになる。だが君の方にはそれ相當の理由もあるだらうから、敢て撤去することをお願はせぬ、併し革命軍が山東に於ける外僑を保證する云ふ聲明は、事實との間に矛盾があると云へることは確かだ。其結果は凡そ想像もできると思ふが、革命軍は其責任は負ふだらうね。」

「あれはやめさせることにする。」

「帝國主義の筆頭は英國で、日本はたしか第二番目だつたと思ふが、英國とはもう仲直りしたと見え

て、打倒英帝國主義は一つも見當らない、其代り日本が一人で引受けて居るのだね。それもよからうが、吾々の任務は現在の事態を夫れ以上に悪化させないことに在るのではあるまいか。」

「それはそうだ、僕等は作戦のことはなんでもないが、日本人と事故を起さないことに就ては、實際心配で頭が痛い。」

「それは僕も同じだ、出兵した時は、僕は命懸けだ。」

「君が一所に行つてくれ、ば大丈夫だ。」

「大丈夫ではない、勢は一人の力ではさうすることもできぬ。昨年出兵の時も、僕はそれを眼のあたり見て心配した。今年出兵するとしても恐らく昨年程ではあるまいと思ふが、併し心配の根本原因はいつも云ふ通り南京事件からだ、君達も知つてゐる通り、日本兵は單純で素朴だ。なぜ南京事件を早く解決してくれないのだ。」

「アメリカとは調印した。日本とはまだぞ。」

「日本は南京事件では徹頭徹尾隠忍してゐる、支那の方には交換すべく何ものもない筈だ。」

「出兵は主權侵害だ、きの國際公法にも見當らぬ。」

「國際法を超越した事實だ、法理論はする必要はない。」

「國民政府を信用せよ。」

「君達のやうな人ばかりが支那の軍人なら、革命軍に信頼もするが。事實がいつも聲明を裏切つてゐるのは君達も承認するだらう。」

「田中内閣は野心がある、きつと出兵する、其目的は、第一居民留の保護、第二山東の利権擁護、第三……有るだらう！」

「僕は知らぬ、併し自力で居留民を保護せねばならぬ原因を考へて見てくれ。革命軍の全部がキツト大丈夫か？」

「だから居留民を青島迄引揚げてくれと云つてゐるのだ。吾々の國民革命軍を信用しないと云ふなら引揚げてくれ。」

「もうわかつたからよそう、出兵をするかしないかは、僕の知つたことではない。」

「出兵するのは日本の損だ。」

「損得ぢやない、要不要だ。」

「大々の排日が起るかも知れぬ。」

「それも仕方がない。」

「……………」

「……………」

「吾々の力ではさうにもならぬ。」

「それも仕方がない。」

支那人と出兵是非を議論する時は、いつでも水懸論になる。それは議論の根底が違つてゐるからだ。吾々は成行に任かせる外はない。

一一一、赤い顧問の話

幕僚室での無駄話から、容共時代の赤色軍事顧問の話が出た、たつた一人の日本人である私は黙つて誰彼の云ふ所を聞いてゐた、事は革命軍の内情ではあるが、少しも支那軍の面子に關しないから、其要旨を書くことにする。

「日本人や其他の外國人は、革命軍の作戦が一から十迄赤色顧問の厄介になつてゐたやうに思つてゐるが、それは大なる誤解である。成程あの顧問達は、實に熱心勤勉誠實に吾々の爲に盡してくれた、其點は吾々も今に感謝をしてゐる。けれ共吾々は、作戦の根本計畫に就ては一切容喙はさせなかつた彼等には細部の計畫をさせた、彼等は直にコンパスを取り精確に距離を測り、精密に圖上の計畫をしてくれた、併し不完全な地圖だから、如何に精確に距離を測定しても、何にもならぬことがある、彼等は圖上の計畫に捉はれる傾向がある。」

「江西の戦争に僕は第〇軍の一師を指揮してゐた、僕は腹背に敵を受けた時に、露人顧問の意思に反して、僅か一團を以て優勢の敵を攻撃させ、師團の主力を以て比較的劣勢の方の敵を衝き破つて退却をしたが、其一團の方も攻撃は成功してやがて師團主力と合することができた。」

「長江流域に出て滬甯線を攻撃する時も、主力を南京に使ふか上海に使ふかに就て彼等と激論をし、二日もかゝつて決しなかつたが、遂に吾々の意見を採用して成功してゐる。」

「圖上戦術の研究をする時でも、吾々は露西亞の編制から割出された騎兵集團や其歩兵の支援隊等の運用には、てんから賛成はしなかつた、吾々は日本で習つた戦術が吾々に適用されることを知つてゐるからだ。」

「外國人は支那軍を統帥することはできぬ、それは支那の軍隊が不完全な編制裝備を持つてゐると云ふこと丈の理由ではない、民族心理を知らないからだ。現在の支那の軍隊は頗る不完全で且複雑な上に、兵の心理作用の微妙な動きが統帥上に大なる關係を持つてゐるのであるから、兵の心理作用の機微を察することのできない外國人が、それを指揮することは不可能と云つても差支へはない。」

「吾々には作戦上に於ては外國人の軍事顧問を必要としない、と云つて吾々は何も自惚れてゐるのではない、固より外國軍から學ぶべき所は多々あり、學ばねばならぬとは思つてゐる、併し内國戦に於ては吾々は他國人の力を借りる必要はないのだ。」

等、等、等、

私もこれには至極同感である、同胞殺戮に異邦人の力を借りることは罪惡である。幕僚のこの意氣、誠に盛なりと云ふべきである、是程の自信が無ければ、あの複雑な支那軍の統帥は出来まいと思はれる。

一三、無聊の一日

雨が降る、私は張公館の薄暗い一室でぼんやり雨垂れの音を聴いてゐた。

侍従參謀の一人がY副官と一所に訪れて來た。黃埔の第一期生で本年二十七歳だと云つた、胸には上校—大佐—のマークを附けてゐる。此男は如何にも軍人らしく快活なそして無邪氣な男なので、私は直ぐに此男と半日を無駄話に過ごすことができた。

「貴下は本國では階級は何か。」

「中佐だ。」

「何期か。」

日本士官學校の期を云つた所でわかる筈もなく、多分支那の留學生のことを聞いてゐるのだと思つたので。

「貴國の留學生では多分第三期か四期位であらう、尤も僕等は日露戦争最中のことだつたから、其間貴國の留學生は入校しなかつた。」

「任官以來何年になるか。」

「二十二年。」

彼は眼を丸くした。

「僕はたつた四年だ。」

「喫驚するな、僕は中尉を八年半勤めてゐるぞ。」

益々彼は驚いて眼を睜つた。

「僕は早過ぎる、革命が成功したら總司令に願つて日本に留學する。」

「それがい、何處の國の陸軍でも昇進は遅い、貴國は早過ぎる。」

「貴下のお歳は？」

「四十二、僕は革命軍のぞの高級將校よりも歳がいつてゐる。」

そう云ひながら私は若い者天下の青年支那が羨しくなつた。

「うーむ。」

「黃埔の卒業生で一ばん階級の高いのは何になつてゐるか。」

「政治訓練部の方に行つた者が中將になつたのがある、今最高は副師長だ、副師長なら幾人でもある

或は直ぐに師長になるかも知れぬ、大佐參謀や團長は吾々が中堅だ。」

「卒業して直ぐは何になるのか。」

「排長—小隊長—、暫くは連附—中隊附—なんかさせる。」

「黃埔出身者は強いそうだね。」

「貴下は徐州の後方病院を見たか、軍官の負傷者の大部分は吾々の同學だ。韓莊では同學の連長が突撃して二人迄銃剣で刺し殺されてゐる。」

「黃埔出身者は總司令の命令だけ聽くそうではないか。」

「そんなこともない。」

「蔣介石は特別に君達を庇護するののか。」

「それはする。」

「君は何處で戦争したか。」

「江西の戦争は營長で戦つた。」

「孫傳芳は強いのか。」

「強くないこともない、吾々は失敗したことがある。」

「君は妻君があるか。」

「まだないが、相思の婦人が金陵女子大學にゐる、北京を取つたら二人で日本に留學するのだ。」

「美しいね。」

「貴下も中國婦人を嫁に持たないか。」

「そんなことはできぬ。できたつて僕は支那の婦人はおそろしい。」

「なぜだ。」

「なぜつて支那には怕老婆が多いのは婦人が利害—きつ—からだらう。」

「國民黨の元老にも多いが、男女同權は國民黨の主義だ。」

「君達はまだこの上妻君からいぢめられ度いか。」

「そんなことはない。」

「宋美齡夫人は傷病兵の慰問にこゝへやつて來るのではないか。」

「知らない。」

「……………」

「貴下は騎兵か。」

「歩兵だ。」

「二三日前總參謀長と一所に馬に乗つてゐるのを見たが、うまいね、だから騎兵かと思つた、總司令も騎兵出身だ。」

「歩兵將校だつて馬術は毎日やるのだ。」

「此頃南京では騎馬打獵が流行る。」

「それはいゝ流行だ。」

「譚延闓は馬が好きだが乗らない、毎日見に來てゐた。」

「戀愛と皮帶はさうだ。」

「ハハ……………戀愛と皮帶、戀愛と皮帶。」

「Y副官も妻君を捜さねばならないね。」

「僕は浙江省で打老婆する、浙江の女は賢くて美しい。」

「宋美齡も浙江だからね。」

「浙江の人は總體頭がいゝ。」

「君達は樂しみだね。」

一四、徐州から戦線へ

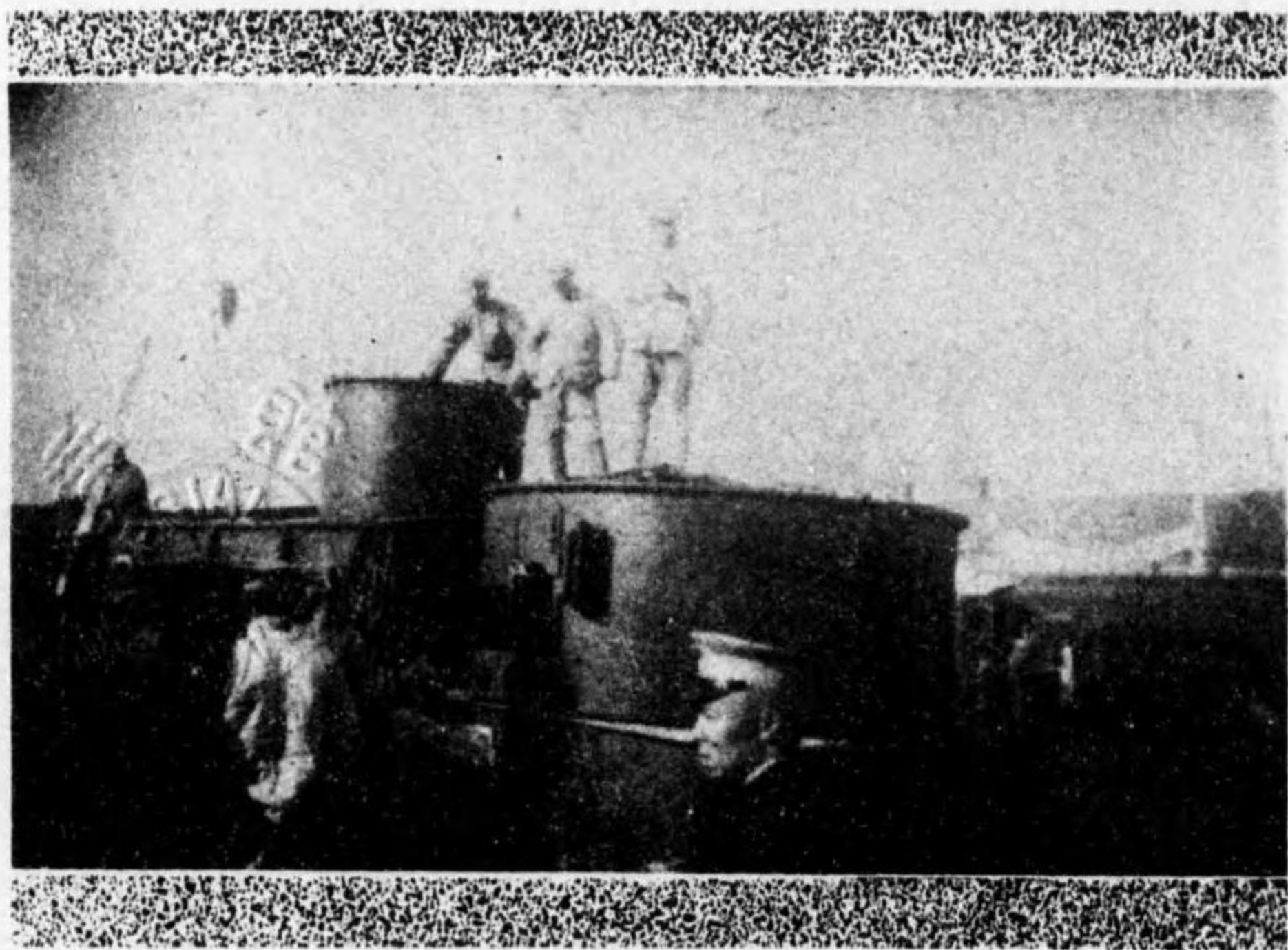
鐵甲車―裝甲列車

鐵甲車―南方の發音に従へば、テツカーチエイである―それは近世戦争が生んだ一威力である、それは軌道を利用して迅速に活動し得る移動砲塔である。兵員、彈藥、探照燈、修理材料、糧食等を積み遠戦近戦に必要な火炮及機關銃を具へた陸上の小砲艦である。

私達は、西北軍の鐵甲車に便乗して徐州から前線に向つた。

鐵甲車隊司令に紹介された、兵員と同じ服裝をしてゐるが、胸に大佐の標識を着けてゐる、多分裝甲一列車を指揮する隊長かと思はれる。革命軍の各隊長は一般に階級が高過ぎると思はれる、革命軍の裝甲一列車には、優秀なもので野山砲各二門、重機關銃五六挺、兵員五六十名を越えない、従つて列車長は大尉で十分であると思ふ。だが之は局外からの批評であつて、人事行政上の都合からするものとするれば、徒らに形式上の批評をするは當らないであらうから差控へて置く。

兵室は、實によく整頓されてゐる。鐵板を以て裝甲された貨車、其側面に一列の銃眼が設備され、ヘッドは上下二段に設けられて、寢具が体裁よく整頓せられてゐる。銃は銃架に帶革は等間隔に打た



(軍北西) 塔砲の車甲鐵

れてある釘に懸けられ、列車の振動に伴つて、心地よく動いてゐる。小さな棚には獅子牙粉―ライオン齒磨―と齒楊子が、眼白押しに手際よく並べられてゐる。床は塵一つない迄に掃き清められ、禁煙の西北軍中にて、私達は何となく喫煙が憚られた。

壁間には、日課が掲げられてゐた、毎日の日課中に必ず精神講話が豫定せられてゐるのが、特に注目を引く。

兵員の動作は、きびくしてゐる、上官に對する態度も申分はなかつた。私達一行に隨行した南京軍の下士や護衛兵達は、それに較べるに遙かにだらしなく見劣りがするのであつた。

「馮玉祥の兵は軍紀が厳正だ。」

そう云ふ批評を屢々聞いてゐたが、今彼等の軍隊生活に於ける内務の一端を實見して、私もそう思つたのである。

人はいふ「それは極めて峻嚴な罰則―死刑―を以て兵を感服せしめてゐるのだ。」と
或はそうかも知れない、併し短時間に表面だけを見た私には、それはわからなかつた。

一五、農村地獄

徐州を發し約五十分、利國驛は江蘇、山東の省境に位し、之を過ぐれば直に山東省内に入るのであ

津浦線を北上するに従つて、兩側の並樹が伐採せられてあるものが多い、村落の樹木―それは多分個々の農家に屬するものであらう―は多く伐採を免れてゐるが、運河の堤防其他に植えられた行樹の如きは、殆ど全部伐り盡されてある。それは山東軍が伐つたか、住民が採つたかを審かにすることができなかつたが、燃料として伐られたことに間違ひはなかつた。最近數年、幾度か南北戦争の衝にあつて、農村は疲弊し、鶏犬の聲なく、見渡す限り寂寥々の感があつた。

鐵道線路の兩側に在る空地と云ふ空地は、蜂の巢の如く掘り返されてゐる。若草が萌え出でつゝ、ある此の四月半ばでさへ、嫁を連れた老母や、息子を伴ふた老夫が、鍬と籠を持つて、二百三高地の彈痕のやうになつた地面を這ひ廻つてゐる。それは草の根を掘つて燃料の補ひにするのであつた。

籠を腰につけた小供は、胡籐の樹に登つて、其新芽と花を採つてゐる。顔も手も煤色をした農婦は切り株から新芽を物色しては、それを摘んでゐる。胡籐の葉と花は、最初焙じて茶の代りに使つてゐたが、後にはそんな贅澤を云つてゐる邊がなくなり、糞で副食物にするやうになつた。

列車の着く度に、ぞろ／＼と出て食を漁る老幼婦女は、されも之も、ぼろ／＼の着物を着て、女は頭髮を艾のやうにしてゐる。何れを見ても日に赫かれ色艶の全く失せた榮養不良の顔色をしてゐる。老人の顔には特別に深い皺が刻まれてゐる。



賣物の場車停(下) 民貧る來りが群に場車停(上)

まさに地獄から這ひ上がってきた餓鬼だ。

小供は、兵卒がレールの上に投げ捨てる梨のしんを争つて拾ひ、直ぐそれを口に持つていつた。女は煙草の吸殻を拾つて呑んでゐる。

塵芥を漁る者は、糞便の上に落ちた新聞紙、煙草の罐の蓋さへも見逃さなかつた。

停車場の構内に積んだ兵站の糧食は、暗夜に餓鬼共の襲撃を受け、歩哨はそれを嚇かすに聲を囁らす。

其處彼處の空地には、疲れ切つた若者が、土の上に晝寝の夢を食つてゐる。線路の下には、アンペラ製の蒲鉾小屋から、此の世の者とも思はれぬ顔附をした老人が、腹這ひになつて半身を乗り出し、物憂げにあたりを眺めてゐる。

小供達は半裸体で、それを見てもひかんのやうに腹ばかり膨れ、四肢は瘡せ細つてゐる、それにその哀れな小供等の大部は裸足である。

朝が来る、芥捨場から拾つて来たやうな、琥珀は剥けて黒い生地の現れた、そしてゆがんだ洗面器と、熱湯の這入つたごびん、それによごれ黒ずんだ手拭迄も添へて持つた子供やかみさん達が、

「洗臉」「洗臉」「洗々臉罷」

と云つて、兵卒達の間を縫うて廻つた。兵卒は銅錢十枚―我が四錢位に當る―位を投げ與へて、顔を

洗つてゐる。

さびんを提げ、大茶碗を鷓鴣かみにしたのが、

「喝茶籠」「喝茶籠」

と云つて、お茶の一杯賣りをして歩く。それは茶ではなく、木の葉で色を着けた湯である。

驛の裏手には、土の籠に石炭を焚き、まつ黒になつたさびんを幾つもかけて湯をたぎらせ、それを女小供に小賣してゐる。

胡麻や粟を、黒砂糖で固めた駄菓子、濕つた紙捲煙草の一本賣り、粥を賣る者、ちまきを賣る者、雜然混然、そして其間にホームの土の上に踞んで着物の虱を取つてゐるものがある。

停車場は宛然貧民窟を展開したやう、極度の生活苦に虐げられた哀れな老幼が乞食にも劣る其日の生計をさへ血眼にならねば暮して行くことができないのである。

農家には、鶏卵も豚も、なか／＼見當らぬ、それは匿くしてゐるせいもあつたが、豚を育て、卵を産ませる鶏を飼ふことさへも餘裕のないみじめな生活をする者が多いのである。吾々の宿營には、いつも副食物には少量の野菜しか得られなかつた。

戸外で立ちながら粟粥を嚙つてゐる小供がゐた。

「おまえは、其茶碗に何杯食ふのか。」

「二杯食ふ。」

「何杯食つたら腹が張るか。」

「腹が張る程食はれないや。」

之は私が問答した所の事實である、なんと云ふ悲惨な言葉だ。側に聞いてゐた〇總指揮が「可愛相だな」と何度も繰り返へし／＼云つてゐた。

戦争はもう今度ておしまいにせねばならぬ、それが農民に食を與へる唯一の方法である。

山東省は歴年軍閥から絞られ、租税の如きは現に二三年先の分迄も納めさせられてゐる。そればかりではない、元來山東省は人口の割に耕地面積が少い、従つて食糧は年々足らなくなる。

苛斂誅求から來る極度の疲弊と、食糧に對する人口の過剩から、勢他省への移住が盛んであつて、昨年山東から東三省に出稼又は移住したものは、優に百萬以上を算してゐるのである。

私が始めて山東の地誌を研究した時、山東の農夫は、飯の代りに地瓜を食ふとあつたので、瓜を飯の代りに食ふとは氣の毒だと思つてゐたが、其後地瓜は薩摩薯のことであることがわかり、大笑ひをしたことがあつた。

一六、輕便鐵道

五四

私達は利國驛の手前の柳泉に下車した、そこには停車場構内に、第〇軍司令部が置かれてあつた。軍の幕僚が、粗末なテーブルを圍んで地圖を按じてゐる。屋外や待合室には、兵員が所狭い程行李や装具をほり出して、多くはその上、その間に蹲踞して惰眠を貪るものや、物憂げな顔をしてゐる者ばかりである。電話の引込線が、纏れて地を這つてゐる。

裏口に歩哨の立つてゐる直ぐ後ろは、汚物や塵埃が鼻持もならぬ程に取り撒らされてゐる。下の凹地には、二三の兵が、何處を風が吹くかとばかり、藁蛙仙人をきめ込み、心地よげに尻を春風に翻らせてゐた。

こゝは三四箇月の間、南軍の滯陣した跡と見える、兵の宿營した跡は、とても穢い。

そのうち司令部は、指揮に便な東の方に位置を移すことになつた。

柳泉から輕便鐵道が××の炭坑迄通じてゐる、私は今其地名を思出すことができない、それは虎の子のやうに大事にしてゐた日誌が、方振武部下の盜賊に掠奪されたからである。

鐵道とは名ばかり、がた／＼の車であつた。將校や護兵は、狭い客車―それはやつと頭が問へない程の高さと、小窓を持ち、木製の狭い腰掛があるだけの―の中へ、ぎつしり詰め込まれ、兵員と行旅

は運炭の無蓋貨車に押し込まれた。人夫の或者は、荷物を持つて、吾勝ちに、自由の利く客車の屋根に登つて、寝そべつた。

やがて發車の合圖と共に、玩具のやうな汽車が動き始めた。

軍の總豫備は、まだ出發準備ができないと見えて、村落のはづれてがや／＼やつてゐる。Hの乗馬は馬丁に牽かれて線路の側の小道を先行してゐるが、汽車の音に驚いて俄に棒立ちになり、見る／＼疆を切つて麥畑の中を驀地に駆け出した。

「H君、君の馬だぜ。」

「おや、しまつた。」

「歸つて来るだらう。」

「歸つて来るかも知れないが、馬丁は此頃備つた奴だから、眞面目に追つかけるかさうかわからない」暫く進んでゐると、客車の屋根がめり／＼と音して落ちかゝつた。人は總立ちになつて下から支えた。

「汽車を停めろ。」

「上の奴を卸ろせ。」

人々は罵り騒いだ。車窓から大聲に停車を命じたけれど、なか／＼傳らない、喚く聲、呼子笛の音

五五

暫くは狭い車内が、ごつたがへしてゐるが、やつとのこゝで停車をした。
「降りろ。」

二三の人は溢々降りて来たが、なんといつても動かない奴がゐた。
護兵が車外に飛び出して、血相を變へて喚いた。

「降りなければ撃つぞ。」

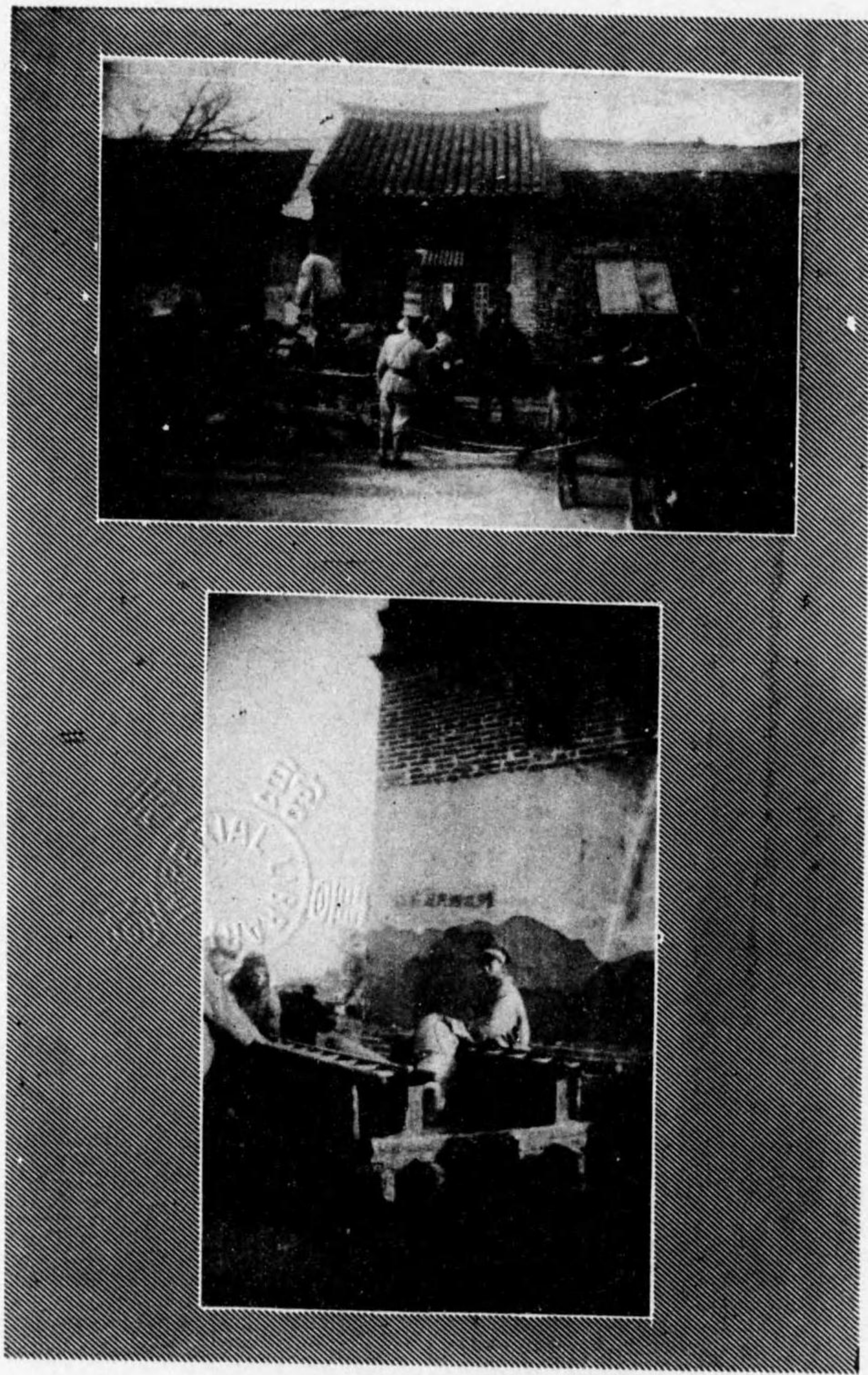
無規律で物臭な乞食の群一入夫一が不精無精に降りて来た、彼等はのろ／＼見てゐても腹が立つ程動作が鈍い、それでもやつとのことと荷物とめい／＼のからだを貨車の中に割り込ませて、やがて發車することができた。

一時間餘りの後に、炭坑に着いた。私達は炭坑事務室の一室を當てがわれ、そこに旅装を解いた。日の乗馬は、夕刻頃になつて、ひさりて宿營地になつて来た、多分軍司令部の行李について来たものであらう。だが馬丁はさう／＼歸つて来なかつた。

一七、俘虜 來

夜が明けた。フト眼をさますと前線に盛な銃砲聲がする。

「ドン、ドン」「ドン、ドン」



(車牛) 李 行 の 部 令 司 軍

二發宛齊發する砲聲が、斷續して聞える合間々に豆を煎るやうな銃聲がする。首を擡げて見廻はしたが、誰も彼も夜なかの夢である。前夜私達は田舎の大きな百姓家で、まだ本葬を終らぬ棺桶の置いてある室に同居したのだつた。

私は一人起きた、東は白んでゐる。手早く服を着て、双眼鏡を携へて村外れに行つた。

土壁の下、墓場の土饅頭の蔭には、朝の用便をする二三の兵卒が踞つてゐる。朝霧が一面に麥畑の上を這つてゐるので遠望がきかない。

銃砲聲は運河の線から來るものであることは疑はなかつた。私は小高い堤防に登つて、双眼鏡を眼に當てた。遠く霞のうちに一線を畫して堤防が見える、それは距離の關係上恐らくは大運河ではあるまいと思はれる、見渡す限り戰場は空虚である、散兵の一人も砲の一門も見ることにはできなかつた。

私は宿舎に歸つた。

暫くすると、勤務兵が「俘虜來了」「俘虜來了」と云つて報告して來た。私は又宿舎を飛び出して村外れに行つて見た。

彼方の凹道を、丸腰の兵がぞろ／＼と、こちらに向つてくる、南軍の武裝兵が凹道の上を歩いてゐる。宿營地の兵が傳へ聞いて、あちらからもこちらからも見物に出てくる。

「打倒帝國主義！」

突然、私の後ろに調子外れの聲が起つた。振り向いて見ると、生意氣そうな一人の兵が、駈け出しながら叫んでゐる。

「打倒帝國主義！」

彼が又叫んだ。

乞食のやうな張宗昌の兵が、なんて帝國主義乎、私は穴の明く程彼の顔を見てやつた。

彼の容貌には、ありくと先覺者振つた厭味たつぶりの表情が現れてゐた。彼は支那の學生達がするやうに長髪を帽子の後ろに食み出させ、もみ上げを耳の上で青く剃つた、見るからにきざな男だつた、この男は帝國主義を履き違えてゐるのだ、革命軍の政治訓練部は、こんな半可通を作るのが目的ではあるまい、だが、彼自身は其政治訓練部に屬してゐる半可通ではないのか？。

「馬鹿な奴めが！」

私は覺えず口の内でそう云つた。長髪を帽子の後ろから食み出させ、もみ上げを耳の上で削り取つた此のきざな男が兩手をポケットに突つ込んで立つてゐる、兵卒ではあるまい、恐らく將校であらう見るからに虫づの走る厭らしい奴であつた。

「こんな半可通が、見當違ひの打倒帝國主義を振り廻すのだ、それは小供に火を弄ばせると同じだ」
そう思ふと、この男が憎らしい程に思はれた。



（兵 東 山） 虜 俘

俘虜の一群は近づいて来た。百人近くはあらう、四十歳に近い老兵もあれば、十二三歳の少年もある。どれもこれも一様に、垢付き穢れた軍服を纏うてる。その顔を見ても營養不良と過勞とに見えるが、案外に皆呑氣な顔をしてゐた。

抜目のない物賣が、其一隊に近づいて行つた。俘虜は銅錢を出して燒餅を買ひ、むしゃくしとやつてるもある。買物のために、胸のかくしから銅錢を探してゐる、歩きながらすることであるから、なか／＼思ふやうに出ないので、次第に遅れて落伍するものができる。俘虜監視の兵卒が時々振りかへつて叱り付けるが、叱かる者も叱かられる者も無表情だ。

やがて村外れの空地に連れて來られた。南軍の某團が、昨夜敵陣地の前方に在る小さな丘阜を襲うた時に一連擧つて投降した者であることが、それを得意氣に話す監視兵の口から話された。

軍の副官處から、俘虜の受領委員を命ぜられた者達が出て來た、俘虜は二列に並べられ、踞かされた。

手帳を持つた二三名の將校が一々俘虜を尋問して其隊號氏名を記録した。見物にやつて來た兵卒等は其周圍に群集して、口々に色々な質問を投げかける。

「オイ兄弟達、給料は貰つてるか。」

革命軍の兵卒は、得意氣に「兄弟達」と云つた。

「張宗昌はくれない、……ばつかりぢやない、一箇月二元きりの食料だよ。」

「腹が減つては戦は出来ないの。」

「うん、俺達は丁度一日一晚飯を食はないのだ。」

眼の凹んだ老兵が、殊更に腹のすいた顔をして見せた。事實かも知れないが、卑屈な男が敵の意を迎へるためによくいふやつだ。

生意氣盛りの革命軍の兵が胸のかくしから、四五枚の一角や二角紙幣——それは中央銀行の十錢二十錢さつである——を出して、見せびらかしながら、

「さうだ、俺達にはこんなに錢があるぞ。」

俘虜の老兵は、首を捻ぢ向けて見上げた。外の俘虜たちもチラとそれを見た。

列の端に、黙々然として、そして思慮のありそうな一人の男が踞まつてゐる。俘虜が尋問せられた時、異口同音に「官長は居ない」と云つた。官長とは將校のことである。だが私は此の男の服装が、並の兵卒と少しも違はないにも拘らずそれを「連長」——中隊長ではないかと直覺した。

「連長がゐるだらう?。」

委員がそういつて誰に尋ねるともなく尋ねた。

「連長は逃げた。」

そこでもこゝでもそう云ふ答がした。

小春日和だ。敵と味方の差別なく、其柔かな鬨を投げかけてゐる。

私は且に云つた。

「食はせるのが大變だね。」

「第〇軍の正面だけで五六百はある。」

「さうするんだ?。」

「徐州か南京に送つて土工に使ふ筈だ。」

一八、俘虜の尋問

夜になつて又別の俘虜が来た、其うちには連長もゐた。且參謀がそれを尋問する、

「誰の支隊だ?。」

「×××。」

「いつ前線に来たのか。」

「戦鬨の始まる二日前。」

「豫め云つて置くが、こゝちらでは色々の方面で調べてあるから、嘘を云つても直ぐわかる。事實を云

へば、おまえ達の希望に依ては現官同等に使つてやるが、詐を申立てると銃殺するぞ。」

「ハイ、決して嘘は申しません。」

「前線には、誰々の支隊が居たか。」

「×××、□□、○○○の三支隊、○○○は騎兵です。」

「×××支隊は何人か。」

「四千位でせう。」

「大砲は持てるか。」

「ありません。」

「機關槍は？ 迫撃砲は？」

「機關槍は一連、迫撃砲は五六門位あります。」

「おまえ達は運河に據つて何處迄も抵抗するつもりであつたか、それともすぐに退却するつもりであつたか。」

「抵抗するつもりでありました、張督辦が臨城に來てゐましたから、退却することはできません。」

「それでも退却したてはないか。」

「それは臺兒莊の友軍が十日に撤退したからです。」

「それは革命軍の方が強いからだ。」

「張督辦は、退却して來た將校を、拳銃で撃ち殺したそうです、だから吾々はなか／＼退却はしませんでした。」

「韓莊には誰の兵がゐたか。」

「某支隊と其支隊。」

「鐵甲車もゐるだらう。」

「二列車あると思ひます。」

「彈藥はいくら持てるるか。」

「各兵百五十發。」

「給料は貰つてるか。」

「此四五箇月貰ひません。」

「それでは困るだらう。」

「兵卒の食料は、月々二元内外です、それに兵は皆一晝夜食事をしてゐません。」

「戦闘中は誰も同じだ。」

「靴が皆破れてゐます。」

「今飯は食はせてやる。」

「界河に陣地があるが、おまえは見たらう。」

「あることは聞いてゐますが、列車の中からは氣を着けませんでした。」

「泰安は？」

「有ります、餘程前から構築してゐたやうに聞いて居ります。」

「前線から来る迄は、何處にゐたか。」

「濟南にゐました。」

「何をしてゐた。」

「督辦の檢閲がありました、急に出發命令が下つて、こゝに來たのであります。」

「すぐに戦争が始まると思つてゐたか。」

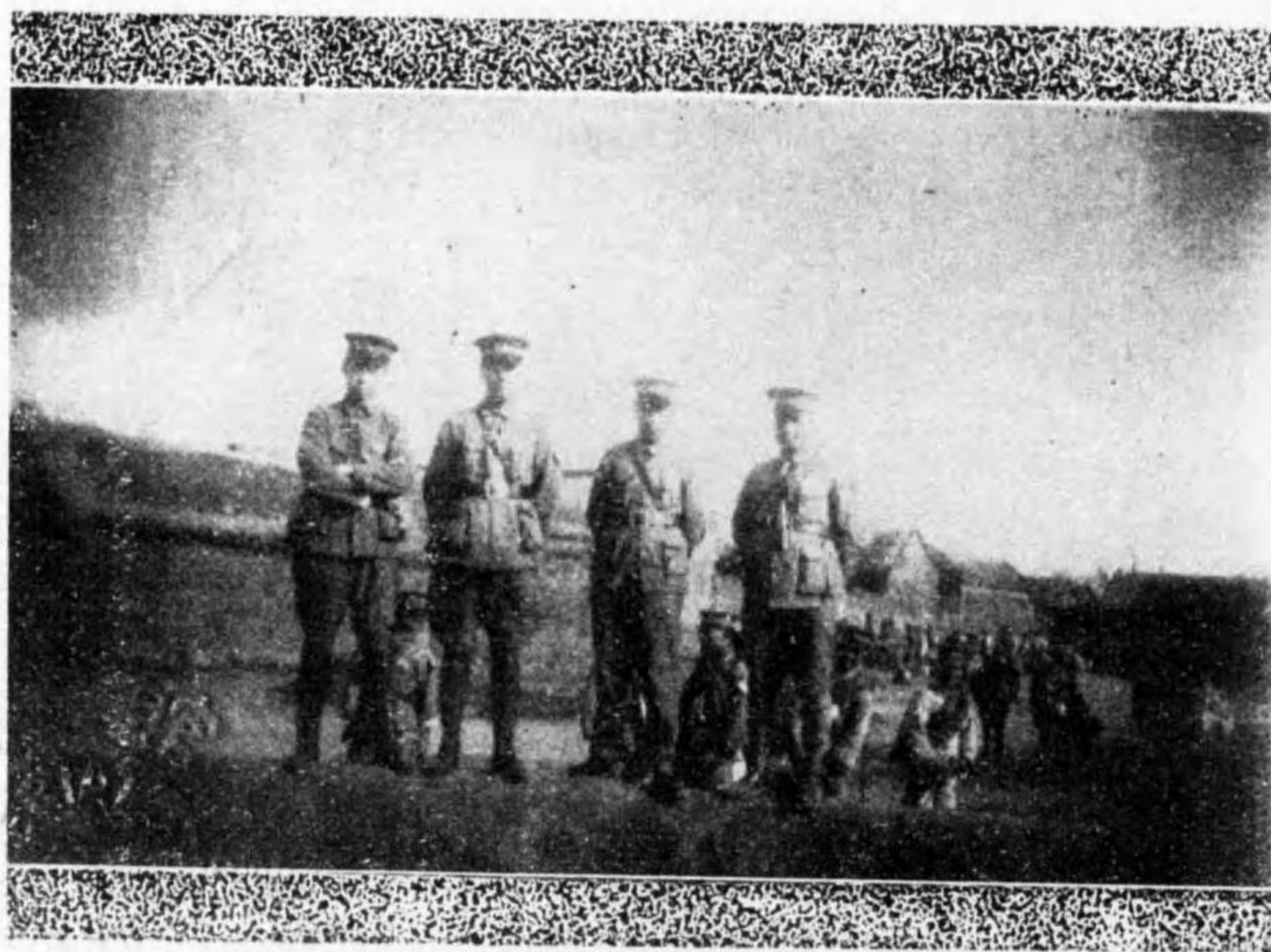
「こゝう早く始まるものとは、誰も思つてはゐませんでした。」

「臺兒莊の陣地は？」

「あれは天津から獨逸人を備つて、作らせたものゝ聞いてゐます。」

「兵は皆戦争をするつもりでゐるか。」

「戦争をするつもりはありませんが、命令を聽かねば殺されます。」



僚幕其と長軍×第

「よろしい、尋問は之で終る。おまえ達はもう吾々の敵ではない、安心をして命令を待つやうに、仲間にも話しておけ。」

「ハイ。」

俘虜の連長は、踵をつけて恭々しく敬禮をした。

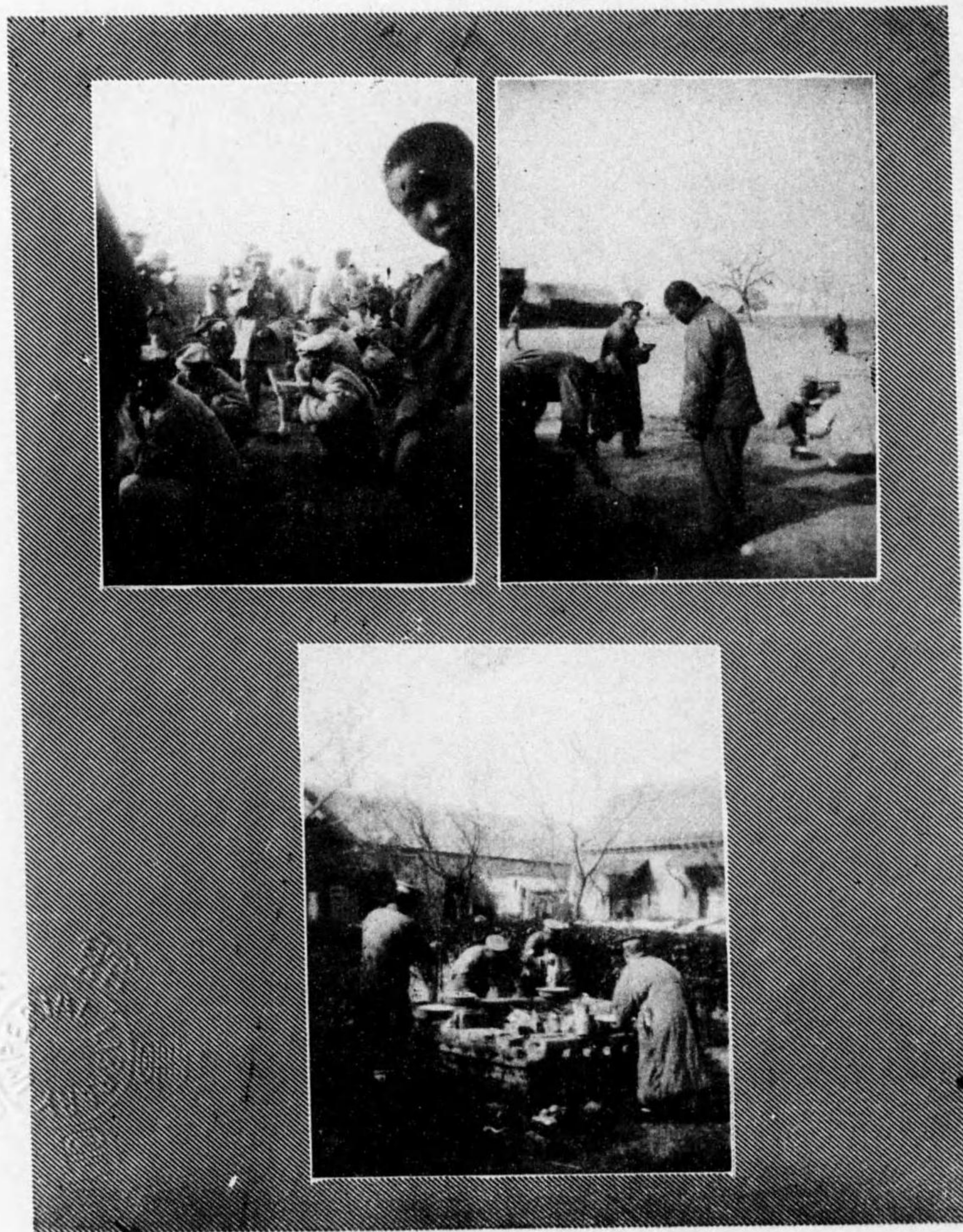
一九、貧村の舎營

第×軍は其軍部—軍司令部—を大運河の線迄進めた。

此附近は一帶に寒村ばかりであつた、特に運河のお蔭で飯を食つてゐる河添ひの部落は、殊の外甚しかつた。乾燥期の大運河は、山間の溪流にだも如かない。

灰色の土の矮屋が、堤防の上に、密集して無秩序に立ち並んでゐた。此の朝迄戦線であつた堤防一帯の各部落には、住民の影も極疎らであつた、運河の堤防には、所々に各兵各個に構築した散兵壕の跡があり、撃ち殻藥莢が散亂してゐる。乾いた血が、ドス黒く赤土を染め草を彩つてゐて、凄惨の氣がそゞろに人の斷末魔の苦を聯想させる。

矮屋の一つが、私等の宿舎に割當てられた。入口の外に窓を持たぬ土屋の中は、眞晝にも拘らず眞つ暗であつたが、それでも慣れるに従つて物のあやめを分つことができた。頭の届きそうな梁は煤で



(兵の軍北西は帽打鳥)事食と配分の食糧(上)
 面洗か僅てけ付見を暇の中陣濯洗の中陣(下)
 るすを濯洗で水の杯一器

眞黒に染められてゐて、之も眞黒な蜘蛛の糸が垂れさがつてゐる。天井には固より板はなく、腹わたの麥藁が屋根代りに塗られた土の間からはみ出てゐる。壁も床も皆ざら／＼の土であつて、臭蟲―南京虫―の一群が、今にもそろ／＼と這ひ上つてくるやうに思はれた。

六つの携帶寢臺が二列に並べられた。六人の勤務兵は、部屋の一角に油布を敷き、幾年かの間一度も洗つたことのない垢ばかりの煎餅薄團を、其上に敷き伸べた。

屋内には只一脚の壊れか、つた小卓子の外は、何一つ家具はなかつた、部屋は足の入れ場にも困る程に狭くなつた。將校は自分の寢臺に腰を掛け、勤務兵が注いでくれる、魔法瓶からの熱い白湯を飲んだ。

崩れか、りの土壁の傍に、石が積まれてやがて、竈が作られた、穀物がらの燃料から、煙がゆらゆらと壁を越え、屋根を這ひ上つて、大氣の中を流れて行つた。此の寒村にも、けふは珍らしく豊かな炊煙が昂がるのである。

夜の帷が、麥畑に、堤防に、土屋に、皆一様に其上から被ひ懸つた。

蠟燭のあかりが、私等の一夜の安息所のうちを貧しく照らした。勤務兵の或者はスー／＼と微躬を立て、土間の上に眠つてゐる、彼等には、今寝ることの外に楽しみがなかつた。日に焼かれた蒼黒い顔、だらしなく開かれた口からは、齒ぐそによごれた穢い齒が見える。

「彼も人の子支那の兵。」

私は外套を引被り、所在なき儘貧弱な燈火の下で地圖を披いた。

一一〇、擬東亞會議—支那代表の發言

簡素な夕食を済ませた。今夜は銃聲も聞えない。私達は、もう南京虫に喰はれながら寝るばかりである。

○軍長、W軍參謀長、H總司令部高級參謀、○參謀、K參謀等が、期せずして私達の狭い土屋に集まつて來た。携帶寢臺に腰を掛けたり、胡坐をかいたりして、Hが行李に入れて來たアメリカン、ピケットを噛り、茶を飲みながら雑談を始めた。

○は、足の指の股の水虫を熱い湯にたて、ゐる。

蠟燭の火が、戸口から漏れて入る風にゆらくと揺ぐ、今夜は少し寒い。

此十日間、私は一滴の酒も口にしない、こんな晩に燒酒でもあればと思つたが、とても此寒村では一滴のアルコホルさへ見付けられはすまい。

「支那の將校以下が、皆困苦缺乏に甘んじてゐるのに、私だけそんな贅澤を云つてはすまぬ。

「今晚はひまだから、日支聯盟に就いて、開議を開こうではないか。」

Hが云つた。

「よかろう。」賛成 賛成」

皆口々にそう答へた。

Hは早速日本語で始めた、不満を漏らすは此時とばかり……
「支那人は日本を最も恐れてゐる、支那を壓迫してゐる帝國主義の首魁は勿論英國であるが、最も恐れてゐるのは日本だ、それは日本が何か、はい、はい、か、と云ふ恐てある。吾々支那人の多數は、日本人を好戦國民であるかの如く考へてゐる。」

「日本は支那と提携せねばならぬ、支那を壓迫するのは日本の損である、共存共榮は日支兩國の利益であるばかりでなく、必然的運命である、口頭禪であつてはならぬ。それなのに、日本はなぜ、共存共榮を希はないのか、日本の遺口は常に恰かもそれを裏切るが如くに見えるではないか。」

「君は今日あの哀れなる貧民を見たであらう、あれは軍閥の苛斂誅求の結果ばかりではない、帝國主義壓迫の間接的影響を受けてゐる結果でもある。現在支那の農民は、もはやこの上の窮迫はない程に虐げられてゐる、だがあれも中華民國の現在の姿を縮圖したものである。支那が不平等條約に苦しんでゐることは、君が夙に熟知してゐる所であると思ふ。」

「日本が支那を壓迫する代りに、卒先して不平等條約を撤廢するならば、いや其意思のあることだけ

でも發表してくれるならば、如何に支那人は安心をし又感謝するであらうか。若し日本がそれを卒先して主張してくれるならば、列強は問題ではないと思ふ。只日本一國が、支那を不平等條約の桎梏から救ふ鍵を持つてゐるのだ、それをすることが、共存共榮の基礎條件であると君は思はないのか。」

「印度を御覽なさい、安南を御覽なさい、支那を御覽なさい、東洋を白人の壓迫下に委ねることが果して日本の利益であるか。日本が、吾々支那人の眼に脅威と感ぜなくなり、眞の日支提携ができるならば、私は吾々の此の不完全な武備なんか要らないとさへ考へてゐる、然るに事實はさうか、日本は英國と一所になつて、支那を壓迫するではないか、日本の資本主義が、いつ迄も續くものさば私は考へない、帝國主義をやめなければ、支那ばかりではない日本も共に仆れるかも知れぬ。」

斯く云つた後、其要點を自ら支那語で話した。OもKもWも皆點頭した。
で、私は斯う答へた。

「宜しい、今夜私は只一人の日本人代表として、諸君の日本に對する不満を聴かう。序でにH君には此會議の議長になつて貰つて、議事の進行を主宰して貰ひ度い、諸君、H君を本會議の議長に推そうではないか。」

で、日本陸軍の最高學府を出たHが、議長席——と云つても部屋の隅に置かれた粗末な野戰寢臺である——に就いた。

K 參謀が次に口を開いた。

「孫中山先生は、日本と協力するのでなければ、東亞の和平は望まれないと云はれたことがある。それは苟くも、東亞の形勢を大觀する者の、等しく認める所でなければならぬ。だが何も吾々は、今日本から物質上の援助を得やうとは思はない、只精神的の援助を望むのである。日本は此精神的援助をさへ、吾々に與へることを拒むのであるか。日本が多年の間、不平等條約に苦しめられてゐたことは吾々も善く知つてゐる、だからその日本が、吾々の痛苦を知らぬ筈は無いと思ふ。やがて革命軍は、北京をとり中國を統一するであらう、それでもまだ日本は吾々に好意を示さないのか。日本は何故に張作霖を庇護するのか、あれは中國の統一を妨害する吾々の敵ではないか。吾々の願ひは單に、日本が張を保護しないでくれることだ、只それ丈けだ、それ以上を望んでほらないのだ、それすら日本は實行してくれない。吾々中國人が、排日をやることは、日本人を敵とするつもりでは絶対にない、日本人の反省を促さんが爲めである。それとも日本は、吾々を敵とするのか。吾々の背後には、全中國の民衆がある、日本は斷じて我全民衆を敵とするやうな愚を學ぶものではあるまい、と僕は信ずる。」

「不平等條約の撤廢は、吾々中國の最少限度の願である。僕は日本代表に希望する、日本は速かに我が中國の希望を容れ、條約改訂を援助せられ度い。」

此の若き黃埔軍官の第一期生は、端的にそう云つた。昂然として、而かもニコ／＼し乍らそう云つ

て口を緘んだ。

O 軍長も、W 軍參謀長も、黙々として聽いてゐる。H が流暢な日本語を以て、一語も残さず通譯してくれた。

私は、Y がいつも口癖のやうに云ふ所の「日本人は餘りに主觀的だ、少しは客觀的に見る丈けの雅量を持つてほしい。」と云ふことを思出した。

支那側の要求は、それで盡きてゐる、この上もはや聞くの必要はないと思はれる。で私はHに通譯を依頼して「私は日本人代表として我日本人の主張を述べねばならぬ」と前提して、次のことを長々と辯じた。

一一、擬東亞會議—日本代表の主張

「今日君は、我日本國民を好戰國民と云つた、それはとんでもない誤解である。由來貴國は崇文卑武の國、而して我日本は尙武の國であると云はれてゐる、だから斯う云ふ錯覺もそれから起るのであるまいか、抑々我日本人の尙武心には、其因つて來る所の原因があるのだ。」

「我日本は、封建時代を距ること僅かに六十年、尙武の氣象は、尙生々と残つてゐるが、只そればかりではない、實に建國以來の歴史的環境に由來する所が大なるものがあるのである。」

「抑々我大和民族の根幹を成す所の種族は、約二千六百年の昔、皇祖神武天皇に卒らられて、日本の邊境から本土に渡來し、國礎を開いて後千數百年の間は、國內に於ける異種族の征服に征戰を繰り返してゐるのだ、其の間勿論太平無事の時代はあつたが、絶えず武を研き武備を收めて内外の敵に備えねばならなかつた。其後源平二氏の争覇となり、次で鎌倉時代に至り、政權は漸く武家に移つた。北條、足利の兩氏を経て、世は亂れて戰國時代となつたが、豊臣氏出て國内を統一し、次で徳川氏之に代り、凡そ三百年を経て明治維新となり、萬機は再び天皇の親裁せらるゝ所となつた。斯る争鬪の反覆せられたる間、皇統は連綿として盡くることなく、皇室は、何れの時代に於ても、國民尊崇の中心なり、尊皇は實に我が國民道德の大本となつたのである。」

「日本の皇統は、ごんなに續いてゐるのか。」

「然り、それは萬那無比である。」

「諸君は、我が武士道なるものに就て知つてゐるであらう、武門武士に依つて研かれた武士道は、實に此皇室中心主義に由來する君臣の大義から發程してゐるのである。諸君は誤解してはならぬ、それは斷じて戰陣の間に發達した争鬪心の結晶ではない、人倫の大綱、天下の常道より發たる最高の道德であつた、而してそれは又貴國より舶來した儒教の教義からも影響する所が少くないのである。」

「戰國殺代の時代に當つては、骨肉相争ひ、君臣相攻むるの例は無きにもあらずと雖、此殺人奪城

を目的とした時代に於てさへ、或は武士は相身互身と云ひ、或は遇するに武士の禮を以てすと云ひ、或は敵國に欠乏せる鹽を送る程の雅量があつた、それは豊かな人間味の發露である云はなければならぬ。」

「古の武門武士には、歌人が少くなかつた、それは優にやさしき情緒の持主であつたからである。諸君は、以上私の言ふ所に依つて、我武士道の精華を理解せられたこと、思ふ、好戰國民とするは謂はれなきことである。」

且は一語も残さず、それを通譯してくれる。

「日清、日露の戰役を諸君は云ふ乎、それは自衛上己むことを得ざりしものである。私の尋常小學校當時―それは日清戰爭直前であつた―こう云ふ唱歌があつた。

撃てや懲せや清國を

清は御國の誓なるぞ

東洋平和の誓なるぞ

撃ちて正しき國とせよ

其の頃の貴國が、我國を壓迫してゐたことは、この歌が國民的義憤の聲であつたのを見てわかる又日露戰爭はさうであるか、拳匪の亂を口實に滿洲に出兵した露西亞は、亂後に至るも徹兵をしな

つたしなかつたのみならず、朝鮮を其勢力下に置いて、我國の心臓に短刀を擬するやうな態度をさへ執つたてはないか。日本は坐して滅びんより、進んで興廢を此一戦に決するの外はなかつたのだ。兩次の戦役共に、朝鮮問題が其因を爲してゐる、諸君は日韓合邦に就ても、理解がてきねばならぬ筈である。」

「明治維新に依て開國をしたが、三百年間の鎖國の夢からやつと目醒めた我國は、不平等條約に苦しまねばならなかつた。爾來國民は眞に臥薪嘗膽した、歐州人に伍するためには、社交に習はねばならぬとて廟堂の士が盛にダンスをやつたやうな滑稽をさへ演じたが、一方に於ては武力の充實のために官吏全体が製艦費として、俸給の幾分の一とかを献金したりしてゐる。爾來法制の完備をはかり維新後二十二年にして憲法が發布せられ、其翌年國會が開設せられた。斯くて最後の不平等條約は最近に至つて改訂せられ、我國は漸くにして世界各國と對等の交際ができることになつたのである。諸君、之は皆我國民が一致協力して、自ら祖國の運命を開拓することに努力をしたからである。弱き者が強くなる爲めの努力、諸君には之が好戰的であると思へる乎。」

事實は無二の雄辯である。民國の議員は、誰一人反對をする者もなく傾聴した。

「滿洲に於ける露國の利權の繼承は我國運を賭して獲たる權益である。日清戦争後、三國干渉に對して我國民が如何に切齒扼腕したか。十年の臥薪嘗膽から、日本が自衛上とは云ひながら、猛然立つて



強露に抗したればこそ、滿洲は今日支那の領土として残されてゐるのである。抑々我國は年々約八十万の人口が増加する、昨年の如きは實に九十萬に達してゐる、日本の最も困る所は食料問題である。日本が滿洲に期待する所のものは、其領土ではなく、其豊富なる資源である。即ち日本民族の生存に必要な資源を、最も便利の状態に於て獲得せんとするに外ならないのである。人類は生きねばならぬ。國家も亦生存を續けねばならぬ。生きんとする慾望の力は、何ものと雖之に及ぶものはない。貴國が若し、其有り餘れる富源を各しみ、殊に日本が國家の滅亡を賭して、先の強奪者の手より奪ひ還して支那の領土に復した滿洲から、資源を得んとする日本の企圖に對し、人間味を没却してかゝる如き態度を以て望み來るならば、我民族は、遺憾乍ら自己の生存の爲めに、再び争はねばならぬことを斷言する。」

且の後ろにゐた二人の若い副官が私語してゐた、それは明かに不満の色に見えた。私はかまわずに語を續けた。

「昨年山東省から、南北滿洲に移民した貴國人は大連、營口及陸路よりして少くも六十萬―百萬に達すとも云はれてゐる―はあつた。彼等の多くは支那本部に於ける落伍者であらう、併し東三省が是等の窮民の移住に適するからでもある。冷靜に見て今日支那國內に於ける最も安全な地域は東三省であるが、諸君は之を以て張作霖一人の功に歸することが出来る乎。」

「日本の滿洲に對する投資の大部は、貴國の移民を肥やすに過ぎないとさへ云はれてゐる。既に貴國にこれだけの利益がある。滿鐵が殖民會社の性質を帯びてゐればとて、必ずしも貴國はそれを氣に病むの必要はないではないか。再び云ふ、日本は滿洲の主權と主權とは何等の關心を持たぬ、貴國人が今だに日本と張作霖とに、何等かの暗い關係がありと考へるのは、甚だしき錯覺である。假りに若し、張作霖の代りに國民黨政權が、東三省を治めるものとして、それが若し日本民族の生存上の要求に理解を持つならば、吾々は決して夫れに反對するものではない。」

私はこゝでひき先づ言葉を切つた。

C 軍長が初めて口を開いた。

「S君の云はれる迄もなく、私は、日本が強國に伍するに至る迄の、日本人の努力を熟知してゐる、私は夫れに對して密かに敬意をさへ拂つてゐるのだ、吾々も亦今、日本が踏んだ其過程を進んでゐる、願はくば日本は、今の中國の悩みを最も善く理解する第一人者であつてほしい。」

C の云ふ所は尤である。

「滿洲問題に就ては、日本人は皆眞剣である。國民黨の所謂不平等條約の徹底の如きを抽象的、概念的に振り翳して來ても、問題は解決されぬと思ふ。諸君は北京を取つた後、東三省に手を染むる時には充分事前に、可能の範圍に於て豫め具体案を作つた後、初めて交渉に入らるゝことを希望せざるを

得ぬ、而して此の審議的豫備會議は、日支兩國人に依て組織されねばならぬと思ふ。私は現役軍人であつて、政治上には發言權はない、併し國民の一人として思ふ儘をこゝに述べるのである。」

H は實によく通譯してくれた、私の説く所は十二分に傳へられた。

C が云つた。

「其時はS君に必ず一票を持つて貰ひ度い。」

K が云つた。

「吾々は日本かほんとうの友人になつてくれることを希望する。」

H が最後に云つた。

「本議長は、こゝに日支兩國代表が互に十分に且最善の意思疏通を遂ぐることができ、大成功の下に閉會するに至つたことを各位と共に喜ぶものであります。次回は北京に於て閉會することを提議します。」

「賛成」「賛成」「好了好了」

咄辯の私が、意外の長廣舌を揮つた。私は云はねばならぬことを云つたこゝに多大の満足を感じた狭い床の中に這入つた後、暫くは興奮して寝付かれなかつた。

一二一、どん底生活の窮民

七八

私は、大運河の堤防の上で、世にも哀れなる、どん底生活の窮民を見た。
土窟の上に、鈍角の底邊を地面に置くアンペラ製の屋根が、低く被はれ、犬の潜れる程の入口は、土の階段を以てなつてゐる。薄暗い内部に土の床が二つあつて、雑巾のやうな萬年床が、垢付き濕つた儘伸べられてあつた。

庭とも見える堤防の上には、壊れた儘半ば土に埋もれた大きな石臼が横はり、茶碗の破片が散亂してゐた。猫の額程の此の庭園の一隅には、形ばかりの淺い塹壕が作られ、胸墻の上には、今しがた迄銃身を横へた跡がありくと残つてゐる。老人が丹青して作つた一握りにも足らぬ韭は、無残にも掘りかへされ、踏みたくられてあつた。

兩眼の縁が、赤く爛れた梅干婆が、土窟の入口に近く胡坐し、ひと掴み程の新綿を、膝の上に置いて、それから糸を撚つてゐる。

孫娘とも見える二人の女兒が、一人は老婆の膝に凭れ、一人は無心に土をいぢつてゐた。

夕陽がはや一望際涯もなき麥畑のかたに沈みかけ、蜿々長蛇ののたくつてゐるやうな運河の堤防が、暗い陰影を水の上に投げかけてゐた。四月の夕暮だけに風は涼しい。

老婆は私等を見上げて、赤眼を瞬いた。

「小帽子はいつ逃げたかい？」（山東兵はいつ逃げたか？）

「へえ、旦那様、けふの晝前頃に逃げましただよ、へえ、みんな逃げて行きましただよ。」

「そうかい、で小帽子はいつ頃から來てゐたんだい？」

「旦那様、けふて丁度九十六日になりますだよ。ぢいさんは一人でぶり／＼怒つて、妾にあたり散らし飯も食べないことが多かつたに、だがこの婆は殺されたつて恐ろしくはないから、云つてやつただよ。」

「なんと云つてやつたのだ？」

「見てくらつせ、うちの麥畑を、たつたあれつばかりの麥の芽を、馬に喰はせよる、ばどは云つてやつただ、おまえ達は督辦の命令で、おらが麥を馬に喰はせるだあか、張宗昌はぢどとばどと二人の孫が干ぼしになつてもえ、と云ひくさつたかどね。するとなんちう亂暴だか、おらがとこの茶碗を、いきなり石臼に叩きつけて、粉微塵に打ち壊すてねえか。」

「うむ、それは亂暴だね。」

「けさ程も丘八―丘八は兵の字を分解せるものにて兵を語る語―の奴等、鐵砲を庭に向けて撃ちくさるてぬえか、給金のう貰えねえのはおらが知つたことてねえだに。……おらはけさ程から、何度も

七九

々々も革命軍のほうを拜んでるただよ。」

H參謀が、我意を得たりとばかり、私の顔を見た。

「この婆奴、お世辭を云つてゐるな。」と私は心中に思った、併し山東軍なら、否支那の兵隊なら、そんなことは朝飯前だとも思つて見た。

瘠せた丈の高い老人が、軒の低い灰色の家からのつそり現はれた。

「小帽子は皆逃げたよ。俺が家には排長―小隊長―がゐるたよ、俺は云つたよ、俺のうちは絶対安全だよ。頭さへ揚げなければとね、ワハ………。張宗昌が、給料をやらないから、兵隊は革命軍のほうを撃たなかつたよ。」

老婆は、残つた齒の疎らな口元をもがくやつてゐるたが、突然口を挟んだ。

「ちいさんは、小帽子が逃げてから急に強くなつただよ、エヘ………。」

老翁の言葉には、文語が交へられてゐた。

「おまえ達は、いつからこゝに住んでゐるのかね?」

「もう永いことになりますだ。韓莊に住んでゐる頃には、小がねも持つてゐるたが、ちいさんが阿片と女に癡つて、とう／＼こんな零落れてしまつただよ。それに息子に死なれて、孫迄も引き取らにやならねえことになつただよ。」

老翁はいつの間にか逃げ匿れてゐた。

私達は互に顔を見合はせた。Hはポケットを搜つて一元の現大洋―銀貨―を老婆に與へた。

老婆は、目を瞬きながら、私達を仰ぎ見た。

「多謝、多謝。」

爛れた眼の縁から、涙が糸を引いて、皺だらけの頬を流れた。老婆は、銀貨を握り絞めた儘、枯木のやうな、澁紙色の手で、兩眼をこすつた。

惨鼻に堪えなかつた。私達は顔を背けた。

「お蔭さまで、一家四人が、もう半月御飯を食べられますだ、謝々、大人納!」

老翁がいつの間にか出て來てゐた。老婆はくさくさと訴へてゐるたが、此氣位の高い老人は、「それは婆が恵まれたおあしだ、婆はたんと禮を云ふがい、俺には何の關係もないことだ。」と云はぬ許りに、無關心げの態度であつた。

「此の頑固おやぢも、一元の御利役を、半月の間ありつけるのだらうに、なんと云ふ妙らきりんなおやぢだらう?ほんとうに支那人の心はわからないな。」

私は其時そう思つた。

日は三つぶり暮れた。見渡す限り只一つの燈火さへ見えなかつた。戰場は死のやうな静寂である。

私達は、水のちよろ／＼に流れてゐる煬帝の河を、飛石傳ひに渡つて、南京蟲の御殿に歸つて來た。

一三、開戦劈頭の戦勝—第一軍團の戦績

四月九日、津浦正面を準備してゐた第一軍は、其久しき滯陣から活動を起こし、韓莊、臺兒莊間運河の線に在る山東軍の守備線前に其各師を展開し、第九軍は其右に連つて、内側に折り曲げてゐた右翼を張り出し、臺兒莊の前面に、其戦線を進めた。

新たに到着した第四軍並第十軍は、其掩護下に各枚を含んで大運河を渡河し、九日夕刻には左に旋回して、山東江蘇省境に殺到し、臺兒莊に對して包圍の姿勢を執り、戰略的關係に於て先づ優勝の位置に立つた。加之兵數と士氣の點に於ては革命軍は早く既に敵を呑んでゐるのであつた。

四月十日、正面に於ては、敵を牽制するため陽攻を開始したが、第九軍は此日既に臺兒莊の一部を奪取し、第四軍は其東方地域を、黙々として依然包圍の爲めの施回運動を繼續しつゝ、あつたのである。此日獨立第三十七師團及總司令部警衛師は、津浦線正面の後方に前進して總豫備となつた。

四月十一日、第四軍の包圍運動は功を奏し、午前既に嶧縣を占領し、臺兒莊の敵の背後連絡線を遮斷した。該敵は第四軍の包圍運動に多大の脅威を感じ十日夜より全線の徹退を開始し、逃げ遅れたるものは、遂に鐵道を避けて西北方に潰走する外はなかつた。

第九軍は確實に臺兒莊を占領し、又第一軍の右翼は此日夕、第九軍に連繫して運河を渡河したが右翼方面の情況審ならざる爲、遠く北方に追撃することを敢てしなかつた。

戦闘が高潮に達しない前に、勝敗の數は既に決したのである。第一軍の左翼師は韓莊附近の敵、就中鐵甲車に妨げられて、攻撃は進捗しなかつたが、右翼の一團は、右師團に連繫して運河を渡り、格闘の後、敵陣地の一部を奪取した。

四月十二日、第四、第九軍は、敵を追撃して此日夕、臨城の東方に進出したが、敗兵を收容する爲こゝを先途と奮闘する山東軍の鐵甲車に妨げられ、第四軍は屢々之に對して突撃を実施したが、機關銃の雍射に遭うて失敗し、多大の損害を被つた。

此夜韓莊の山東軍は、鐵橋の一部を爆破して北方に徹退した。

四月十三日、第一軍は、早朝より追撃に移つたが、其の頃第四、第九軍は、臨城を通過して津浦線上を追撃に移つてゐる。

第十軍は、終始軍團總豫備として第二線に在つた。

第四軍は、草鞋を穿き、菅笠を被つた廣東兵である、昨年河南に於て奉天軍を敗つた時、所謂鐵軍の名を贏ち得たる常勝軍である。見かけは百姓一揆のやうな不體裁な軍隊であるが、戦争にはなかなか

か強いらしい。其後共産軍として武漢から江西へ、江西から廣東へと暴ばれ廻つたが、更に共産黨を排除して南京に歸參し、最近北伐軍に参加するに至つたものである。

該軍は、十五年の北伐開始以來、常勝の自信に依つて戦つてゐるのである。河南の戦闘に、該軍の團長として參加した〇が云つたが、あの時の戦闘に、彼の屬する第一團は、僅か半日の間に、彼の負傷を始めとし、三名の營長中一名は死し一名は傷き、十二名の連長は十一名迄死傷し、兵員は三分の一の損害を受くるに至つたが、終始其位置を固守して敢て退却をしなかつた。この戦闘に於ける奉天軍の砲兵射撃は實に精確を極め、瞬くひまに死傷者續出するに至つたと云ふ。鐵軍、鐵軍……支那軍にも鐵軍が出来た、侮ることは出来ぬ。」

總攻撃開始後、僅かに二日にして赫々たる戦勝の榮冠は革命軍の頭上に輝き、四日目には既に戰略追撃に移つてゐるのである。

第一軍團は、第十軍を除けば皆所謂固有の黨軍である。

軍團總指揮は劉峙、元第一軍長であり、今次の北伐總攻撃と共に、何應欽に代つて軍團の指揮を執つた。江西人、本年三拾九歳の武將。

二四、無慘なる同胞殺戮戰

總攻撃を開始した後三日目に、津浦鐵路正面の韓莊が占領された。私は旦と同行して新匣子を發し煬帝の築きしう大運河に沿ふて馬を驅つた。

見渡す限り蒼々たる麥畑と之を、點綴する灰色の村落と、村落を假粧する樹々の新緑とである。砲聲が次第々々に津浦線を北に移動してゐるのがわかる。山東軍の鐵甲車が健氣にも、且戦ひ且退いて、味方の退却を收容してゐるに違ひないと思はれる。

遠く紫に霞んでゐるのは臨城附近の山々であらう、砲聲は次第にその紫の霞のうちにかくれる。一行は運河の南岸を西進する。

堤防には點々として、南軍の各個散兵の工事の跡があり、多數の藥莢や挿彈子が散亂してゐるのは戦闘の跡を偲ばしむるに充分であつた。

堤下の麥畑に、淺く土を盛り上げて蒲鋒狀にしたものが、少からず點在してゐるのは、戦死者の爲めに、戦友の心盡しの奥都城であつた。

勦ずんだ、血が生々と堤防の草を彩り、彈丸に破られた軍帽が其處彼處に散らばつてた。取り残された、死屍は更に無慘であつた、流血は赤黒く凝結して若草を穢し、死屍には蒼蠅が群をな

してたかつてるる。

哀れむべき散兵戦の消耗品よ！、彼等は銃拭木綿の如く使ひ捨てられてるるのである。やがて白骨と化して麥畑の肥料となり 魂魄は雨の夕風の晨に、啾々の聲を絶たないであらう。

三々五々に鐵道線路方面に向ふ負傷者の一團があつた、擔架に載せられた色蒼ざめた患者が、擔架の一と捨れ毎に顔を擧がめてるものも哀れであつた。戦友の肩に助けられながら、其一步々々を喘ぎ行くもの、跛行するもの、腕を釣るもの、何れもが極度に疲勞の相貌を現はしてゐる。

野戦衛生の設備が不十分である、恐らく繻帶も満足には行き亘らないであらう、斯くて助かるべき傷者も、銃拭木綿の仲間入りをせねばならぬ。

夫れにもまして悲惨なものは廢疾不具となつて辛く命を永らへたものである。彼等は生きながら捨てられる銃拭木綿である。

是等の安價な消耗品は、使ひ捨てられては又新たに補充せられ麥畑の肥料と廢疾の不具とを眼のあたりに見ながら、同じ運命を辿つてゐるのだ、なんと云ふ悲惨な事實であらう。

一隊の歩兵が、運河を渡つてゐた、裸體となつた兵が、武器装具被服を頭の上に載せて、腹部を没する程の水を徒ら渉つてゐる。

農夫が網を張つて魚を取つてゐる、暫く立つて見物したが、引揚げられた網には小魚が數尾這入つ

てゐるばかりであつた。

私達は尙下流に進んで淺瀬を渡渉し、やがて韓莊に着いた、微山湖の水面がさら／＼と光つてゐるのが見える遙かに水面に浮んでゐる小島には、微子の墓がある筈だ。

豫備隊が續々河を渡り、韓莊の村はづれに開進をしてゐる、中隊毎に、旗手が捧げる大きな旗が、幾旒も幾旒も又銃にたて掛けてある。

防楯を持たぬ、舊式の野砲が四五門だらしのない、形をして不規則に脱駕されてゐる。壊れた土壁の内に、騎兵の乗馬が十數頭乗り捨てられてある、大小馬螺不揃ひの馬の脊には、革や木製の鞍が載せられてゐた。

「あの騎兵は山東兵の降伏したものだ」

且がそう云つた。

狭い韓莊の町は、前進する歩兵の縦隊や輻重で混雜を極めてゐる。駄菓子。果物、粥、鶏卵、麵、焼餅等の物賣りが、兵隊で繁昌してゐた。

私達は鐵道橋を視察した。爆破された橋板が早や奇麗に修理されてゐる、橋頭の監視家屋には、無数の騎痕がまざ／＼とけさの激戦を語つてゐた。

一行は薄穢い空屋に這入つて晝食をした。

歸途は運河の北岸を經過した、山東兵の死屍は到る處に横はつてゐた、衣服が剥ぎ去られて半裸體のものが多かつた、住民が素早く奪ひ去つたものであらうと思はれる。堤防より真逆さまに墜落したものは、眼球より漿液が真白く滲み出してゐた。

私達は堤防を離れて畑の中を進んだ、土民が蝟集して口々に騒ぎ立て、ゐる、枯れ草に裸體の胸を被はれた死屍が横はつてゐるのだ、土民が一齊に馬上の私達を振り返へつて見るのに引きつけられて私達は思はず馬より下り、件の死屍を窺き込んで見た。併し死んでゐると思つた屍の眼は、ぱつちりと開かれてゐる、そして哀願するやうな眼ざしをして私達を見上げてゐるのであつた、飲みさしの水呑罐が、其枕元に置かれてゐるのも殊更哀れに見える此哀れな犠牲は、胸に貫通銃傷を受けてゐるのであつた。

「這個人不死」

土民の一人がそう云つた。

「おまえ達はなぜ手當をしてやらないのだ。」

且が土民達の顔を見廻はして云つた、その内から話のわかりそうな顔を物色した、けれど、これもこれも無智な顔をしてゐた。

小帽子(山東軍の兵)に手當をしては、革命軍に濟まないと思ひまして……………」

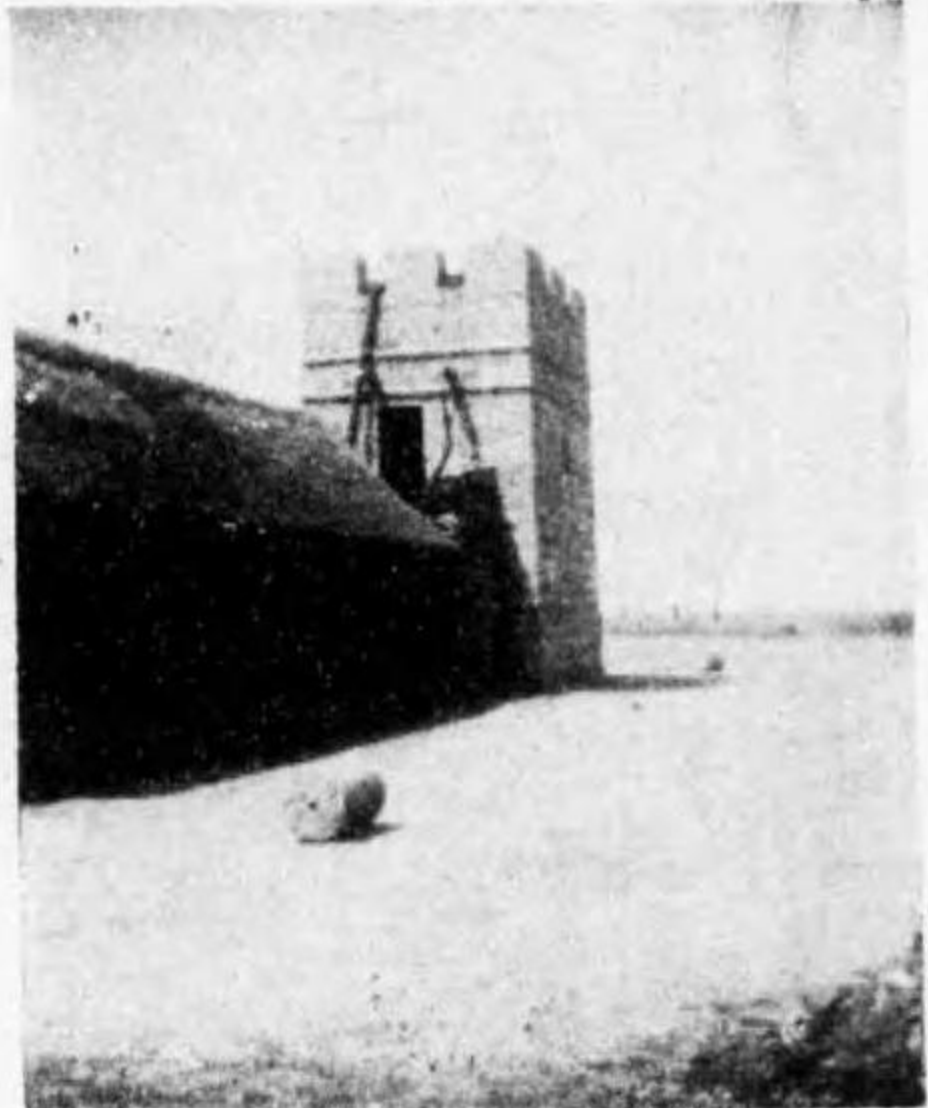


陣中の招兵「招募新兵」と識した小旗を持つてぶら／＼歩く
乞食がついて歩く、それが軍服に着換え鐵砲を持てば立派(?)
な兵になる。そんなものを集めて戦争ごつこをするのが従前の
支那の將領の仕事であつた、尤もアメリカだつて夫れを今少し
手際よくやるだけのこと。

軍服を剥
がれた山
東軍の戦
死者



土匪防禦の複廓
大がいの豪農は
皆此種の複廓を
土壁の一隅に有
して土匪の襲撃
から自衛する



士民の一人がそう云つた。

且が、士民に錢をやつて、野戦病院に送るやうに命じた。見付かつた彼は幸である、見付からぬ不運な犠牲者等は風雨に晒されて、やがて踏み潰された蛙と同じやうなみじめな最後を遂げねばならぬ。

眼を昂げて蛇々長蛇の如く連れる堤防を見れば、死屍は尙點々として各所に黒く横はつてゐる。

こゝにも氣の毒なる銃拭木綿の多數が捨てられてあるのだ。

以上の如き光景は、固より戰場に於ける尋常茶飯事であつて、殊に歐戰に於ける人間の大量屠殺に比較すれば、九牛の一毛にも足りないものであらう。併し私はそれ等のさの一つの死屍或はさの一人の傷者に對しても、強く深く心を動かすことなくしては、見ることが出来なかつた。

私は、柄にもなき平和論や人道主義を振り廻そうとするものではないが、何等の興奮も敵愾心もない内國戰に於ける是等の氣の毒なる消耗品には、心から同情をしないでは居られなのである。

一五、紅 槍 會

私達は軍司令部とは別の道を取つて運河から今夜の宿營地に急いだ。とある部落の附近に來た時に、且は急に韁を控へて、

「おやッ、紅槍會だ。」

彼の指しする彼方を見れば、赤毛の房を附けた槍が二十許り、大きな家の壁に立て掛けてある。こゝは紅槍會の家だ、誰でも無断で近寄ることは許さない。」

と誰何してゐるやうに見える。

門のそばに二三名の、屈強な男が立つてゐる、双方は暫く警戒して互に探り合ふやうな眼色でゐるがやがて且が静かに門に近づいて行つた。

「こゝは紅槍會だな、さんな人がゐるか。」

「こゝは先生のうちだ、今日は會がある。」

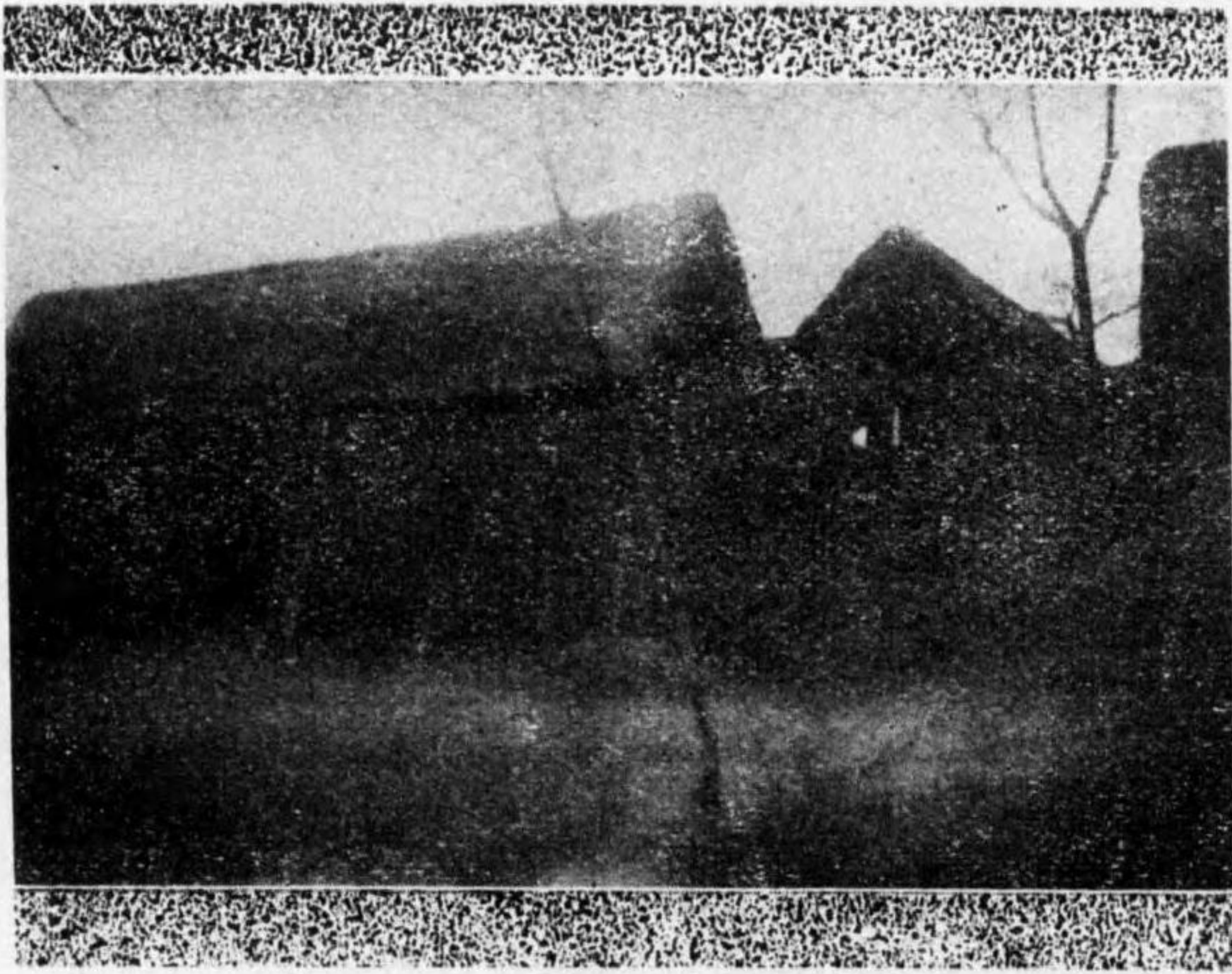
「紅槍會は革命軍に反対か。」

私達は一昨日第一軍團の某團が此正面で、山東軍と紅槍會の爽撃を受けて大損家を被つた情報を得てゐるのだ。

「革命軍が吾々に干渉しなければ敵とはしない。」

屈強な男が昂然としてそう云ひ放つた。彼等は團結心が強くて、軍隊なんか少しも怖れてはゐないやうに見える。

且が私に私語した。



紅 槍 會 の 館

「紅槍會の持てる武器なんかなくてもないが、彼立の團結心が恐ろしい。」

兎も角何處に行つても大威張りである支那の軍人が、此緋房の附いた槍と屈強な若者の顔を見ただけで、なんとなく尻込みをする様子が見える。

それから間もなく一行は宿營地に到着したが、此附近一帶の部落には紅槍會に加擔してゐるものが多くて軍隊の舍營を斷られ舍營の分配には非常に困つたと云ふのを聞いた。

私は支那陸軍の裁兵實行に就ては、地方自衛團の發達が、間接ではあるが、それと關係を持つてあらうことを従前から考へて來たが、今こゝに紅槍會なるもの、片鱗を見るに及んで、一の暗示を得たやうな感がある。

兎に角、支那軍をさへ憚らせる紅槍會が一種の勢力であることに疑はない。斯様なものが發達するものも支那だ、これを政治的に善導するだけの用意がなければならぬ、昨年以來河南其の他の戰爭に於て、此紅槍會が何れかの一方軍に利用されてゐるが、地方の自衛團を内戦の渦中に巻き込むことは精神に於て同意し難いのみならず、此種のもものが、動もすれば消極的自衛機關に終始し得ない支那の現狀にてはやがて、それは馬賊の利用と異なる所が無いであらうと思はれる。

二六、右翼兵團の遲滞と湖西方面の敗戦

陳調元の率ゆる第二軍團の主力―第二十六軍と獨立一師―は九日鄭城を發して北進を開始したが、其後沂州を準備する山東軍に引懸つて前進は遲滞した。

湖西方面は、掠奪將軍〇〇〇の指揮する第三軍團之を擔任し、左翼に連る方振武の第四軍團と協力し、孫傳芳軍に對する攻撃正面を承はつてゐたが、何れ劣らず掠奪を専門の本業とする劣等軍のことであるから、訓練のできた孫傳芳軍に對抗ができる筈はなかつた。

孫は、其部下の傍系軍隊を以て、鉅野、獨山集、金鄉、魚臺、豐各縣城を守備せしめ、當時恰かも豐縣を攻圍中なる第三軍團の第三十三軍に對し、攻勢に轉じ、之に大打撃を與へたので、其の右翼に連繫して沛縣に達してゐた第二十七軍及獨立第三師も亦危險を感じて南方に敗退するに至つた。

總司令部は震駭した。

「孫傳芳は微山湖の西方から突き出て、徐州を衝くそうだ。」

「徐州迄來るのは自滅に陥るのだ。」

と口には云つてゐるが、かなり狼狽したのは事實であつた。

戰略豫備であつた第四十軍を握つて、なほ徐州に残つてゐた掠奪將軍―此將官は日本士官學校出身

であつて私には何の恩怨もないが有名なる掠奪軍隊の長官であつて部下の責任は其長官が當然之を負ふべきものなりといふ私の主張から、本著書の最後迄此略稱を使用して敬意を表することにした―は御大から叱られた。昨年の北伐の時に、徐州を占領した際、「外國人を襲へ」と云つて叱られたと云ふ噂のある此掠奪將軍は、それが事實とすれば、よく／＼大局のわからない低能兒云はねばならぬ、で御大に急ぎ立てられて、第三軍團總指揮兼第四十軍長は第四十軍―此内の一團は其後濟南に於て泥棒をして、日本軍の爲めに武装を解除され、革命の面子に泥を塗つて世界の環視の前に、不名譽の廣告をしてゐる―を提げて敗退する友軍を收容に出掛け、夫れでも足らずして、恰かも到着した第三軍の第八師と總司令部警衛師、夫れもまだ足らずとして、西北軍總豫備たる石友三軍迄が、十三日から十五日に亘つて、隴海線上の碭山に輸送された。之が爲め津浦線の列車は、全部此方面に使用せられて、交通は杜絶し、第三十七軍の輸送は暫く之を中止するの己むなきに至つたのである。

孫傳芳軍攻勢移轉の方面は、遺憾乍ら間違つてゐた、暴虎憑河の勇に過ぎない結果に終つてゐる、併し夫れは攻勢移轉の意思を持たず、これに協力を怠つた山東軍が罪の大半を負はねばならぬ。とまれ孫傳芳たるもの、爾後の失敗を悩むの必要はない、彼の攻勢移轉は、南軍戰略豫備の殆き全部を牽制してゐるのだ痛快この上もない。

河南、湖北の匪を收編した、第四軍團も、御多分に漏れぬ劣等軍隊であつた。金郷あたり陣地線に

引つ懸つて、御同様に進むことができない。

かくて十六日西北軍は鉅野鄆城を抜き、十七日濟寧に迫つたので、流石の孫傳芳も、攻撃を断念して退却に就いたそれでやつと此軍團も、前進することができたのである。

この戦鬪に於ける第三十三軍は、少くも二千以上の死傷者を出してゐる。

第一會戦に於ける革命軍の死傷は、五六千は確かにあつたと思はれる。

第三軍團總指揮兼第四十軍長〇〇〇、湖南人、四十歳、日本人は忘れてはならぬ。

二七、大帽子—小帽子—老毛子

革命軍の兵は、敵を區別するのに、次のやうな略稱を使つてゐた。

孫傳芳の兵は、縁の廣い、布製の、ハンチング擬ひの軍帽を被つてゐる、丁度中折帽を草色に染めたやうなものである。だから孫傳芳の兵を大帽子と云つてゐる。

張宗昌の兵には、普通の軍帽ではあるが、我が國の昔の軍帽のやうに、上が擴がつてゐないので小さく見える、だから小帽子と云つてゐる。

老毛子と云ふのは、山東軍の白露兵を云ふのである。毛子は吾々の云ふ毛唐—鬚もちやの異人—の意、老はこゝではたいした意味はない。

小帽子は負けてばかりゐたが、大帽子も老毛子も強かつた。

山東軍の中には、始め數千の白露兵がゐるが、其の後漸次解散して、今次の戦争には只装甲列車の

戦鬪員と、飛行機の操縦者ばかりが残つてゐた筈である。

彼等は常に、山東軍の中堅として善戦した。いつも最後迄残つては健闘して友軍の退却を收容した

戦意の缺乏した山東軍は問題とするに足りなかつたけれ共、「鐵甲車」のゐる間、南軍の前進は常に阻止されてゐた。

韓莊、臺兒莊の大運河の線で防禦した時、最後迄韓莊に頑張つてゐたのは「鐵甲車」である臨

城附近に残つて、全線の退却部隊を收容したのも、鐵甲車である、泰安附近の最後の陣地を撤去した時、後衛となつて歩々抵抗を試みたのも、鐵甲車である、そして所謂「老毛子」はこゝめいに鐵道線

路を破壊しては退却して行くのであつた。

南軍にも装甲車はあつた、西北軍が河南の戦鬪で、奉天軍から分捕りした二列車と、南京で俄こし

らへに作つた急造の四列車である、前者は野砲と山砲とを重疊した旋回砲塔と機關銃とを以て裝備した精銳のもの、後者は中山號と稱して貨車に鐵板を張り、普通の野砲を据え付けたもので、射界が

極めて少いこけ威しの代物に過ぎないのである。

白露兵は、西伯利以來装甲列車の戦術に熟してゐるのであるから、支那兵は到底其の敵ではない、

「鐵甲車がるるから……」と云ふことが、攻撃の進捗しない言ひ譯の立派な理由になつてゐた。

老毛子は、逃げ足の早い山東軍の中に在つて獨り戦つたが、大帽子も之に劣らず善く戦つてゐる。少くも、山東軍のやうな手頼りにならぬ相棒を持ち乍らあれ丈け健闘したことは賞讃に價すると思ふ。

孫傳芳の兵は、訓練の點では革命軍よりも優良だと私は信ずる。

第一軍團が、大運河の線を守備する山東軍を一蹴して臨城に迫つた時、大帽子は、獨山湖微山湖。西方地區に在つた第三軍團に向つて攻勢に轉じて來た。第三軍團は其の後濟南事件の動機となつた掠奪の、常習犯たる第四十軍を含んでゐる賀耀祖の兵團であつて、戦争には弱く暴行には強い理想的の泥棒軍隊である。斯くて大帽子は、該軍團の第三十三軍を、滅茶々に蹴散らして、沛、豊兩縣に迫つたが、頼みにならぬ小帽子が、退却又退却、津浦線上の運河の設堡陣地さへ、守り終せないで袁州に後退したので、折角の成功も何等の効果なく、濟寧に向つて退却しなければならなかつた。

退却して見れば、濟寧は西北軍の攻圍を受けてゐるので、大帽子は直に敵の背後を攻撃して圍を解き、守兵を併せて北方に歸らんとしたが、再び別の西北軍に阻止されて二晝夜奮闘したが及ばず、更に途を變へて東北に進んだが、三度目は、津浦線を北上した第四軍に衝突し、健闘一晝夜の後漸く一方の血路を開いて濟南に退却することができた、この戦闘に於いて大帽子は火砲の大部と多數の機關

銃や迫撃砲を失たけつれ共、其善戰健闘振りには、革命軍の皮を被つて掠奪を本職とする〇〇〇の兵隊の比ではなかつた。

孫傳芳は、革命軍の敵の側に立つたので、南軍は彼を目の敵にする、併し彼の遺口は、革命軍よりもデモクラ的であると云はれてゐる、併し彼は形勢を洞察するこゝがでなかつた、陳調元の如く南軍に寢返へる丈けの聰明さがなかつた、否蔣介石の下風に立つこゝを欲しなかつたがためであらう、彼も不運な男ではある。

小帽子、大帽子、老毛子色々のマオツがある。

二八、武裝女同志

武漢時代には多數の所謂武裝女同志がゐた、彼等は黨、軍、政、各機關の秘書に、宣傳員に採用せられ、氣取つた軍服に粹な皮帶を懸けロイド眼鏡、片手に鞭と云つたいてちて男の同志と一緒に市中を得意げに闊歩したものである。

か細い撫肩と蜂のやうな胴に對照して、殊の外に大きな尻が目立つた、それは膝から下をぐつと細く締めである乗馬短袴が一層尻の偉大さを引き立てるのだ、讀者は淺草の金龍館の軍服を着た踊り子を想像されるがよい。

彼等の尻が螢のやうに光り始めた時、やがて女同志の存在が、軍紀風紀の名を以て非難され始めた。女秘書が秘書本来の任務を自ら擴張した。官衙や司令部の一室で寫字をしたり、大道で宣傳隊と一緒に演説をした時代はまだよかつたが、それ丈けて濟む筈はなかつた、彼等は男の同志もと宴會を始めた、暮夜手を携へて中山公園を散歩し出した。

青春の男女である以上それも當然である、革命に對する情熱以上の情熱が燃え熾るに何の不思議はない。

女秘書は軍、師長等と戀愛に陥つた、と云ふよりも征服された。程潜々南京事件を豫察しながら故意に豫防の方法を等閑に附した亂暴者、そして何等の責任をも負はぬ厚顔無恥な男である上に第六軍には菊の紋章の附着した機關銃が何挺あると云つて威張つたと云はれる生意氣千萬な奴、日本人の一部では支那が彼を處分せねば日本人の手でやつ付けるとさへ激昂してゐる——の秘書は、夫人と二人の妾のある彼と正式に結婚したと云ふことだ。ソウエートロシヤが輸入した組織の中で、武装女同志の制度が其白眉であらう。

私は男女同權に反對する意思はない、況や支那の婦人と結婚する意志もないから、只さへ喧しい支那の婦人が此の上喧しくなるこゝにも何等の關心を持たぬが、當然起るべき戀愛三昧に於て失敗した分子はその腹いせに益々軍紀風紀を口にするであらうし、又戀の成功者は其成功後にこのフラツパー



孫中山未亡人宋慶齡



何香凝女史のお茶の水出身の才人

スを養ふには、さぞ苦勞をすることであらう。ひとごとならず氣にかゝるこゝの二つである。

南京には此女同志の数が餘程少いやうに思ふ。況や軍中に於ては殆ど見なかつた、只一度、袁州で某軍衛生隊の中に、甲斐々々しく軍装をした女が一人居るのを目撃したことがある、彼女は埃塗れになつて行軍してゐた、私は御苦勞千萬のことであると同情をした。

遮莫新興支那に武装女同志は大に可なりである。故孫中山氏末亡人宋慶齡、故廖仲愷氏末亡人何香凝、汪兆銘氏夫人陳璧君、皆夫君と共に革命に精進せし鏘々たる巾幗者流であつて、今夫々中央執行委員乃至監察委員に名を列し、男性と伍して毫も遜色のないばかりでなく、何氏の如きは堂々たる要人をつちめる丈の経歴と力量とを有してゐる。中山服と皮帶丈けが若い女流革命家の目標でないことは明かであり、宋美齡夫人が羨望の的のただけではあるまい。政治上に發言權を得、社會的家庭的地位を向上し、良人に對しては一層口喧しくならうとするのである。我國の女權擴張運動に比較して遙かに進んでゐると思ふ。

三寸の花鞋によち、と歩む纏足婦人のある反面に、軍服に身を固め乗馬で飛び廻る超モガがる四十年前の村田の單發銃や吾々が中學時代、兵式教練に使つたエンピール、ツンナール、マルチニイ銃等がまだ役に立つてゐるのに、一方には短波無線が野戰通信に使はれてゐる、戦車が戦場を馳驅してゐる。

頭は斷髮、脚は纏足時代の名残りを歩様に止めてゐるやうな一人にして新舊兩面を代表する超特作もある。

革命が成巧して裁兵が議せられる反面には、自動車に拳銃の垣、〇〇〇の外出に四時間の通行止め

國民政府の入口から豪い人の部屋迄に五六組の歩哨が眼を光らせて誰何する。

現在の南京に四個の不がある、電燈不亮、電話不靈、馬路不平、飲水不清、之が首都五十餘萬住民の日常生活を支配する四大不満である。が過去華府會議に其靈腕を揮つた王正廷は殆き傍若無人に既

訂條約の破棄を叫んでゐる。

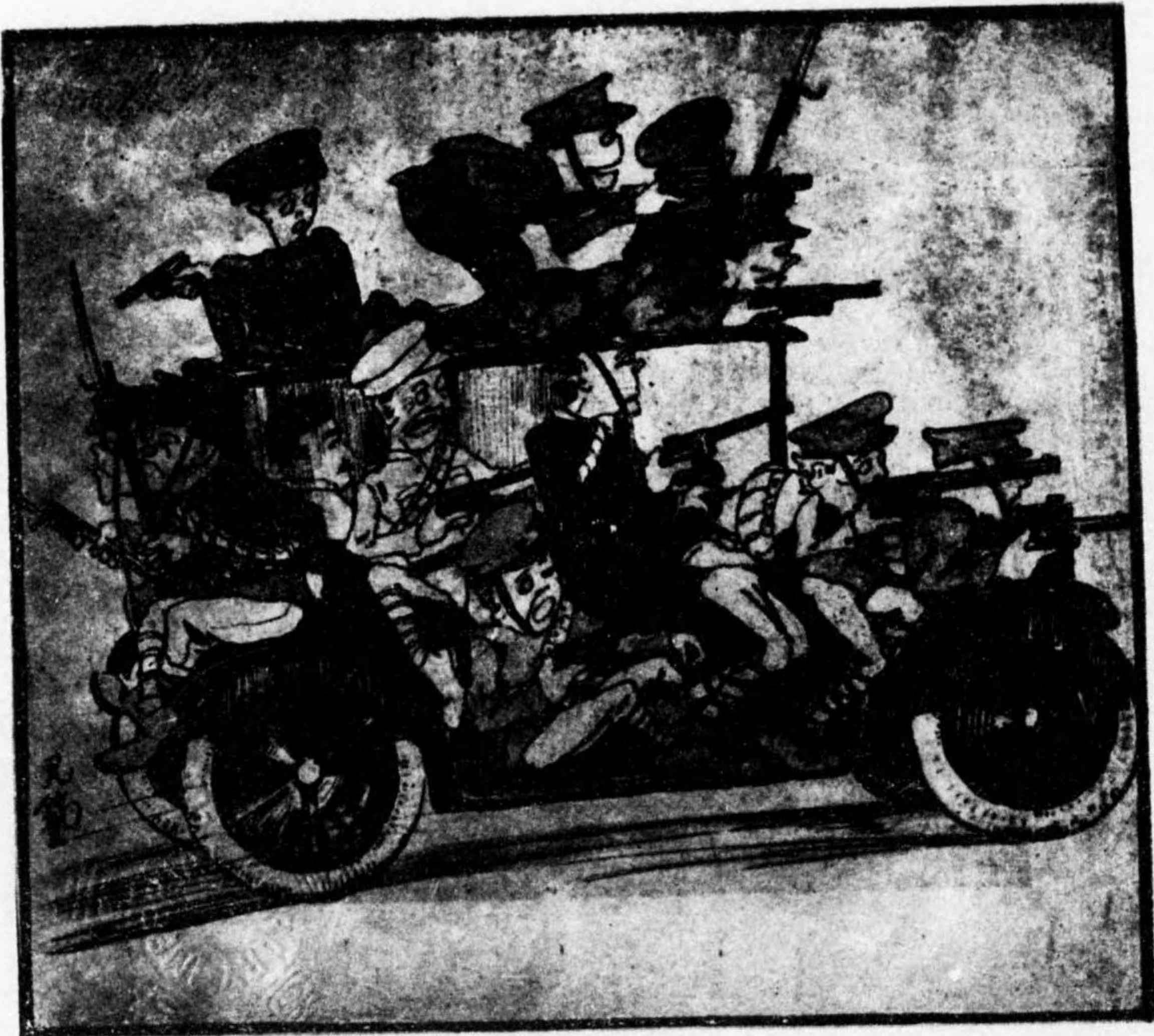
新舊交錯が支那の現在の姿であるが、何しろ威勢のい、ことごとである。

武装女同志が思はずとんだ所に飛び火した。

二九、袁州行營

私の通信難と革命軍の通信

既に私が従軍してゐる以上、報告をする義務があつた、それは革命軍の戦闘能力に就てではない、私は山東の我居留民の安危に關する問題に就て心配してゐるのだ、第〇十軍や第〇軍團の素質や過去



(！官大なかるな持金) 也官大哉矣潤

！呵風威等何看備、做不能不是官

(を々堂風威の此よ見、だのもいたりなはに人役)

(載所報京畫圖) 垣の銃關機手と銃拳

しをとこな裁態不なんこも度一は氏山中孫

。たつかな

の經歷を知つてゐる以上、晏如としてゐることはできぬ、政府が出兵をしないことに決定するとせば、濟南の我居留民は豫め避難の方法を考へて置かねばならぬ。くだらぬ體面論に拘泥することなく、事情を客觀することのできる支那側の某々等は、十分善く私の立場と任務とを諒解してくれてゐた。總司令部が私に従軍を許可してくれたのが、一つには彼我の衝突を避くる爲めに兩軍間の連絡をさせるに在つたとすれば、序でに私には、それに必要な通信をも許してくれるのが至當ではないかと思ふ。私は革命軍の行動や其内容に就いて通信することは、徳義上絶対に遠慮せねばならなかつた、事實に於て私の通信内容は主任者の檢閱濟南のものを發送して貰つたので軍機に抵觸するものは一もある筈がなかつた。

だが併し遺憾乍ら三通の電報は握り潰された。併しそれには私の手落もあつたので、強ち先方を恨むこともできない事情に在つた。だが所詮縦ひ私が其通信をしたからと云つても、濟南でのあの出来事は人の力ではさうすることもできなかつたのである。

從軍以來二十日近くもなつたが、私は内地新聞は愚か如何なる通信とも隔絶してゐる、氣に懸ることは少なくない、それに五體はかなり垢に塗れ虱さへも寄生してゐるやうに思はれるので、此の際一度南京に歸らうと思つた。

然るに四月十二三日頃の出来事と思はれるが、列車が蚌埠附近の橋梁上で正面衝突をして、それが

ため橋梁の一部が破壊された、それは併し直ぐに修理された。次で孫傳芳軍の逆襲に會ひ、戰略豫備移動のために十五日頃迄は津浦線の全車輛が其方面に使用された。爾後戰線の北進と共に輪轉材料は益々必要となり、加ふるに第三軍、第二十七軍等の總豫備輸送のためには、貨車は幾何あつても足りなかつた。

一週僅か三回の旅客列車も停止された。

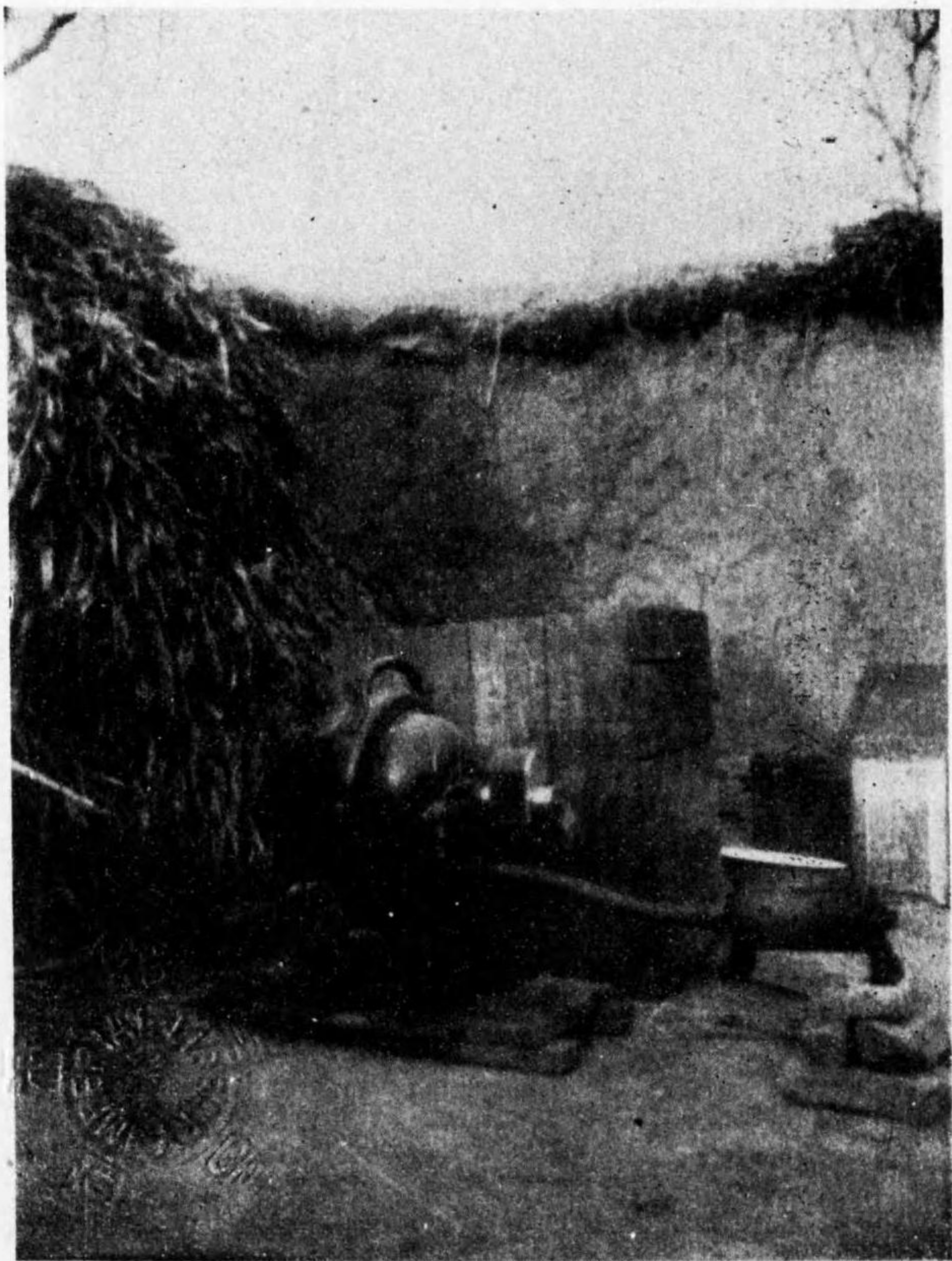
それ等の理由から、私の南京へ歸る希望は遂に容れられなかつた。

それは是非もない。

私は第〇軍と共に臨城附近迄行つた後、再び徐州に歸つて焦燥の日を送らねばならなかつた。

且は湖西地方に出掛けて行つた。私は方振武と賀耀祖の兩兵團が、抄々しく前進しないからだと思つた。

私は徐州に歸着してから、始めて中央正面の戰況を審かにすることが出來た。戰線にゐた時は友軍の情況がわからなかつた、通信連絡がよくないことは明瞭である。革命軍は多數の短波無線を持つてゐるが、その運用がうまく行かないらしい、其の上電話通信器材が不十分らしいので、餘程困つてゐたやうだ。器材を整頓すること、野戰通信を研究する必要があると私は考へる。友軍の情況が不明のために戰機を逸したことがある。



短波無線の發動機

電話連絡が意の如くならぬために、參謀が前線に派遣された、是等の將校は、暗夜の生地を皆克く眞面目に任務を履行した。物質的にも精神的にも何もかも不完全な支那の軍隊では、將校の活動が必要である、吾々のやうに略々完全な條件を與へられて作戦をするものとは雲泥の差がある、私は或場合に於ける支那軍の將校には賞讃の辭を吝しむものでない。

三〇、列車の追突

四月二十一日、蔣介石は總司令部を袁州に進めた。かれの總司令部は特別列車である。此朝、私はWからの電話で總司令部に行つた、用件は「出兵に對する通報と私が蔣介石と共に濟南に行くべき」命令、その東京からの電報を渡してくれることであつた。

「君は南京に歸らないでよかつたね。」
Wがそう云つた。
豫て期してはゐるが、いよ／＼出兵したとすると私の責任は重い。だが私は何も考へる暇がなかつた。

Wの室から總參謀長の室に行く途中で蔣介石に遭つた。
「今から袁州に行きますが、あなたも行きませんか。」

私は突嗟に決心をきめた。

「参りませう。」

私はその足で、自動車に飛び乗って停車場に行つた、荷物は副官が持つて来てくれるだらう。總司令部専用の列車は、其夜衰州の北方姚村驛に到着した。こゝには第四軍司令部がある。

夕陽がすつかり西に沈んで見渡すかぎりの麥畑が暗黒の布に包まれて一点の灯さへ見えぬ。寂寞と凄愴とが滿地を支配した。くらやみの村落には犬が吠えてゐる。

私は夕食後且參謀と列車内で雑談をしてゐた。すると突然、物凄いな音がして、私は後頭部をいやと云ふ程後ろの板に打つ付け、一時氣が遠くなつた、が直ぐに正氣に還つた。痛む後頭部に手をやつて見ると、血が流れてゐる。それは此客車が、普通の寢臺車を、便利に使ふために上の寢臺を取り除いてあるので、上の寢臺を受ける金具が残つてゐる、それに私の頭を打ちつけたのであつた。

私は直ぐに直覺した、列車の後部に赤色燈を點すことを忘れてゐると。

暗黒の裡に、人のざわめきが聞える、死傷者が停車場の構内に運ばれるのである。

私は痛みをこらえ、勇を鼓して出て見た、列車の最後部に在つた貨車が、脱線して其巨大なからだを幹に横えてゐる。

「もう後へは歸れないよ。」

且がそう云つた。

「此儘濟南迄行くさ。」

私はそう應酬した。

頻死の重傷者が二人できた、頭を打つ付けたものは數知れずあつた、私も其内の一人である。

後ろからぶつ付かつて來た鐵道隊の工作車が、まつ黒く長々と横はつてゐる。線路には、カーブも無ければ、視界を遮るやうな何ものもなかつた。列車の後部に赤燈が掲げられてあつたとすれば、轉徹信號が無かつたものと見ねばならぬ。何れにするも、従業員さへ満足に居ない、そして此のまつくら暗に、汽笛もあげないで後ろから乗り懸けてくるとは、亂暴にも程がある。

機關手は逃亡した、首が危いからだ。

私は着のみ着の儘で衰州から出て來た、だが何處に居ても同じことである。

私は痛みを抑へて寢た。

翌朝眼をさまして見ると、いつの間にか衰州に歸つてゐる。夜中に、仆れた貨車に綱をつけて引ずり仆したのだと云ふ。

其後、工作列車の機關手二人は捜し出されて銃殺されたと聞いた。

三一、天鷲下蛋

列車の内て日と雑談をしてゐるミ、とてつもない大きな爆音が、列車間近く起つたので、急いで窓から首を出して見るミ、列車を距る五六十米の機関庫の圍壁のうちから、濛々たる黒煙が渦を捲いて天に沖してゐる。

爆弾―飛機來―私は其瞬間、何の躊躇もなく、首を捻ぢ向けて大空を見上げた。

晴れ渡る蒼空に、大鷲の天翔るが如く、此の物騒千萬な空中の訪問者が、而かも二つ、悠々として今し其茶褐色の翼を北に向けてかへしてゐるではないか。

「飛機」「飛機」「飛機來」

車窓から、デッキから、プラットホームから、空を見上げた人々の口から、一齊に漏らされた此の言葉には、一種の凄味が含まれてゐた。

「今の一發は試射だ。」

そう思つて見てゐると、二機は相繼いで旋回し、再び針路を南に取つた。

總ての人々には皆、敵機が自分達の頭の直上に在るもののやうに感ぜられた。そして不思議なことには皆一様に、有り難くもない爆弾の御見舞を、今か今かと待ちうけてゐるかのやうであつた。

「ドーン」「ドーン」「ドーン」

小行李の位置から爆煙が昇る。民家の土壁の中から砂煙が昇る。中にも城壁に近く投下された一弾は、濛々たる爆煙と砂煙とを數十丈の高さに奔騰させた。數個の投下爆弾は一直線を描いて、前の一弾とは反對の側に落ちて來たのである。

ざわんと、人のざわめきが聞えた。

私は列車を出てプラットホームに降り立つた。蒋介石も出てゐた。「不要緊」「不要緊」と云つて車窓からデッキから、首を出してゐる衛兵達を制してゐた。

敵機は北を指して飛ぶ、人々は期せずしてやれくと安堵の胸を撫て卸したが、又もや二機翼を揃えて南に向ひ旋回した。

其の頃になつて、ボンンくと云ふ小銃の音が聞え始めた、併し千米の高空を飛翔してゐる敵機に對しては、恰かも天に向つて唾すると一様である。敵の飛行機は、心憎い迄落付き拂つてゐた、その悠然たる飛行振りは、傍若無人と評するの外はなかつた。

三度目の爆弾が、矢次早やに落ちてきた。

其の恐るべき巨弾は、第二回目よりも更に列車に近く落下して爆裂した。砲廠に近く街路に落された其の爆弾は物凄き爆聲と共に、三四十米を半径とする地域に在つた總ての人を殲ぎ倒した。爆煙が

消散して後には、六七名の即死者と十数名の重傷者が、砂に塗れて横はつてゐた。断末魔の呻き聲、それは呪ひの聲であつた。見るも無残に屠殺された夫等の死屍！死傷者の八割は哀れなる無辜の人民であつた。

深さ一米、直径三米の一大漏斗孔が、道路の一侧に名残を止めてゐる。炸裂の矢面に立つた民家の戸には、無数の破片に依る弾痕が、爆弾の威力を如實に物語つてゐる。だがそれは戦陣に於ける尋常茶飯事であると云ふ乎、私は悲惨なる内國戦を紹介する爲めに、尙ほ語らねばならぬ。

破裂孔の周囲には、兵卒人民の分ちなく、撃ち碎かれた死體が、算を亂して横はつてゐる。或者は戸口から出合頭に爆裂に會ひ、其の儘長くなつて仆れてゐる。或者は水香罐を手に持った儘、それが末期の水となつたのも悲惨である。脚部に負傷した老人が、腿帶子一袴の裾を縛を紐で眼かくしをされてゐる、私は始めそれを繻帶代りかと思つた。腹部をやられた男が、やうやくのこゝで、自分の掘立て小屋に辿り着き、傷口を抑えて呻いてゐる、痾き込んで眺めてゐる者はあつても、斯様な貧民を構つてやるものがない。とりわけ、物の哀れを感じしめられたことは、肩をやられて、虫の呼吸になつてゐる女兒を抱きかゝえ、狂氣のやうに取り亂してゐる若いおかみさんの哀れな姿であつた。

斯くて敵機は、上空に一大半圓を描き、悠々と北の空を指して飛去つた。私は又小行李の位置に落ちたものを檢分した。堅い地面には、深さ二十センチ、直径五六十センチ

にも足らぬ小さな漏斗孔が開かれ、其附近に立つてゐた歩哨には、微傷だも負はせなかつたが、哀れな一頭の牛が、全破片を脚、腹等に受けて、血塗れになつて、それでも立つてゐる。衰州から、遙々と米を運んで来た此の不運な牡牛も亦側杖の犠牲の一つに數へられねばならぬ。

爆弾は都合九個投下された。當時衰州車站には、九列車集まつてゐるが、爆弾は此列車群を中心として遠きは二百米、近きは五、六十米の所に落されてゐる。照準は割合に正確であつたと云はねばならぬ。

爆弾は漏斗孔から判断して大小二種類であつたと思はれる。

支那が歐洲大戦に参加した後、多數の工人が山東から佛國に送られた。彼等は佛蘭西の上空に飛來する獨軍飛行機を天鷲だと云つた。そしてそれから投下される爆弾を天鷲の産卵だと云つた。しやれてゐる。だが爆薬の仕込まれた卵なんかしやれ所ではない、直平御断りである。

當時衰州の停車場には、軍用列車が九列車程輻輳して居り、多數の軍需品が構内に野積にされてゐる、加ふるに驛に近く飛行機の着陸場があつて、三機が翼を並べて休んでゐた。

「總司令部をこんな所に持つて来てはいけないな。」

私は丁度その朝顔言らしくそう云つた。

註 投下爆弾に依つて慘憺たる光景が展開せられたが其寫眞が不幸にも時日經過のため無効となつたフィルム、一つであつたことを遺憾とする

Hが来た。

「僕は今から濟寧へ行く。」

「何しに行くのだ。」

「泰安攻撃の打合はせや、濟南入りの手筈を決めるのだ。」

「僕も行く。」

私は此方面に方振武の兵も孫良誠—西北軍—の兵も第三軍團も來てゐる筈だから、行けば何か得る所があると思つた。

「途中はまだ孫傳芳の敗兵を掃蕩するため戦闘してゐる、君の身に危険があつては濟まないから、城内の第一軍團總指揮部に行つて、今日一日は遊んでくれ、この列車は今日日歸りて滕縣に行くのだ。」

「僕は行く、飛行機の爆弾は一視同仁に落ちてくる、僕は何處へても行き度い。」

「それなれば行こう、成るべく鐵甲車にするから。」

やがて中山號鐵甲車が用意された。袁州を發して濟寧支線へと這入る。

行くこと暫くして、むこうから一列車が驀進してくる、これだから戦時は危険だ。驛と驛の間に而かも向ひ合つて二列車が這入るとは、野戦交通勤務も何もあつたものでない、夜間ならば衝突だ。双方は際さい所でビタリと停る。押問答の末先方が逆行することになる、總司令部列車の威光だ。車窓から見渡した縁の麥畑には、何處にも戦争らしきものは見られなかつた、併し双眼鏡裡に映る光景は、其處此處に移動する部隊があつて、何さま何等かの戦闘行動をやつてゐるらしく思はれる。そして思ひなしか、双眼鏡のレンズの中から、銃砲聲が響いてくるやうに思はれる。

やがて濟寧驛に到着した。

驛から城内へは小半みちもある、一行は護兵を併せて八人、膝栗毛に鞭を當て、出掛けたが、幸にも途中で人力車を見付け、兎も角八臺となつたので威勢よく腕車で走らせる。

運河を挟んだ濟寧の街に這入る、狭い街が兵一杯である。糧食を送るもの戦利品を運ぶもの、散髪するもの野菜を買つてゐるもの、住民は平常の通り店を開いてゐる。

大運河が干からびて底が見える。

西北軍の總指揮部に著いた。待たされる暇もなく、木綿の軍服に木綿の巻脚絆を穿いた孫良誠が大きなからだを搗ぶつて出て來た。二言三言月並の會話を交えた後、孫君はHと密談があると云つて別室に消えた。

私は〇と幕僚の室に行つて情報を聴取した。敗兵の掃蕩は今日午前中迄繼續した、多大の戦利品や俘虜があるとか。孫傳芳が暴はれ廻つてかなり手古ずらされたことが窺はれる。

Hが歸つて来て是から高級幹部の會議があると云つた、私は〇と二人で残つた、それがため方振武にも其他の軍長等にも逢ふことができなかった。

「濟南占領の時は衛戍部隊以外は一切入城しないことを決議した。」

之はHが特に會議の結果に就て漏らしてくれた話である。

夕刻袁州に歸る。

夜九時頃蒋介石の車から夕食を共にし度いからと呼びに來た。蒋介石は精進料理を食べてゐるが材料も調理も精選してあるので、却てへたな葷菜よりもうまい。

蒋介石は今日見て來た界河の陣地が最近式の設備をしてあると云つた、泰安の陣地も多分堅固な設堡陣地だらうと云つた。私は山東軍には最早戦意はなく、孫傳芳も廿二日頃迄の戦鬪で大損害を受けて居り、革命軍は終始優勢の兵力を以て、敵を壓迫してゐるから、最早大なる抵抗を受けることはあるまいと云つた。

蒋介石の面上には、戦はずして勝算の色を現はしてゐるのが讀まれた。

私の行李はまだ届かない、四月の末だけ夜はまだかなり冷える。蒋介石は私に防寒外套を貸し

てくれた、Hも毛布を一枚提供してくれた、此二三日は毎日車室にこゝろ寝をする。

註 蒋介石の身のまわりの世話を始終してゐた若い將校を孟浩然と云つた、實に氣持のいい青年だつた、防寒外套を私に着せてくれたのも彼だつた、惜しいことに民國十八年の九月南京で落馬して死んだ、六尺近くの身長があつたが優しい顔をしてゐた、氣だても優しくかつた、前途有望の好青年を惜しいことをした。

三三、脱糞難

柳の枝で作つた糞籠を肩に懸け、草掻きに似た鋏を手にした老人が、早曉の街を徘徊するのは、苟くも支那街に住んだことのある人には周知のことであると思ふ。

旅行をして困ることの一つは用便である。都會地や汽車の中では別段困ることもないが、從軍中のやうに、多人數が雜踏する時は實に困る。支那の中流以下の人は人の目に着く所で脱糞することなるとも思つてゐないが、日本人は困る。

共同便所の中で右にも、左にも放列を布いてゐるのは、先づ當然として、朝の田舎街を通つて御覽なさい、その壁際、かしの樹の下に、悠々として天地の間を睥睨する大きな蟻蛙を見ることができる、汽車の窓から四方の景色を眺めるうちに、畑の中に、草原に、巨砲や爆彈が、遠慮なく車窓の眼に映ずるであらう、肌脱ぎと素足と尻からげを意とせぬ日本人が、尻を恥かしがり、素足や肌脱ぎ

を卑しむ支那人が、尻の露出を忌まぬ。

行軍中の支那兵が、列中から二三十米離れた畑の中や路側に、平然として蛙踏をきめ込んでゐるが放列場所に苦心して、手早く用便のできない我國の兵には、絶對に見られない圖である。我兵は宿營すれば炊爨場を作ると共に、必ず便所を作るか又其場所を指定するが、支那の軍隊が宿營すれば、早晨の街頭には、大小硬軟時ならぬ、黄金の花を、足を容るに所なき程に撒き散らしてゐる、固より身分ある人々は眞逆に街頭の散布射撃を遠慮してゐるが、一般の人々には、それが當然の態度である、支那の笑話に或物持の老翁が、毎朝籠と糞掻きを手にして、門前の空地の糞、それも撒き散されたうちの大きなものばかりを選んで拾つてゐた、或人がそれを怪んで「貴家の富貴を以てして、なほ毎朝それをするのは、如何にも解しかぬる」と云つて問ふたのに對して老翁は「我家の門前に大きなものを放りはなしにされては、俺のもののやうに思はれて困る、それが辛らさに毎朝の糞拾ひを欠かさないのだ」と答へたと云ふ。

扱て私は毎朝の脱糞には、いつもながら困らされた、兵卒の放列線には、如何にデモクラ的の自分と雖、放列を布き兼ねる、そこで遮藩陣地を物色して歩くうちに、いつの間にか直ぐ四五百米も來てしまうことがある、一度なんか、やつと列車とは反對の斜面を見付けて、い、氣になつて快通を味つてゐると、時ならぬ發車の汽笛を聞き、用便半分に狼狽て、歸りかけて見ると、それは他の列車の發

車すること、わかり何のことだと、再びもとの所に歸つて見ると、早や黄金虫が眞黒にたかつてゐることなきあつた。

或時は、停車場を出てやつと、人家の裏に安全地帯を見付け出し、前後を見廻した後、蟻蛙をやつてゐるに、物陰からぬつと糞掻きおやぢが出て來て、あらうことか、私の放射する爆彈に見惚れてゐる、餘りの圖々しさにぐつと睨み付けると、そつとわきを向く、又暫くして見返へるに、又もや側目もふらず見詰めてゐる、犬が、主人の食事をする箸の揚げ卸しに見惚れるのと同じだ。戰陣の間、此快通のひと時は、絶對安全のひと時であり度いのが自分の願であるのに、逃げる所迄追つかけてくる此の人の心を知らぬ田舎おやぢには瞬間のこととは云へ、擲り付けてやり度い程の憎悪を感じるのであつた。

或時は、凹道の中でやつてゐると、不意に行軍縱隊が現はれて來て、それこそ宿營地へ、騎兵の襲撃を受けた程に驚いたが、飛び上がつて逃げるには戰鬪力は無し、瘠せる思ひでそこくくに用を足したこともある。

が、併し一人で、田舎道を旅行する時には、誰憚からず用便ができる、臭い牢屋のやうな日本式の便所よりも、天と地との間に躊躇する野廁に如くはない、若し夫れ軟風の訪ふものあらんか、彌生ばかりの夕暮に、ゆるく吹きたる花の風「意外の清香をも嗅ぐことができるのである。

餘りに臭きこの一項、願はくば鼻を摘んで目を通ほされたい。

三四、曲阜謁で

殺伐なる戦陣從軍の間に於て、曲阜の孔子廟を拜し、孔子の裔たる衍聖公に面會し、午餐を共にすることのできたのは、思ひがけぬ幸であつた。

山東軍の飛行機が爆弾を投下した數日の後、前線は尙未だ泰安陣地攻撃の爲めに行ふべき軍の移動に着手し得なかつた小康期間を利用して、曲阜に往復したいと思つてゐると、恰かも前敵總指揮として蒋介石の副將格の朱培德總指揮が、其前日袁州に到着し、其日曲阜に行くこと云ふので、幸同行して貰ふこととなつた。

朱總指揮と私の副官Y少佐とは乗馬、一行は其外に、朱君の護兵として拳銃を持てるもの、輕機關銃を擔ふもの、合計三十餘名、之が前敵總指揮陸軍上將に屬する直接護衛兵である。

一行は、總司令部列車の前に勢揃ひをし、袁州で求めた土民の道案内者を先頭に、二尺以上も伸びた麥畑の田舎道を一路曲阜に向ふ、萬頃の麥畑には農夫の姿もなく、行き違ふ旅人の影も疎であつた。見渡す限り青々と伸び切つた麥は、戦亂も知らぬげに、晩春の微風に吹かれて揺いてゐる。村々には、そこには灰色の土の家と、生活苦の深き皺を、溢紙色の額、兩頬、に刻んだ老百姓がゐる、その

村々にさへ、棗樹、桃、楊柳、白楊が、其希望に満てる新緑の艶やかさを、暖き陽の光りに翳してゐる。

註、老百姓は革命軍の將卒が好んで口にする言葉、「人民共」の意、老人の意ではない。

ボニイの蹄に輕塵を揚げ、將の顔にも士卒の顔にも、潑刺生新の氣が漲り、歩卒の足並は軽い、すべてのものは春の陽光の如く麗かである。

お、それはなんと云ふ裏表だ。

「おまえは何處だ？」

總指揮が一兵卒を顧みて云つた。

「ハイ、私は江西です。」

兵がソツと隣兵を顧みて微笑を漏らした。「嘘を云つてるな」私はそう思つた。朱は江西の政府委員主席であり、平素は江西に於ける最高軍事長官である。

「歸り度いか」

「歸り度ありません。」

兵が又ソツとわきを向いて笑つた、朱は前方に向いた儘、手綱をかい繰つてゐる。兵が隣兵に耳うちをした、そして皮肉そうに笑つた。

「我是山東」(俺は山東だ)

それは私の馬の胸前の出来事であつた。三十支里—我五里弱—足らずの道程を、僅か一回の休息のみで、三時間にもならぬうちに、曲阜の孔子廟の麓を望み得た。支那兵は健脚だ、尤も装具が我兵に比して遙かに軽い。

曲阜聖域視察の詳細を記した日誌は、惜しいことに、私の濟南に於る遭難に際して。明き官の方振武の兵に強奪せられた、錢や時計は明き官共の役に立つたであらうが、日誌は捨てられて今頃は不遇に泣いてゐるかも知れぬ。あのうちには再び得難き貴重な記録もあつた。惜しいこゝをしたが諦める外はない、以上のやうな理由で、孔廟に關する視察は、うろ覚えを辿つて記述するの外はなくなつた。曲阜縣城は恰かも聖域を包む城廓と一致してゐるが如く、其壯嚴にして規模の壯大なるは、北京の宮殿を偲ばせる。

城外街頭には、早やごてくと國民黨の有りと有らゆる標語が貼られてゐる。我國の奈良の町のやうな處に血腥いポスターは、聊か感心を致し兼ねるが、それでも聖廟の入口に「孔廟は我國の聖域に襲す勿れ」とか何とか書いてあつたのは嬉しかつた。

朱總指揮の護兵は、武装の儘ぞろぞろとついて這入る、支那では一寸も武器を手から放して置いて行くことはできないらしい。

何々堂とか何れも名のある殿めしい堂宇が、穢れもなく破損もなく、壯嚴の氣を漲らしてゐる、數千年の檜、それは孔子の時代に植えられたと云ふ—は亭々として天を摩し、其樹列の跡を察すれば植林を痕跡せるかに見える。

孔子の墓、夫人其の他の碑、歷朝皇帝の眞筆のある碑石は、皆大切に保存法が盡くされてある。其他孔子産湯の井、手植の公孫樹、各子の位牌堂等があり、又堂屋の一部は修繕中であつた。

頽廢と衰亡、何處にも建設の跡を見ることができない支那に、管理と保存がこれ程に行届いてゐる廟宇は、見ることを得ないであらう。

私はY副官にそう云つた。

「共産黨が來ればこゝはさうなるだらうか。」

「共産黨はひきいてすからぬ。」

然り彼等は「打倒孔教」である、世襲財産は奪はれ、聖人の裔は國外に放逐せられるかも知れない。城外に孔聖林があり、聖廟とは並樹道に續いてゐる、林内に橋あり、亭あり、碑あり、樹木は新となるの運命を免れてゐる。

聖域の現状を維持するものは、その莫大なる世襲財産であり、管理と保存に遺憾なきを得るのであるが、孔教尙亡ぼすべからざるためでもあらる。

大たいに於て受くる印象は、我伊勢神宮の神々しさなく、日光権現の如く輪輿の美はなく、奈良の如きさびも見られぬ、只尫大にして、豪壯の感を抱かしむるが、さりとして聖人を祀るにふさわしい静寂さが無いではない。

何にしても支那國內に於て唯一無二、軍閥の手の及ばなかつた地域であることに疑はない。清淨、俱全から受ける印象は有り難いものと思はねばならぬ。

孔聖の廟にも春の日和かな。

三五、衍聖公—孔子七十七代の裔

午餐の用意もできてゐるから是非にとのこと朱總指揮は謙遜して、吾々は今濟ませて来たばかりだといつて頻りに辭退したが、一昨日は總司令も來られ、一所にご飯を頂いたのだ用意もできてゐると重ねて勧められるので、朱はこの上の辭退も却て失禮とて、迎への人々に先導され、孔家のおも家に入つた。武装兵が又ぞろ／＼ついてくる。

幾つかの門を経た、各門の兩側には、皆人が住んでゐる、それは孔家の家扶、家令、家僕であらう孔廟專屬の巡警も立つてゐる。

「雙封衍聖公」と記した脚の長い提燈が澤山置いてある、何となく封建時代の諸侯の趣がある。

やがて廣い應接間に通はされた、孔廟内で偶然一所になつた第〇軍の軍長C、參謀長W、野戰病院長の某等も來た、護兵達は、戶外に居て物珍らしげに眺めてゐる。

孔氏を名乗る四五名の人や、或は異姓の人が、吾々に引きあわされた、その中には孔庭族長の肩書を持つた人もあつた、何れも一族か三太夫であらう、〇との間に頻りに衍聖公のことに就て、話が交はされる。

衍聖公は今年九歳、兩親は今北京に在ると云ふ。すると、何故に公の父が雙封公でないのか、其理由は遺憾ながら聞き漏らした。

衍聖公は今四書五經を素讀してゐるといふ、極めて聰明な質だと孔家の人がつけ加へた。

やがて九歳の衍聖公が現はれた。此幸福に満ち利溼げに見ゆる少年は、さすがに世襲公の當主にふさわしき鷹揚さを持つてゐる。人々は立つて迎へ目禮をした。

この少年貴族に尊敬の意を表するため、人々は争つて寫眞を撮ることを請ふた。そこで人々は、立てる聖公、安樂椅子に倚る聖公を縦から横から、果ては戶外へ迄連れ出して撮した。聖公は只鷹揚に首肯きつ、される儘に引つ張り廻されてゐた。

食堂に招ぜられた、縣知事の某氏が、聖公の介添へとして主人役を承つた。

總指揮が其座の上席に招ぜられることは問題ではなかつた。次に彼は私を縣知事に、「日本陸軍から

革命軍觀戰のために從軍をしてゐる外賓である」と紹介をしたので、縣知事は私を次の席に招じた、だが、私は斯う云つて、辭退をした。

「私は外邦の一武官に過ぎない、さうか〇軍長を……」

〇は私に譲つたが、私は此場合、幕僚を連れて來てゐる軍司令官の席を塞ぐべきでないと思つたので、〇を促がして強て次席に就かせ、私は第三席に就いた。以下夫々席に就いた。

親しい者の間に、宴會の席次は強て問題ではないが長幼、上下、親疎、正陪を區別する必要のある時、それを辨へない者は、自己の非常識を侮らせるものであることを知らねばならぬ。

宴は開かれた。意地穢い話だが、陣中では久し振りの美味である、焼酒、老酒、何れも豊醇、知事は頻りに張宗昌の悪口を云つたり、聖廟聖林の管理法に就て一人饒舌する。

衍聖公の後ろに、一人のおやぢが附添つて立つてゐる、卓の上に出る料理を別の箸で挟んでは聖公の皿に入れてやる、時に聖公はその箸から直ぐ挟んで口に入れる。聖公の好きなものは、生の小さな赤大根と干物の小蝦で、二つ共冷菜——次々と出てくる大椀物でなく、始めから食卓上に並べてあるもの——である、私も生の赤大根が好物なので、大椀の合ひ間々々に、二人して食つてゐると、とう／＼一つ残つた、其一つも聖公が食つた。

「聖人の子も今食ひ氣盛りだな」

衍聖公は、啞のやうに、黙りこくつて食つた。

やがて午餐が終つた、別室で再び果物と茶の供應に預かり、辭して孔聖林へと向つた。

聖林には、孔廟直屬の巡警が總出て林内を警戒してゐる。

そこでも茶の接待を受け、まだ話し足らぬ聖林管理者と別れた、總指揮は何がしかの酒錢を巡警に贈らねばならなかつた。

大名行列が、狩くらからの歸り路のやうに、緑の野を衰州城へ急いだ。

やがて衰州城内の塔が目睫の間に見える、一行は河の石橋を渡る、私達は下馬して、馬卒に牽馬をさせた、騎乗後に於ける當然の處置である。

約千米の畦道を歩いて停車場に歸り著いた、下着がじつくりと汗ばんでゐた。

且がホームに立つてゐた。

「今日飛機が來たか」

「來なかつた。」

「それはよかつた。」

「君は今日朱さんと曲阜に行つたんだね。」

「うん、立派だね………ものを荒廢させることに天才的な支那………(人とはさすがに云へなかつた)」

にあんな、管理と保存に行届いた所があらうとは、僕は今日迄知らなかつた。」
 「そうか、そんなに立派か、僕は忙しくて行けない」
 「ものを荒廢させることに天才的な」と云つた日本語の皮肉が彼には十分にわからなかつたと思ふ。
 支那の寺廟學校等は自然の荒廢に委してある。支那は古來都市さへも、何等かの理由で破損荒廢する時は場所を移轉した、支那文明發祥の黄河流域に在る大都市の現在、多く古と其の位置を異にしてゐるのである。

三六、支那語は語氣

私達は總司令と別れて袁州城内の總司令部行營に這入つた、私の行李も副官と勤務兵が持つて來てゐる。

私と〇〇姓は支那に多いので同姓が多く出てくる―はまだ來ぬ邵力子の室を當てがわれた。〇は毎日私から日本語を習ふ、聰明な彼、河南の戦争では第四軍の聯隊長迄やつて負傷したこゝさへある男である、まだ三十三歳である、直ぐにいろはを覺えた。

「おはいよー」
 「おやしゆみなさーい」



識標軍命革の白紅はのもるゆ見く白に襟
 〇謀參 者著の中軍從伐北

變なアクセントをつけて發音するが覺えがなかくいい。

「要らない—不要了。要りません—不要了。さう違ふのか。」

成程日本語には敬語が多い。兎も角夫れを説明したが十分彼の腹に入り兼ねるらしい、且はそれは語氣で區別すればいい、と云つた、成程支那語では語氣で區別する場合が多い。

「今少しあがりませんか。」

「いえもう結構で御座います。—吃饱了、不要了不要了。」

「こんなものは食えない、いらないう。—不要。」

是丈けの意味の相意は語氣で區別する外はない。

だが人を罵る下等の言葉には幾つも深刻なのがある、娘を○する、母を○する等は士君子の口にするべき所ではないが、もつと激しいのになると「まだ生れぬ先の娘—閨女—を○する」と云ふのさへある、もう斯うなれば挑戦だ、腕力に訴へる外はない行き詰まりの時である。

私は○に日本語を教へてゐて、日本語を其儘支那語に翻譯することは非常にむづかしいと思つた、吾々の習つた時の外國語は、字に捉はれて意譯を等閑に附したやうに思ふ。

C—姓は張、名は弛、勉中と號す、氣取つてゐるではないか。吾々日本人から見ても面白い姓名がある、例を擧ぐれば萬全策、嚴重、陳芬漢といふのもあつた。

三七、再び出兵是非問答

四月二十一日、我山東出兵に關する電報が、私の手元に着いた。上海から支那側の手を以て取り次
 がれたものである。其の後前線の視察で暇がなかつたが、それから四五日して後、例の通りHとYと
 MとOと私と、又々我出兵に就て議論が始まつた。

「とう／＼出兵したね。」

「うんしたやうだな。」

「君がいよ／＼一所に行つてくれるやうになつたから大丈夫だ。總司令もそう云つてる。」

「それはありがとう、併し衝突を避けることには餘程注意が要ると思ふ。」

「大丈夫だ、吾々の方は何回も命令を出してゐる。外僑保護の命令に就ては徹底してゐる筈だ。尤も
 第二軍團では無線で云つてやつたが、とゞいたかさうか今の所わからない。併し總攻撃開始前、總司
 令は外僑保護と外人外兵と事を醸さないことに就て命令を出してゐるのだから安心だ。」

「大丈夫であり度いね。」

「日本はなぜ出兵したらう、今の革命軍は大丈夫たがね。」

「僕は大丈夫と信じてあげ度い。が併し君等が大丈夫と信じてゐる一方、日本人には大丈夫と思えな



總司令部佈告

い の だ か ら 仕 方 が 不 足 だ 。

「總司令は衛戍部隊を任命する筈だ、そして此軍隊以外は市街に進入することを許さないことに命令する。」

「其衛戍司令は誰か。」

「まだきまらない、決り次第君に通知する。」

「……………」

「正面の各軍團には連絡將校を配屬することにした。×と○と、今一人後程到着する□とだ。」

「皆日本語がうまいね、それはいい、思ひ付きた。」

「君は津浦線に於て、第一線と一所に行つて貰ひ度い、多分×君と一所になるだらう。」

「よろしい、承知した。」

「所で又議論になるがね、日本軍が又々昨年のやうな配備をすれば、勢吾々は濟南に入城はできなくなつて北伐を阻支される、それが爲めに我軍隊が激昂して衝突を起すかも知れない。」

「僕は昨年の配備なるものを知らない。だがやつと君達が臨城迄行つて失敗したあの時期に、濟南派遣軍の配備でもあるまいではないか。臨城から濟南迄何里あるかね？—コンパスで圖上距離を測る—二百四五十吉米はあるね。」

「話に聞くと、日本軍は、濟南商埠地の外迄、警戒線を擴張してゐたそうだが、それでは我軍は入ることではないではないか。」

「僕は何も聞かないが、恐らくそれは個人の意見だらうと思ふ。だがお互に戦術學の原則から考へると、君等にはお氣の毒だが、それが萬全の策になるね。」

「それは革命軍を敵に考へるならばそうかも知れないが、眞逆日本軍は吾々を敵とは考へまい。」

「敵とは考へないさ、併し出兵の目的を考へて見てくれ。又指揮官としては、居留民と君等の軍隊とを接觸させ度くないのは無理はない。」

「商埠地内の適當の所に集めたらいいではないか。」

「情況に依つては、それもいゝさ。」

「そうなれば吾々は日本人と接觸しなくともすむ。」

「革命軍が濟南に入城する前に、僕は日本軍と連絡を取つて置き度いから青島へ電報を打つてくれ。」

「考へて置こう。」

「僕は斯う思ふ。軍が追撃情態の儘で、濟南に入城すると、兩國の兵が不意に顔を合はせた時に、誤解や昂奮のため衝突を起さないとも限らない、就ては山東軍の撤退と、革命軍の入城との間に、一日間の餘裕を置くやうにする、その斡旋は日本軍がする、之は何も君等の面子を潰すことにはならぬ。」

「思ふがきうだらうか。」

「.....」

「其の打合はせのためにも、僕は青島へ連絡がし度い。」

「その必要はなからう。己に衛戍司令が任命され、衛戍部隊以外の軍隊は入市させないことになつてゐるのだ、衛戍司令に責任を負はせてあるから大丈夫な筈だ。」

「衛戍司令は誰に決まつたか。」

「まだ決まらぬ。」

「突然ぶつ、かつてもいゝかね。」

「日本軍が消極的に警備してゐるなら大丈夫だ。」

「僕は君の言葉を信用することにせう、だが日本軍は、行つて見なければ、どんな警備方法を採つてゐるかわからないよ、併し君等を攻撃しにきたものぢやないから君等の心配するやうな配備はしてゐないだらうと思ふ。」

「田中内閣は日本内地からは出兵しない、と聞いてゐた。」

「誰がいつたかそんなことはあてにならぬ、昨年撤兵の際の聲明がある限り出兵はするかも知れぬと思はねばならぬ。」

「日本民衆は出兵反對だ、田中内閣は潰れるだらう。」

「もう出兵してゐるではないか、お互にうまくやつて間違ひを起させないやうにしゃうてはないか。」

「それはそうだ。併し田中大將は野心があるのだらうと思ふ。」

「革命軍がやつた南京事件の解決をしないからいけないのだ。」

「しないとは云つて居らん。」

「今迄しないのは事實だ。君は南京事件の内情を一ばん善く知つてゐる筈だ。」

「僕は共産黨の陰謀を心配してゐるが、××は亂暴な人だから、僕の忠告を肯かなかつた。」

「もう此上は水懸論になる。又氣まづい思ひをせねばならぬからよそう。」

「日本軍は吾々の妨害をしないか。」

「君等のやうな日本を善く理解してゐる人が、そんなことを云つてくれては困るぢやないか。」

「ほんとうに妨害しないことを、君は保證することができるか。」

「故なく妨害することは、斷じてないことを保證する、君達は、近年日本政府の支那革命に對する態度を知つてゐる筈だ、但し居留民の生命財産に對し危害を加へないこと、日本軍と衝突を起さぬこと之だけは絶對緊要問題として、何處迄も注意して欲しい。」

「こちらは大丈夫だ、所て月末には濟南が取れるぞ。」

「月末に入城ができたなら、僕は濟南中の藝者を總揚げにして、御馳走をする。」

「できる。」

「できればいいがな、僕は一箇月の垢を早く落さねば、からだかむづ痒くて堪まらぬ。」

「不過一個禮拜」（もう一週間ばかりだ）

「快到濟南府了。」（もうすぐ濟南に行けるのだ）

三八、再び排日ポスター

泰安一帶の陣地攻撃は、まだ準備が完了しない。毎日の情報もかわつたものは來なかつた、私は毎日市中を散策した。

排日のポスターが依然として眼につく、總司令部では、部下各團隊に對して、外人と事を醸すものは反革命罪を以て律すると命令して居り、更に日本人の所在を示して再び注意を喚起し、入城部隊の制限、連絡將校の任命等々、之丈けの用意をしてゐる乍ら、日本人に對する悪感や敵愾心を挑發する目的の排日ポスター丈けはやめない、これでは不徹底ではないか、矛盾に氣がつかないのか。

私は再び黙してゐることができなかつた。

「僕は衝突防止に就て總司令部の執つて居られる處置には十分敬意を表する、併し例のポスター丈け

は依然として禁止されないのは、あのポスターが只氣休めのものに過ぎなくて、あつても無くても問題にはならぬと云ふ意味なのか。」

私は幕僚にそういつて尋ねて見た。

「いや、あれは禁ずるやうに命令した、日本人の眼に着く所ではやらないやうにしてある。」

あんな馬鹿々々しい宣傳ビラには、事實反對の人も支那には多い。

「日本人の眼に着く所ではやらないと云ふことは、皮肉にも聞えるが又あんな無價値なものは、さうでもない、併し日本人が強てそれを氣にするなら日本人の眼に當る所丈けはやめる」と云ふやうにも聞える。

だが考へて見れば、若しも此ポスターが兵を挑發するに有効であるならば、尙一層有効の宣傳が口から耳に傳へられてゐるだらう、だからポスター丈けを禁止しても何の役にも立たぬ、況や濟南限りそれを中止すると云ふが如き不徹底な言ひ草では、議論する丈けが野暮である。元々私はポスターなどは末節であると信じてゐるので、強て撤去を要求もしなかつた、又要求をしたとて、おいそれと支那人がそれを容れる筈はない。

不幸なる事件のたねは疾くに蒔かれてゐるのだ、微力な人の力ではさうすることもできないのだ、それを氣にしてゐた、私はお芽出度い男と云はねばならぬ。



一タスポの面一壁

一タスポ日排たれか置に列同と「芳傳孫昌宗張倒打」

私には私の任務の至難なことが次第にわかつて来た。私は民國十四年の十二月 郭松齡が新民府に迫つた時に、彼と連絡して、彼の奉天入りの際我軍との間に衝突を避けさせるために派遣されたことを思ひ出した、あの時も一部のーほんの一部の日本人であると云ひ度いー日本人は變な考を持つてゐた、私は日本人から危害を加へられるかもわからなかつた、併し私は徹頭徹尾官命の下に働くものである、思ふ者には思はせて置け、東京から奉天迄晝夜兼行ぶつ通ほした間、千々に思ひは碎かれた、奉天に到着して其雰圍氣に接した時、私は吾ながら悲壯な覺悟を以て新民府に向はねばならなかつただが郭は殺された、私は途中から引返へした。

「これは革命軍を研究した俺の當然の任務だ、男らしく行け、俺のからだは大正十四年の十二月に死んでゐると思へ。」

私は吾と我心を勵ました、不安を感じてゐながらも、私の小さな努力が酬らられた時が想像されて私の精神は却て爽快を感じた。

「死を決してやれば出来ないことはない。」

只これ丈の信念以外に恃むものはない。

私は最早排日ポスターに就ては一言も云はなかつた。

私は城内の古着屋で、大枚二元を投じて軍服一着を買つた。

光榮ある大日本帝國軍人の軍服は着ることができない、それは此場合致方もない。

三九、馬に關する問答

Hと私との問答

「君の馬はたいそう立派だね。」

「あれは馮さん(馮玉祥)から蔣さん(蔣介石)に贈られた千頭のうちの一つだ。」

南京から嘗て西北軍へ、軍費と軍服と白米とを供給したと聞いてゐるので、さては其返禮であると思つた。併し千頭はちと大袈裟だと思はれる。

「そうか、あれは葦毛だね、い、馬だ、伊犁の馬だね。」

「蒙古馬だらう。」

「いや、伊犁の馬は、蒙古産とは違ふ、蒙古馬は鹿頭だよ。」

「君は馬のことが精しいね。」

「僕は歩兵だから精しいことは知らない。」

「日本は馬に困らないか。」

「困らないことはない、だから馬匹改良と産馬獎勵をやつてゐる。嘗て弊害があると認められて禁止

された競馬の馬券をも復活してゐる。」

「失敬だが、日本ではいくら馬を改良しても、發達はしないね。」

「それは又なぜだ。」

「山ばかりの地勢では、馬はよくなならないだらう。」

「その傾向はないと云はぬ、併しそれも程度問題だ。日本は何十年かの計畫で、産馬改良をやつた、今は最早其末期だ、日本國內には殆んど純粹の日本馬はゐない、これもこれも皆優良種の雜種馬になつてゐる。乘馬、鞍馬、駄馬、と馬の系統に因つて、夫々適當の役種に使役するのだ。」

「蒙古には馬が多い。」

「蒙古馬は耐久力はあるが、体尺が小さい、そして一般に蹄が悪い。」

「日本の軍馬は皆洋馬か。」

「皆洋馬に等しいと云つてい、だらう、東京の街を荷馬車を牽いてゐる馬を見給へ、十年以前とは遙かに馬品が違つて來てゐるよ。」

「南方は馬が少いから騎兵がない。」

「あの地形では、軍隊の足は船だ。」

「山東から北は騎兵が要るね。」

「それは要るだらう。」
 「奉天の騎兵は強いか。」
 「強くないこともないと思ふ。」
 「北方軍閥の兵は精神がないから恐るゝに足らぬ。」
 「鐵甲車がこわいのはなぜか。」
 「それはそうだ。」
 「野戦には脚の早いものが欲しい。」
 「山東を取れば北京迄戦争しないていい。」
 「それはそうかも知れぬ。」
 「騎兵も必要は必要だ。」
 「郭松齡は吳俊陞の騎兵から背後を襲はれてゐる。」
 「東三省には騎兵が幾何居るか。」
 「よくは知らぬ、騎兵師團がいくつもあるだらう。だが支那の騎兵は乘馬歩兵的だね。」
 「それでもいい。」

四〇、軍隊改造難

且參謀が斯う云つた。
 私が日本軍隊に隊附をした時、將校團の何かの宴會に藝者が出たことがあつた。旅團長が鹿爪らしい挨拶をしてゐる間、私の側にある二三の青年將校が、なにかこそくと私語してゐるが、それがすむと、件の若い將校達は、そつと物色して置いた一ばん美しい若い女を引張つて行つて、それを旅團長の前に押しやり、「閣下、今日は閣下の御馳走になつて有りがたう御座いますがおれも御禮をするものがあります、就てはこゝに居ります一とう若い一とう美しい娘を、閣下のお膝元に献上して、吾々の微志と致します、オワリツ。」皆は喝采した。旅團長も手を打つて喜ばれた。不幸にして我が國には上下の間に此の温情が見られない。と
 日本の將校團の簡素な宴會に美人が侍ることは至極稀であつて、殊にこれは今から十數年前の而かも何か特別の場合であつたであらうと思はれるが、是程の温情は我國の軍隊では、敢て珍らしいことではないが、支那の軍隊では絶對に見られない圖である。
 支那の將校は、階級—階級と云ふ字は適切でない、それは今の支那軍中に於ける階級は幸運と情實とが齎らしたもので、何等の根據のないものが多い。—階級と云ふより身分と云ふほうが、少し適切